

小松市内遺跡発掘調査報告書 V

矢田野遺跡
千代オオキダ遺跡
波佐谷城跡

2009. 3
石川県小松市教育委員会

例　　言

- 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 確認調査及び発掘調査、出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金事業により実施した。
- 対象となった埋蔵文化財並びに、調査地、調査原因、調査面積、調査期間、調査担当は次のとおりである。

【矢田野遺跡】

《調査地》 小松市矢田野町
《調査原因》 工場増設（零細企業）
《調査面積》 594.16m²
《調査期間》 2005.10.4～2006.1.17
《調査担当》 宮田明・西田由美子・廣田いずみ

【千代オオキダ遺跡】

《調査地》 小松市千代町
《調査原因》 個人住宅建設
《調査面積》 69m²
《調査期間》 2006.11.9～2006.11.13
《調査担当》 宮田明・川畠謙二

【波佐谷城跡】

《調査地》 小松市波佐谷町
《調査原因》 重要遺跡詳細分布調査
《調査面積》 約70,000m²
《調査期間》 2002.12.20～2003.3.24
2003.10.20～2004.3.26
《調査担当》 川畠謙二

- 発掘調査及び確認調査は、(社)小松市シルバー人材センターより作業員の派遣を受けて実施し、一部臨時作業員も補助員として雇用した。遺構の実測は、各担当者が行った。
- 出土品整理及び報告書作成は、平成20年度事業として臨時作業員を雇用し、川畠・大橋が担当した。また、遺構図のトレースについて、臨時職員立原真理の協力を受けた。
- 写真撮影については、遺構は各調査担当者が、遺物は各執筆担当者が実施した。

7. 本書の執筆担当は、目次に明記してある。
編集については、川畠が担当した。

- 本調査において出土した遺物及び遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
- 現地調査から報告書刊行に至るまでは、下記の機関・個人等の協力を賜った。記して謝意を表する。

株式会社ショーハツ、有限会社大誠工務店、波佐谷町内会、金沢市埋蔵文化財センター、上原真人、岡崎晋明、久保智康、滝川重徳、田村昌宏、宮下幸夫、向井裕知

凡　　例

- 本書に示す座標は、第Ⅱ章・第Ⅲ章は世界測地系（WGS系）に準拠している。第Ⅳ章は、日本測地系（WGS系）である。
- 本書で示す方位は、全て座標北である。水準高は海拔高（T.P.）で示している。
- 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。

目　　次

例言・凡例

第Ⅰ章 位置と環境（川畠）…………… 1

第Ⅱ章 矢田野遺跡発掘調査（大橋）……… 11

第Ⅲ章 千代オオキダ遺跡発掘調査（川畠）… 51

第Ⅳ章 波佐谷城跡確認調査（川畠）……… 64

写真図版 1～6

報告書抄録

第Ⅰ章 位置と環境

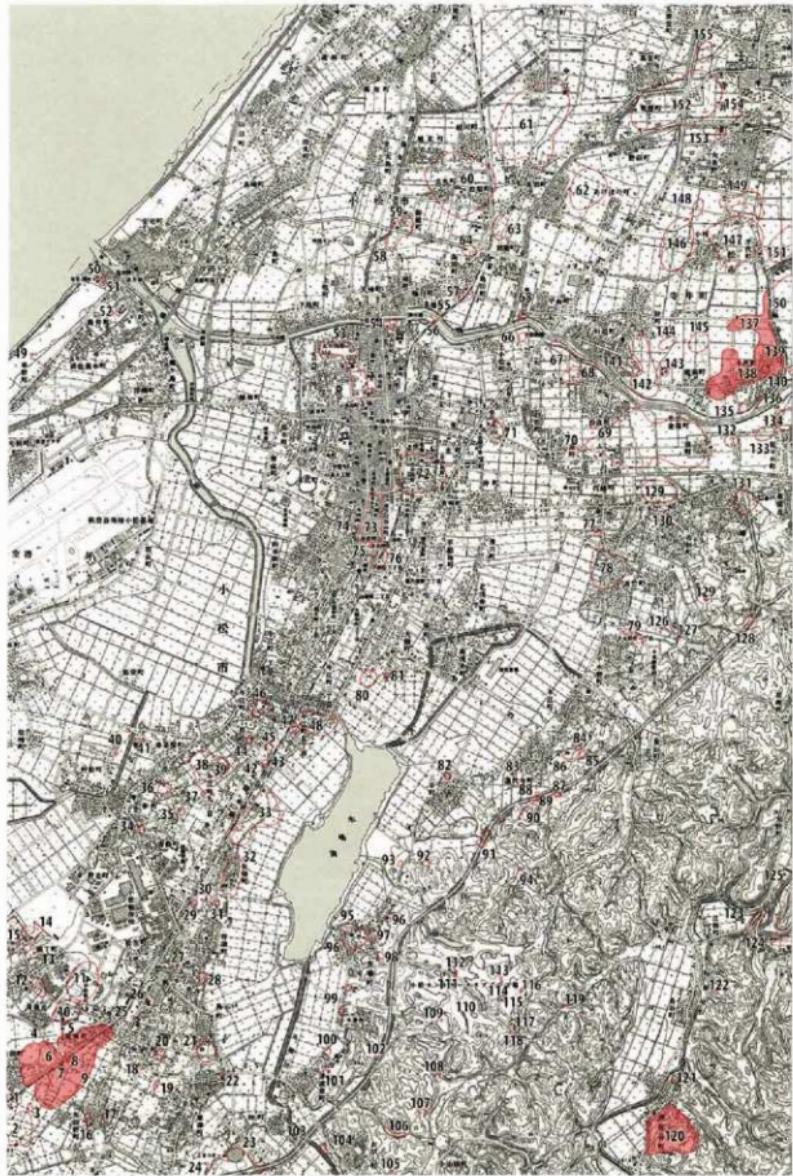
第1節 位置及び地理的環境

小松市は石川県南西部位置し、昭和15年に旧小松町をはじめとする2町6か村が合併してできた、現在、人口約11万人を擁する県下第3の都市である。東縁部・北縁部は白山市・能美市、西縁部は加賀市や日本海、南縁部は大日山（標高1368m）で福井県勝山市と接しており、面積371.13km²の広大な市域を有している。地形は大きく北西部の砂丘・平野と、市域の大部分を占める南東部の丘陵地・山地に分かれる。市街地は沖積平野に形成されている。水系は、全長約42km、流域面積271km²を測る梯川水系である。梯川は白山山系の大日連峰を源に発し、西俣川、大杉谷川、郷谷川、津上川、鍋谷川、八丁川などが合流して安宅町において日本海に注いでいる。上流域では河岸段丘地帯を形成し、中下流域では湯里積平野である小松・江沼平野が形成されている。東には能美丘陵とその背後の能美山地

が存在し、南に小松東部丘陵が連なっており、最奥部に白山を遠望することができる。その秀麗な姿は現在まで変わることなく、古代・中世期を通じて信仰と対象となっている。ただ、里からは空が澄渡った好条件でしか見ることができないため、信仰の山として中山地帯の北方寄りに位置する觀音山（標高402.5m）の存在が注目される（註1）。特に、梯川中流域では、河川の合流地点が多く蛇行した流路をもつことから、水害の多い地域でもあった。故に、背後に肥沃な後背湿地を抱える結果となり、古来より農業の盛んな地域となっている。このことは、遺跡が長期に渡って広範囲に分布する要因の一つであるといえる。また、下流域の下牧町では昭和初期頃までは各家で小舟を所有していたそうであり、古来より舟が重要な交通手段だったことが言えよう。梯川を媒介とし安宅港及び日本海とも繋がっており、水運による物資の交流があった。千代オオキダ遺跡や佐々木遺跡、漆町遺跡等の中流域の調査で、河道や自然流路の跡がよく検出されている。この地域に暮らした人々は、これら旧河道を生活用水や灌漑用水として利用してきたものと推察され、旧河道の間の微高地に集落が形成されていた景観が復元される。一方で西部に位置する月津台地も遺跡が多く存在する区域である。台地は、丘陵部から北にせり出すかたちで形成された標高平均5~10mの中位段丘である。三方を砂丘の移動によって形成された加賀三湖（木場潟・今江潟・柴山潟）に囲まれており、周辺に津の付く地名も多い。处々に小山も存在していたようであるが、商工業開発・宅地化により多くが失われている。また、加賀三湖についても、今江潟の全域及び柴山潟の約3分の2が干拓されており、大きく景観を変えている。



第1図 小松市の位置



第2図 遺跡分布図



第2節 歴史的環境

1. 旧石器～縄文時代

旧石器時代の遺跡は、後期旧石器時代から認められる。灯台釜遺跡（国郭外）や八里向山遺跡群（246～249）、河田山遺跡（226）などが確認されており、高位段丘上に立地している。縄文時代には、梯川左岸では輕海西方寺遺跡（166）で、縄文時代前期後葉の土器片が見つかっている。縄文時代中期前葉～中葉の麦口遺跡（217）、中期前葉～後葉の中海遺跡（209）が確認される。右岸地域でも、八里向山遺跡群（246～248）、里川D遺跡（192）、河田館遺跡（223）、宮谷寺屋敷遺跡（184）、南野台遺跡（171）など縄文中期を中心とする遺跡が確認されている。これらは丘陵縁辺部の平坦地に立地している。縄文時代後期後葉には平野部への遺跡の進出が認められており、千代オオキダ遺跡（137）や大長野A遺跡（146）、牛島ウハシ遺跡（151）等がみられる。丘陵内陸部では、谷部の平坦地に六橋遺跡（124）があり縄文早期、中期～晩期の遺跡が確認されている。

一方、月津台地では、旧石器時代は石器が数点出土しているのみで、遺跡は不明瞭である。縄文時代では中期の念佛林遺跡（11）や今江五丁目遺跡（45）等の短期間小集落の調査例がある。当時、加賀三湖は入江であった可能性が高く、前述の遺跡でも、石錘等漁労関係の遺物が出土している。また、入江に面した所には、柴山貝塚（国郭外）や五郎座貝塚（48）といった「貝塚」と名の付く遺跡も存在する。特に、木場潟周辺の他の時代の遺跡調査においても、縄文時代の遺物は必ずと言ってよいほど出土しており、現在遺跡地図上で記されている以上に、人々の動きがあったものと推察される。

2. 弥生時代

弥生時代は、前期の遺跡は木場潟・今江潟・柴山潟の三湖周辺地区に、中期の遺跡は八日市地方遺跡（72）を拠点集落とする、松梨遺跡（60）、梯川鉄橋遺跡（56）、白江梯川遺跡（67）、銭畑遺跡（58）など梯川下流域の低湿地帯に分布中心が移っている。弥生時代後期以降は、梯川流域で遺跡数が増加し広範囲に分布が認められる時期となる。梯川左岸では漆町遺跡（69）をはじめ、白江梯川遺跡、佐々木ノテウラ遺跡（133）、佐々木アサバタケ（134）遺跡がある。特に漆町遺跡では計画性を持つ溝や掘立柱建物跡が検出されている。右岸では一針C遺跡（141）や千代オオキダ遺跡などが挙げられる。一針C遺跡では後期前半の青銅器鑄造用鋳型が出土している。一方、千代オオキダ遺跡では、旧河道への土器の大量廃棄跡が検出されているが、住居跡は検出されておらず、土器廃棄の主体となった集落は別の地点に存在しているものと考えられる。これらの遺跡は、梯川両岸の自然堤防上に立地している。弥生時代終末期には、八里向山A遺跡（243）や河田山遺跡（226）のような高地性集落も営まれている。

3. 古墳時代

古墳時代には、能美丘陵から小松東部丘陵にかけて、丘陵先端部に多くの古墳が築造されるようになる。能美丘陵では、和田山（256）、末寺山・寺井山（254）、秋常山・西山の独立丘陵に、約60基からなる能美古墳群を形成している。全長110mを測る県内最大の前方後円墳である秋常山1号墳（国郭外）を含み、能美首長の古墳群の中核をなす。また、これら古墳群に先行する月影期（漆町編年3・4群）の墳墓が検出されており、千代オオキダ遺跡を含む、梯川流域の遺跡群との係わりも指摘されている。小松東部丘陵には河田山古墳群（226）があり、総数61基からなる大古墳群である。形態は、前方後円墳・円墳・方墳・前方後方墳があり、特に12号墳は、アーチ状の天井をした切石積横穴式石室を持つ方墳で、類例のない終末期古墳である。また、近年立明寺古墳（193）の確認により、中期古墳の南限が下がるなど、新たな知見が得られている。

月津台地では、三湖台古墳群と称される小規模円墳を主体とする後期古墳群が形成される。江沼古墳群の一群と考えられ、白のはぞ古墳（14）や御幸塚古墳（44）などの中規模前方後円墳もみられる。埴輪を伴うのが特徴で、特に矢田野エジリ古墳（25）では、多数の人物・形象埴輪が出土している。矢田借屋古墳群（6）は、3基の前方後円墳と14基の円墳で構成される古墳群で、三湖台古墳群において唯一群集形態をなす古墳群である。矢田借屋古墳群では、いわゆる「木芯粘土室」の埋葬施設が多いことが特徴であるが、能美古墳群内でも埴田後山明神3号墳（187）やブッショウジヤマ1号墳（199）などで検出されており、共通の埋葬施設を有している。

古墳以外では、千代・能美遺跡（145）が注目される。古墳時代前期（3世紀後半～4世紀前半）の首長クラスの居館と考えられており、出土した装飾木製品の文様から畿内との繋がりも指摘されている。前述の古墳群における造墓主体とも考えられており、梯川流域の集落群の中でも特に注目される存在となっている。このように丘陵部の古墳との関係が注目されているなかで、千代オオキダ遺跡の調査において、漆町編年5～8群の方墳が検出されており、梯川右岸平野部において墓域を持つ首長層の存在が浮かびあがってきた。その他、漆町編年10～13群（4世紀後葉～5世紀後半頃）の集落跡が荒木田遺跡（165）で検出されている。

この古墳時代前期に隆盛した集落群も、この時期を境に縮小傾向となるよう、6世紀後半を境に殆ど見られなくなる。ただし、丘陵部における造墓はおこなわれていることから、集落のあり方が大きく変動した時期といえよう。

4. 古代

月津台地上では、7世紀に入ると念仏林南遺跡（10）、額見町遺跡（15）、矢田野遺跡（9）、薬師遺跡（33）などの集落が成立する。特に、念仏林南遺跡を除く3遺跡では、L字型カマドを設置した堅穴住居跡が検出されており、渡来系移民の存在が注目されている。彼らは、対岸の丘陵部に分布する製陶・製鉄遺跡群の動向に関与していると考えられている。L字型カマドの検出例はないが、製陶・製鉄関連遺物が出土している島遺跡（21）等も同種の集落と考えられ、台地上に広く分布することが判明している。

製陶遺跡については、既に前代の6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡（図郭外）の生産が確認されている。以後、10世紀中頃まで位置を変えながら生産を継続しており、大規模生産地である「南加賀古窯跡群」を形成している。これまで、9世紀後半～10世紀前半ころの瓦生産が加賀立国及び国分寺整備に関連して注目されていた。しかし、近年の二ツ梨豆岡向山古窯跡群（図郭外）の調査において、8世紀初頭の窯跡から焼台に転用された鶴尾片が出土しており、少なくともそれ以前の時期に近隣の窯で焼かれたことが想定される。瓦は出土していないが、寺院の屋根の装飾に係るものを作っていたことは重要であり、江沼平野に存在した寺院との関係が示唆される。製鉄遺跡に関しては、調査例は少ないので、林遺跡（23）（8世紀中頃、9世紀～12世紀前半）や戸津シンブザワ遺跡（図郭外）（10世紀前半）の調査例がある。その分布域はやや製陶遺跡群と異なっており、木場、蓮代寺地区の丘陵部にまで広がっている。また、時期不詳ではあるが、長谷地区にも製鉄遺跡の分布が認められる。

能美丘陵でも7世紀代には須恵器生産が開始されている。律令国家整備段階の当該地域の集落遺跡動向は、前代に引き続きあまり活発ではないが、軽海遺跡（163）、古府シノマチ遺跡（150）、佐々木ノテウラ遺跡で、7世紀代の遺跡が確認されている。佐々木ノテウラ遺跡では、7世紀前半～8世紀前半の掘立柱建物跡や倉庫跡が検出されている。千代オオキダ遺跡では、鍋谷川右岸に近い地区で7世紀後半代の掘立柱建物が検出されているが、バイパス調査区では7世紀後半でも末期に近いころから遺跡が確認され始める。同時期の遺物として、律令的祭祀遺物である土馬がまとまって出土してい

る。また、同時期の能美窯産の瓦が数点ではあるが出土しており、十九堂山遺跡につき二例目の出土である。出土瓦には軒丸瓦が含まれており、鳥坂寺系の重弁蓮華文が施されており、畿内系瓦との関連が注目されるものである（註2）。十九堂山遺跡（174）は、後の国分寺及びその前身の勝興寺跡とも考えられ、対岸の佐々木遺跡（132）では、8世紀末頃の「財部寺」と記された墨書き土器が出土しており、両者との関係が示唆される。また、7世紀後半～8世紀初頭の瓦陶兼業窯が立明寺で発見されており、白鳳期の瓦を生産している。その胎土が十九堂山遺跡出土瓦と近似しており、供給先であった可能性がでできている。

8世紀代に入ると、佐々木遺跡において、柵と堀に囲まれた区画の中に整然と立ち並ぶ掘立柱建物群が出現する。時期は8世紀中頃を中心とする短期間であり、「野身郷」と記された墨書き土器が出土し、律令的要素が強い県内最大級の横板組の井戸も検出されたことから、古代野身郷に関連した公的施設と考えられている。千代オオキダ遺跡でも、ほぼ同時期の横板組の井戸と建物跡が検出されている。荒木田遺跡では、8世紀初頭～9世紀中頃までの掘立柱建物群が検出されている。墨書き土器による祭祀が行われた水場遺構も検出されている。この時期の集落は、律令的色彩を帯びていることが特徴である。弘仁14年（823年）に、越前國から加賀郡と江沼郡の2郡が分立し、加賀国となった。程なくして、江沼郡より能美郡が、加賀郡より石川郡が分出した。立国当初の国府の所在地については諸説あるが、千代オオキダ遺跡東方国府地区の台地上が有力視されている。国衙等の施設はやや遅れた9世紀中頃から整備されたという意見もあり、その視点に立てば、当該地域の集落遺跡が活性化する時期と合致する。先述の佐々木ノテウラ遺跡・古府シノマチ遺跡に加え、古府遺跡（140）・漆町遺跡・佐々木遺跡等があり、再び梯川の自然堤防上に集落が多く形成されている。漆町遺跡からは10世紀前半代の「庄」と記された墨書き土器も出土しており、荘園開発が行われた可能性も指摘されている。この時期の集落は断続的ではあるが、12世紀までは維持される。ただし、多くの集落が、10世紀の後半段階に衰退傾向といわれ、集落再編の様相が見える。ただし、千代オオキダ遺跡のように衰退化とはいえない様相もある。梯川中流域の遺跡は広大な範囲を持つものが多いこともあり、10世紀後半代は衰退傾向というよりは、遺跡範囲内で場所を変えたとみるべきではないだろうか。

一方で、丘陵地には、8世紀前半以降に山林寺院が成立する。里に程近い丘陵の、やや奥まった所に立地する特徴を持つ。松谷寺跡から2間×4間の礎石建物が検出され、北陸最古とされる山林寺院の存在が明らかになった。八里向山B遺跡（246）の9世紀前葉に次いで里川E遺跡（191）、浄水寺遺跡（128）が成立する。前二者は成立後約半世紀で廃絶するのに対して、後者は寺院規模を拡大し、中世へと存続している。9世紀後葉～10世紀前半にかけては、大溝への墨書き土器の多量廃棄が行われ、中国製磁器や国産施釉陶器を持つなど隆盛期を迎えていた。「浄水寺」は雨乞い信仰との関わりが考えられており、国分寺の成立事情が承和年間（834～848年）に起きた大旱魃による飢饉にあるため、両者の関係性が指摘され、隆盛の大きな要因であったことが推測される。国府は、内部施設には変化があったことは考えられるが、「平家物語」や「源平盛衰記」の加賀国守目代と白山中宮八院衆徒らとの対立抗争である安元事件の記載により、12世紀末頃までは確實に存在していることがわかる。

5. 中世

中世においても、当該地域では活発な集落の動きがみられる。12世紀代には白江梯川遺跡・佐々木ノテウラ遺跡・荒木田遺跡・漆町遺跡（白江ネンブツドウ（東）地区、白江チョウジヤワリ地区、金屋ヤシキダ地区、金屋サンバワリ地区）が見られる。荒木田遺跡は14世紀前半頃までの、漆町遺跡は金屋サンバワリ地区を除き14世紀後半まで継続する集落である。佐々木ノテウラ遺跡は13世紀に断絶して、14世紀～15世紀代に集落遺跡として再び成立している。千代オオキダ遺跡や白江梯川遺跡

(16世紀代)、漆町遺跡金屋サンパワリ地区(15世紀代まで)は中世期を通じて存続する集落跡である。13世紀代には、軽海西方寺遺跡・軽海遺跡・佐々木アサバタケ遺跡が成立する。前二者は概ね15世紀代まで、後者は、16世紀代まで存続している。

特に白江梯川遺跡及び、佐々木アサバタケ遺跡は大規模集落であり、前者では多数の掘立柱建物跡、70基を超える井戸、堀、祠跡及び、多量の陶磁器類等が出土しており、後者では南面する屋敷地が3面並立する構造が復元されており、多数の掘立柱建物跡、井戸及び、多量の陶磁器類等が出土している。有力名主層の存在が推定されており、これらの遺跡は中世荘園である「南白江莊」や「得橋郷」に係わる遺跡と考えられる。他の集落遺跡も、荘園開発に係わる中で成立したものと考えられる。16世紀代になると遺跡の動向は不明瞭になり、捕捉不可能となる。当該期のある時点では各遺跡が現集落部分へ集落化していったものと考えられる。

一方月津台地上では、額見町遺跡が12世紀まで存続している以外は、中世遺跡の動向が不明瞭となり、永禄7年(1546年)に朝倉義景に平定された記録や天正4年(1576年)に一揆方の内田(山)四郎左衛門、林七介(助)が出陣した記録がこのころ御幸塚城(46)まで遺跡を補足することはできていない。

また、丘陵部においては、中宮八院や那谷寺等の寺院が存在したことが文献で知られるが、調査例がなく詳細は不明である。ただし、八里向山H遺跡(241)、軽海中世墳墓(167)、立明寺中世墓(193)など中世墓群があり、一部発掘調査が行われている。丘陵部入口付近の斜面に立地し、13世紀・14世紀が主体となる。那谷地区周辺では中世窯業である加賀古窯が12世紀末までには成立したようであり、一時中断を挟み14世紀末まで操業し、壺・甕・鉢の日常容器の生産がおこなわれていた。また、一向一揆関連の城郭寺院や山城も多数存在するが、本編で報告する波佐谷城跡(120)や、能美市(旧辰口町)が調査した虚空藏山城跡、石川県が調査した林超勝寺推定地以外は、発掘調査が入った例は乏しく詳細は不明である。

註

註1 久保智康氏教示

註2 上原真人氏教示

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代
1	矢田新野跡	集落跡	古代・中世
2	刀削理(トキリ)遺跡	集落跡	古代・中世
3	長森原古墳	古墳(墳丘削平)	古墳
4	企松原古墳	古墳	古墳
5	企松原古墳	古墳	古墳
6	矢田御宿古墳群	古墳(墳丘削平)	古墳
7	八人塚古墳	古墳(墳丘削平)	古墳
8	矢田古墳群	古墳(墳丘削平)	古墳
9	矢田野遺跡	集落跡	古墳・古代
10	企松原古墳	古墳	碑文・古墳
11	企松原古墳	古墳	碑文
12	月津新野跡	散在地	碑文
13	中町遺跡	散在地	碑文・古代
14	白のまき古墳	古墳	古墳
15	豊見町遺跡	集落跡	古代・中世
16	矢田野神社前遺跡	散在地	平安
17	中村古墳	古墳	古墳
18	島經塚	縄文(消滅)	不詳
19	下津津櫛穴群	第六(消滅)	不詳

番号	遺跡名	種別	時代
20	島B遺跡	散在地	奈良・平安
21	島C遺跡	散在地	古墳・奈良
22	丁(東津)1-2号墳穴	横穴(消滅)	不詳
23	野遺跡	集落跡	古墳・平安
24	野超勝寺跡	寺跡	中世
25	矢田野エジ古墳	古墳	古墳
26	野原城の塔	古墳	古墳
27	石山古墳	古墳(消滅)	古墳
28	島C遺跡	古墳?	古墳
29	月津日出跡	散在地	碑文
30	野赤木遺跡	散在地	碑文
31	野(小)遺跡	集落跡	古墳
32	矢崎河の下遺跡	集落跡	碑文・中世
33	東御遺跡	散在地	奈良・平安
34	南センノヤマC遺跡	散在地	古墳
35	南カシノヤマ日出跡	散在地	古墳
36	南カシノヤマA遺跡	散在地	奈良
37	中行向ノ山遺跡	集落跡	弥生
38	私山遺跡	集落跡	古代

番号	道路名	種別	時代
39	筑山古墳(麻塚)	古墳(墳丘部平)	古墳
40	日末1-2号古墳群	古墳	古墳後期
41	非古墳群	古墳(消滅)	古墳後期
42	土古墳群(胸塚)	古墳	古墳
43	土古墳群(胸古墳)	古墳	古墳
44	鹿谷古墳	古墳	古墳
45	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古代
46	海芋城跡	城跡	室町
47	今江川穴磐	橋樋羣(消滅)	不詳
48	五郎田貝塚	貝塚(消滅)	縄文
49	安宅山古墳	古墳(墳丘部平)	古墳
50	安宅古墳	古墳	不詳
51	安宅山古墳付近遺跡	散布地	不詳
52	安宅の世墓群	墓地	古墳
53	小松原跡	城跡	古墳
54	大垣遺跡	集落跡	古墳
55	梯田風景付道路	散布地	生糞
56	梯田風景道路	散布地	生糞
57	島田山遺跡	散布地	古墳・古代
58	跨頭山遺跡	集落跡	生糞・奈良・中世
59	跨頭山道路	道路	生糞
60	松葉原跡	散在地	生糞・中世
61	中ノ丘遺跡	散在地	古墳
62	其田遺跡	散在地	生糞・古墳
63	長坂田遺跡	集落跡	生糞・中世
64	鳥田山遺跡	散布地	古墳
65	千賀根田川遺跡	散布地	生糞
66	千賀根田用道跡	集落跡	生糞
67	白石根用道路	集落跡	生糞・中世
68	白石要跡	城跡	室町
69	詠町通路	集落跡	生糞・中世
70	白石二通路	集落跡	生糞・中世
71	上小松通路	散布地	平安
72	八日山地方通路	集落跡	縄文・生糞・中世
73	本町城跡	城跡	中世
74	木下町通路	散在地	古墳・中世
75	木上町地内通路	散在地	室町
76	幸町通路	集落跡	中世
77	吉古山通路	集落跡(旧河道)	古墳
78	吉古山跡	集落跡	古墳
79	十才山通路	宿場(古墳・集落跡)	縄文・古墳
80	人塚通路	散在地	奈良・平安
81	丸山城古戦場	史跡定跡	安土桃山
82	三丁通路	散在地	縄文
83	蓬代寺瓦窯跡	瓦窯跡	近世後期
84	木江古跡跡	跡跡(消滅)	古井・木井
85	蓬代寺今木遺跡	駕駁跡	不詳
86	蓬代寺跡	寺跡	不詳
87	蓬代寺ガメショウタケ通路	史跡	根島
88	蓬代寺古戦場跡	跡跡	近世・中期
89	蓬代寺ムシシカツ通路	駕駁跡	古代
90	蓬代寺城跡	城跡	不詳
91	二谷大谷通路	集落跡	平安・中世
92	二谷トガ谷通路	不詳	不詳
93	三谷通路	散在地	生糞・古墳
94	木場古墳	古墳(消滅)	古墳
95	洗浜城跡	城跡	不詳
96	木場温泉通路	散布地	縄文
97	木場C通路	散布地	生糞
98	木場B通路	散布地	平安・中世
99	木場古墳群	古墳	古墳
100	大谷山貝塚	貝塚	縄文
101	津波新村トジョ通路	地式ド式	室町末期
102	津波新村ハマグリゲニ通路	駕駁跡	不詳
103	林山城跡付近	城跡(消滅)	鎌倉
104	月ノ口通路	散布地	奈良・平安
105	月ノ口ヒンドウ通路	駕駁跡	不詳
106	小山田オサザン通路	駕駁跡	不詳
107	小山田スクオモ通路	駕駁跡	不詳
108	小山田コガタニ通路(小山田A通路)	駕駁跡	不詳

番号	道路名	種別	時代
109	本場通路(G地区)	駕駁路	不詳
110	本場通路(下F地区)	駕駁路	不詳
111	本場A通路(本場通路付地)	駕駁路	奈良
112	本場通路(上E地区)	駕駁路	不詳
113	本場通路(D地区)	駕駁路	不詳
114	本場通路(B地区)	駕駁路	奈良・中世
115	本場通路(C地区)	駕駁路	平安
116	本場通路(上E地区)	駕駁路	不詳
117	本場通路(八船地区)	駕駁路	奈良・平安
118	大唐通路	駕駁路	不詳
119	長谷前酒舗の山通路	駕駁路	不詳
120	渡谷谷通路	城跡	室町
121	渡谷山通路	散在地	中世
122	蓮花寺跡	寺社跡	中世
123	五郎城跡(山神山皆谷)	城跡	室町
124	六條通路	散在地	縄文
125	平野寺跡	城跡	不詳
126	鷺生1号墳(河原)	古墳	古墳
127	鷺生古墳・新谷1号墳	古墳	古墳
128	淨水寺跡	寺社跡	奈良・鎌倉・中世
129	打越通路	散在地	鷺生・中世
130	杉谷内古跡	古跡	高麗木柵
131	八幡通路・八幡古墳跡・八幡若竹原	集落跡・古墳・鬼屋	縄文・近世
132	佐木本通路	集落跡	奈良・平安
133	佐木トナツウラ通路	集落跡	奈良・中世
134	佐木トナツウラケヤ通路	集落跡	奈良・中世
135	千代子本町通路	散在地	古墳
136	被原通路	散在地	縄文
137	千代子タケギ通路	集落跡	古墳・中世
138	千代城跡	城跡	室町
139	千代小野町通路(小野町通路)	駕駁路	古墳
140	古市通路	集落跡	平安
141	新C通路	集落跡	奈良・古墳
142	新D通路	散在地	縄文
143	定期坊跡	定期坊	室町
144	新E通路	集落跡	奈良
145	千代・度母通路	集落跡	古墳・六朝
146	大沢野川通路	集落跡	奈良・中世
147	千代ジヨ通路	散在地	奈良・古墳・中世
148	大長野川通路	散在地	不詳
149	半岡川の山通路	集落跡	奈良
150	古原のまの山通路	集落跡	古墳・平安
151	半岡川シラシ通路	集落跡	縄文・中世
152	高室通路	集落跡	奈良・中世
153	小野川通路	散在地	古代
154	小長野通路	散在地	不詳
155	島原四方堂(ヨモドリ)通路	散在地	奈良
156	岐路通路(通路)	集落跡	縄文
157	赤堀谷六郎	被原	古墳
158	稻谷寺跡	寺社跡	奈良
159	稚の木通路	散在地	古代
160	鶴岡寺跡	寺社跡	平安末期
161	昌隆寺跡	寺社跡	不詳
162	大谷1号墳	散在地	奈良
163	岐路通路	散在地	鷺生
164	龜山(カメヤマ)玉造通路	集落跡	古墳
165	先本田通路	集落跡	古墳・中世
166	時海西方寺通路	集落跡	縄文・古墳・中世
167	解海中村若草群	堆積	中世
168	解海坂	古跡	平安
169	西芳寺通路	寺社跡	平安・中世
170	古市ブリード通路	堆積(消滅)	難知
171	赤谷白石通路	散在地	縄文・古墳
172	古市ツバコ通路	散在地	平安・中世
173	十九古山中郷農耕群	堆積	中世
174	十九古山シクダウヤマ通路	寺社跡	平安・中世
175	小野川宝跡	寺跡	平安・中世
176	小野川通路	散在地	平安
177	小野通路	散在地	平安

番号	道路名	種別	時代
129	前田利家公私道	坂	後世
129	埴田トヤクノ通路	敷布地	不詳
160	埴田の東山道	史跡指定地	古墳
161	埴田トヤクノ通路	敷布地	不詳
182	埴田ウラニキ通路	敷布地	平安・中世
183	埴田フキノ通路	敷布地	古墳
184	吉宗今尾敷通路	敷布地	岡文・室町
185	御所(宮所)モクダシヨ古墳	古墳・埴生丘陵	古墳
186	埴生山内通路	古墳	古墳
187	埴生山内古墳群	古墳	古墳
188	埴生通路	敷布地	会文・平安
189	埴生坂	坂	中世
190	單用E通路	寺坂路	平安
191	單用E通路	寺坂路	平安
192	單用D通路	敷布地	岡文
193	塙寺寺跡	寺坂路	平安初期
194	塙寺寺・カボタE通路	敷布地	平安・中世
195	塙寺寺・カボタA通路	敷布地	平安・中世
196	塙寺寺通路	敷布地	岡文
197	笠生寺坂	坂	中世
198	笠生寺跡	寺坂路(跡成)	中世
199	グリショウガヤツ古墳群	古墳	古墳
200	宮の島E-3号古墳	柱冢	平安・鎌倉
201	吉良寺跡	寺坂路	笠原
202	禪院御坂	城跡	不詳
203	禪院御穴	佛穴墓	不詳
204	いたんとうの池古墳	古墳	古墳
205	通寺寺跡	寺坂路	平安初期
206	中世C通路	敷布地	平安・中世
207	中世B通路	敷布地・長瀬寺跡	古墳・中世
208	反美山E中世通路	坂道	岡文
209	中世通路	敷布地	岡文
210	羽根谷E通路	敷布地	岡文・中世
211	羽根谷E穴葬	後六墓	古墳
212	黄瀬寺跡	寺坂路	平安
213	羽根谷寺跡	城跡	中世
214	羽根谷見附跡・仁和寺墓	寺坂路	平安
215	瓜+早坂跡	城跡	中世
216	瓜+中世塙	塙(塙相田)	平安
217	瓜+通跡(木下町通跡)	敷布地	岡文
218	下伏口横大穴	横大穴	古墳
219	石倉城跡	城跡	平安
220	下伏地筋通路	敷布地	不詳
221	佐野八通路	敷布地	佐生
222	佐野八坂通路	敷布地	古代
223	河内御坂通路	敷布地	岡文・中世
224	吉内穴六	横大穴(消滅)	不詳
225	河内C通路	敷布地	不詳
226	河内山通路・河内山古墳群	单墓群・古墳	羽日器・昌・古墳
227	下伏里穴六	横大穴・地下式坑	中世
228	上伏里穴九	京度(消滅)	不詳
229	穴堀幾穴	横大穴	不詳
230	上八里A通路	敷布地	会文
231	上八里横穴六	横穴墓	不詳
232	上八里A-1号古	单墓	不詳
233	上八里D通路	敷布地	不詳
234	里川G通路	敷布地	古代
235	里川C通路	周堤路	不詳
236	里川E通路	灰窯跡	不詳
237	里川A通路	周堤路	不詳
238	上八里E通路	敷布地	岡文・平安
239	上八里D通路	敷布地	古墳・奈良
240	上八里E通路	埴生	奈良
241	八里向山E通路	埴生	中世
242	八里向山D通路	古墳・埴生・佛穴	古墳・中世
243	八里向山A通路	单路	奈生
244	八里向山J通路(地蔵谷古跡)	通路	地蔵
245	八里向山G通路	敷布地	奈生・平安
246	八里向山E通路	单墓群・寺坂路	羽日器・岡文・平安
247	八里向山C通路	单路	古墳

番号	道路名	種別	時代
248	八里向山D通路	集落跡・古墳	羽日器・岡文・平安
249	八里向山E通路	集落跡	羽日器・古墳・平安
250	野日山通路	散布地	古墳
251	河内山下D通路	散布地	岡文・平安
252	河内山下古墳群	古墳	古墳
253	篠谷通路	散布地	古墳
254	前美古墳群	寺坂山・三面山支群	小墳
255	相田山通路	敷布地	岡文・古墳
256	前美古墳	相田山支群	古墳
257	八里向山E通路	单路	平安
258	石子通路	敷布地	中世
259	秋生通路	敷布地	古代・平安
260	烏牛通路	单路	岡文・古墳・中世
261	久次・鬼屋通路	单路	岡文・中世
262	下間鬼屋通路	单路	古墳・古代(平安)
263	下間鬼屋ミシシテ通路	单路	古代(平安)・中世
264	下間鬼屋竹山通路	单路	岡文・中世
265	下間鬼屋竹山古墳群	古墳	古墳
266	石山石張取通路	单路	不詳
267	鶴久山古跡	古迹	古迹(奈良・平安)
268	下唐山通路	散布地	古墳・奈良・平安
269	下唐山E通路	单路	古墳・平安
270	下唐山E通路	单路	古墳・奈良・平安
271	下唐山E通路	单路	古墳・奈良・平安
272	下唐山E通路	单路	古墳
273	下唐山Eモリ通路	敷布地	古墳・奈良
274	和氣田見通路	敷布地	不詳
275	和氣田見古跡通路	古迹	古迹(平安)
276	和氣田見八通路	敷布地	岡文
277	和氣田文星郡敷路	单路	不詳
278	和氣田和氣古跡通路	单路	不詳
279	和氣田谷之古跡通路	单路	古迹(奈良・平安)
280	寺森寺跡古跡	古墳	古墳
281	寺高山古跡	单路	不詳
282	寺高山南城跡	城跡	中世
283	虎空寺山推文跡	横穴墓	不詳
284	下地E-D通路	单路	单路(奈良)
285	下地E-N通路	单路	古迹(奈良)
286	下地E-S通路	单路	古迹(奈良)
287	下地E-T通路	单路	古迹(奈良)
288	福口寺跡	社寺跡	不詳
289	福口通路	敷布地	岡文
290	福尾寺古跡	单路	古墳
291	福尾寺跡	单路	古墳・古跡(平安)
292	福尾寺カウカ通路	单路	その他の墓
293	上地山近世通路	单路	近世
294	丸久谷台通路	敷布地	岡文
295	大字通路	敷布地	岡文
296	旭台古跡	城跡	中世
297	旭台通路	敷布地	岡文
298	旭台E通路	敷布地	古代(平安)
299	白石台古跡	城跡	中世
300	長崎山監寺跡	社寺跡	不詳
301	長崎Eゲロ通路	敷布地	岡文
302	長崎E通路	敷布地	小字跡
303	全廟寺守成の穴葬穴	横穴墓	古墳後期
304	坪野通路	敷布地	岡文
305	坪野E觀音寺跡	社寺跡	不詳
306	上地山A通路	敷布地	古代
307	金剛山坂中世通路	その他の墓	中世
308	德山寺跡	社寺跡	不詳
309	金剛寺合跡	片寺跡	不詳
310	金剛寺跡	社寺跡	不詳
311	金剛寺穴	横穴墓	不詳
312	鷲谷山古跡群	その他の墓	中世
313	佐大寺山古跡	社寺跡	中世
314	鷲谷寺跡	城跡	不詳
315	鷲谷通路	单路	中世
316	鷲谷通路	单路	不詳
317	鷲谷通路	单路	不詳
318	鷲谷通路	单路	不詳
319	鷲谷通路	单路	不詳

番号	遺跡名	種別	時代
316	湖谷貝丘群遺跡	遺跡地	縄文
317	湖谷瓦窯遺跡	遺跡地	縄文中期
318	湖谷古墳群	古墳群	不詳
319	松岡大根穴群(大根山根穴群)	根穴羣	古墳
320	松岡寺跡	寺苑跡	室町末期

番号	遺跡名	種別	時代
321	松岡日輪穴(こたい・谷根穴)	根穴羣	古墳
322	穴山櫻穴	櫻穴羣	古墳
323	池崎耕塚	耕塚	世局
324	曾山櫻穴	櫻穴羣	古墳

引用参考文献

- 浅香年木他1981年『角川日本地名大辞典』17石川県 角川書店
- 浅香年木1993年『加賀国』『講座 日本歴史6』 吉川弘文館
- 石川県埋蔵文化財センター1986年『佐々木ノテウラ遺跡』
- 石川県埋蔵文化財センター1986年『漆町遺跡I』
- 石川県埋蔵文化財センター1988年『佐々木アサバタケ遺跡I』
- 石川県立埋蔵文化財センター1989年『浄水寺墨書資料集』
- 石川県埋蔵文化財センター1992年『千代』
- 石川県埋蔵文化財センター1996年『荒木田遺跡』
- 石川県教育委員会2007年『石川県中世城館調査報告書Ⅲ(加賀Ⅱ)』
- 小松市教育委員会1996年『荒木田遺跡』
- 小松市教育委員会2003年『八日市地方遺跡I』
- 小松市教育委員会2003年『千代・能美遺跡』
- 小松市教育委員会2004年『佐々木遺跡』
- 小松市教育委員会2004年『八里向山遺跡群』
- 小松市教育委員会2006年『千代オオキダ遺跡』
- 小松市教育委員会2007年『市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 北陸中世土器研究会編1997年『中・近世の北陸—考古学が語る社会史』 桂書房
- 1923年『石川県能美郡誌』石川県能美郡役所
- 1925年『石川県江沼郡誌』石川県江沼郡役所
- 2002年『新修小松市史』資料編4 国府と莊園 石川県小松市

第Ⅱ章 矢田野遺跡発掘調査

第1節 調査に至る経緯

平成17年8月23日に小松市矢田野町在住の高橋裕喜雄氏より、小松市矢田野町武五字145、146、147番地での工場増設計画に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせがあった。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「矢田野遺跡」内となっており試掘の必要がある旨を伝えたところ、平成17年8月25日付けで協議書及び試掘調査依頼書が提出された。これを受け、埋蔵文化財調査室は同年8月29日付けで試掘調査を実施する旨を回答した。

試掘調査は、同年9月2日に、試掘坑8カ所を設定して人力により調査を行ったが、全ての試掘坑において遺物包含層が認められたため、さらに遺構の分布等の詳細を確認するため、工場増設区域を中心同年9月9日に重機による試掘溝調査を実施した。これら試掘調査の結果、工事全区域(1,162m²)において遺物包含層及び遺構の存在を確認したため、同年9月12日事業者に試掘調査の結果について通知を行った。同年9月14日付けで、事業者より文化財保護法第93条第1項に基づく「土木工事等のための発掘届」が石川県教育委員会に提出された。

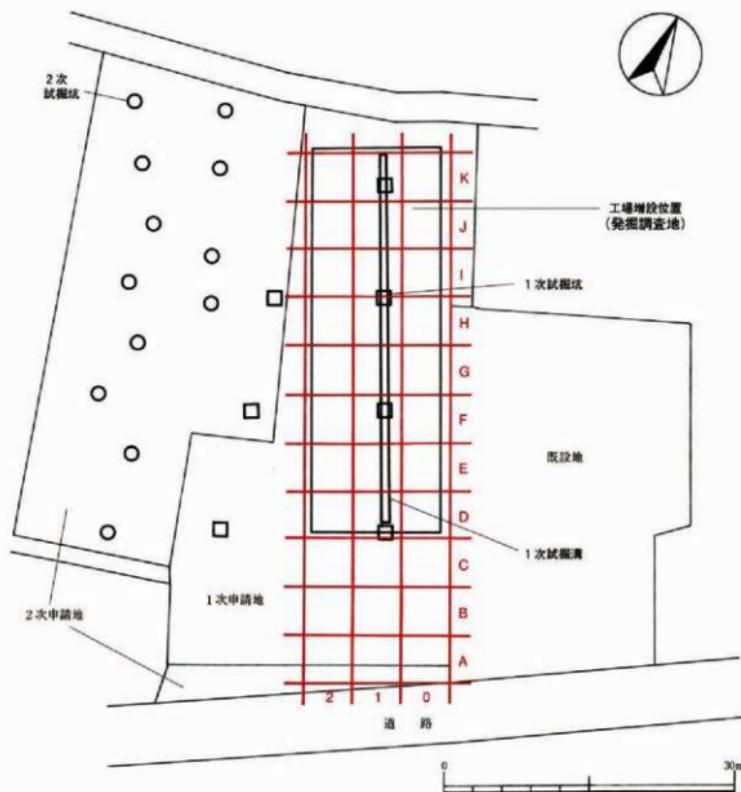
その後、事業者と協議を重ね、当該計画が工場建物であり、工場内に重量のある機械を設置するため、厚い基礎工事が必要であるとのことであり、よって、埋蔵文化財の破壊が免れない基礎工事区域の594.16m²を発掘調査対象とし、他の部分は現況面での簡易舗装のため現状保存することで合意した。また、事業者が個人経営の小規模零細事業者であり、調査費用の負担が困難である旨を申し出たため、石川県教育委員会と協議のもと審査した。この結果、事業者が小規模企業者とするには従業員数において該当外であるものの、調査面積が少ないと調査経費の半分程度を事業者が負担するという条件で、発掘調査を国庫補助事業として行うことになった。これを受け、同年9月22日付けで事業者より、埋蔵文化財発掘調査の実施について依頼書が提出され、同年9月26日付けで双方の間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書を取り交わした。そして、同年9月27日付けで事業者に対し埋蔵文化財発掘調査の実施回答を行った。同年9月29日付けで、石川県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について〔通知〕」が事業者に対して通知された。

発掘調査は、平成17年10月4日から開始した。同年12月25日までに終了する予定だったが、12月14日から3日間降雪し続け、その後も悪天候に見舞われたため、やむなく調査を中断せざるを得なくなってしまった。年をまたぎ、平成18年1月13日に除雪作業を行い、調査を再開して平成18年1月17日に現地調査を終了した。その後、平成18年1月18日付けで、事業者に対し発掘調査結果についての通知を行い、当該地の引き渡しを行った。

以上が1次協議申請地における経緯である。

なお、1次申請地内の発掘調査実施中に、隣接地である道路側の小松市矢田野町武五字144番1、西側隣接地である扇原町124・125・126・127番地における1,142m²についても、駐車場用地を目的として協議書が同事業者より提出された。先に、扇原町124・125・126・127番地において平成17年10月13日付け協議書提出、市教育委員会が同年10月14日付けで回答、同年10月17日付け試掘調査依頼書が提出され、同日これに対する回答を行い、同年10月20日に試掘調査を実施した。試掘調査で、任意に12カ所の試掘坑を設け調査を行った結果、1カ所を除く11カ所から遺物包含層、4カ所から遺構、7カ所から遺物を検出し、当該区のほぼ全体に埋蔵文化財が確認された。その後の協議により、当該区は駐車場用地を目的とした簡易アスファルト舗装する工事であり、遺物包含層までに工事の影響がな

いものと判断されたため、現状保存するに至った。しかし、立木の除去に際してのみ工事立会することとなり、同年12月9日に実施している。矢田野町式五字144番1については、この時実施されていた発掘調査地及び西側申請地の試掘調査の遺構密度状況から判断して、埋蔵文化財の存在は明らかであった。また、発掘調査地の状況から、旧地表が南に向かい緩やかだが徐々に深くなっていることが判明していた点と、1次協議申請地でも発掘調査を行わない区域に続く狭小地である点、やはり目的が駐車場用地であることからも、工事が地下に影響を及ぼさないと判断され、現状保存扱いとなった。この該当区については、同年11月4日に事業者より協議書提出、これに対し同年11月8日には回答を行っている。また、これら2カ所の区域については、10月31日付けで、「土木工事等のための発掘届」が石川県教育委員会に提出されている。以上が、2次申請地における経緯であり、2次申請地はすべて現状保存されたのである。



第3図 矢田野遺跡VI 工事区域及び試掘坑配置図・調査区グリッド配置図 (S=1/500)

第2節 調査の概要と経過

1. 発掘調査方法の概要

調査に際し、調査区内に5m×5mのグリッドを任意に設定した。精査し、遺構プラン検出後、土層断面を観察するため、アゼを設定して遺構掘削を行った。土層断面図を1/20または1/10で作成後、掘削を完了、後に1/20平面図をトータルステーションで作成し、掘立柱建物はエレベーション図(断面図)を1/20で作成した。写真撮影は、ネガ・ポジ・モノクロフィルムとデジタルカメラを用い、土層断面の撮影と遺構完掘撮影を主に行い、この他必要と思われるものを適宜撮影した。出土遺物は、精査段階ではグリッドごとに一括して、遺構検出後は遺構ごとに取り上げた。遺構掘削の際、遺物は可能な限り層位一括で取り上げ、重要と判断された床面遺物などは1/10平面図を作成して遺物番号を付して取り上げた。

2. 遺構番号について

矢田野遺跡では、小松市教育委員会並びに(財)石川県埋蔵文化財センターが、5回の発掘調査を行っている。よって今回の調査で第VI次ということになる。よって、遺構Noは、これまで矢田野遺跡内で発掘調査され検出されてきた遺構数の続き番号となるようにして付すこととした。よって今回は、堅穴建物が18軒目から、掘立柱建物が38棟目からである。ただし、土坑はトータル数がわからなかつたため、6回目の調査ということを加味して601から遺構Noをつけることとした。

3. 発掘作業の経過

調査地は、表土除去された状態で小松市教育委員会に引き渡され、平成17年10月4日より作業を開始した。まず、木株の撤去を慎重に行い、ベルトコンベアを配置するなどの準備を行った。10月11日に遺構検出作業を開始する。遺構確認面まで包含層を掘削して精査し、遺構プラン確認作業を行った。堅穴建物プランや柱穴プランが次々と検出されて、10月13日にはプラン確認作業を終了する。10月18日から堅穴建物の掘削を開始した。10月24日には掘立柱建物の柱穴を半裁し始めた。同日SB38で2本の柱穴・柱痕が検出され、建て替え建物と判明する。SI18内に大型土坑SK603の存在が確認され、11月4日に掘削を開始する。11月8日、SI20が壁周溝を伴うことが判明、同時に壁周溝から木舞と思われる小ビット列が検出され、掘削を開始する。同日SK603の床・壁全体が被熱することが明らかとなり、周囲からも小土坑が検出される。11月21日には、落ち込みを持たない大規模被熱も検出されてSJ601と遺構番号を付した。同日、SI20の床下調査を行っていたところ、主柱穴と考えられる規模の柱穴が4本検出され、SI20構築以前に大型建物が存在していたことが判明したため、これをSI21とした。12月1日に遺構掘削は終わり、12月4日に平面図や掘立柱建物のエレベーション図の作成を開始、12月7日には調査区全体の完掘写真を撮影した。あと少しで作業も終わろうという中、12月13日午後から雨が雪に変わり、一夜にして大量に積雪した。その後3日間、雪は降り続き、近年稀にみる大雪となってしまった。調査地は吹き溜まりも含め60~70cmも雪が積もり、その後も悪天候に見舞われたため、発掘作業を中断せざるを得ない状況となった。翌年1月13日、数日間晴れるとの天気予報を受け、除雪作業を行う。翌日より図面作成を再開し、1月17日に現地調査を完了した。

4. 出土品整理

出土品は、平成17年度に遺物洗浄作業を行い、平成19年度に注記・分類・接合・復元作業を行った。平成20年度には、調査員が改めて分類・復元作業を行い、整理作業員が計測作業を行った。実測作業は、調査員と整理作業員で行い、トレース作業は整理作業員が行った。

第3節 遺跡範囲・概要・既往の調査

矢田野遺跡は、(財)石川県埋蔵文化財センターが県営ほ場整備事業に伴って平成11年度、平成13年度、平成14年度、平成15年度、平成16年度に調査を行っている。矢田野遺跡の調査としては、この度の調査で6回目ということになる。当遺跡は、長径約1km、短径約600mに広がる周知の古代集落遺跡だが、単独の遺跡ではなく、矢田借屋古墳群をはじめ、百人塚古墳、矢田野古墳といった古墳群と重なり合っていることが特徴である。遺跡中央の南西から北東にかけてJR鉄道線が横切っており、県の調査は、主に鉄道線の南側を中心とした位置を調査した格好となる。これまで小松市教育委員会でも、県調査区域から線路を挟んで北側に隣接する区域で、矢田野遺跡・矢田借屋古墳群の調査を行ってきた。平成10・13年度は発掘調査、平成12年度は詳細分布調査を行っているが、古代集落跡の遺構が検出されていないことから、矢田借屋古墳群を報告する形で2000『矢田借屋古墳群』、2006『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ 矢田借屋古墳群』を刊行した。しかし、平成12・13年度調査の出土遺物に、7・8世紀代のものがまとまって検出されており、遺物のみを平成19年度に市内遺跡発掘調査報告書Ⅲで報告した。

前述でも触れたが、矢田野遺跡は、7世紀から8世紀前半を盛期とした集落遺跡である。平成13年度と平成16年度の県調査で、渡来系であるL字型カマドを付設する竪穴建物が2軒検出されたことが知られ、集落としての特徴の1つと言える。同じ月津台地上では、台地西側にあたる額見町遺跡や額見町西遺跡でL字型カマド付設の竪穴建物が検出され、また、台地北東にあたる薬師遺跡からもL字型カマド付設の竪穴建物が検出されている。なお台地上の殆どの遺跡から鍛冶関連遺構・遺物の検出や窯道具等の出土が認められる。台地南東に谷を挟み低丘陵部生産遺跡群が展開しているため、台地上の集落がこれに係わった可能性と、強いては渡来人関与の可能性が高いと判断されるのである。

また、県の調査で、矢田野遺跡では、古墳域と集落域が重複しておらず、古墳群を取り囲むように集落が展開していることがわかっており、集落が機能していた時点では墳丘のみが残存していたものと考えられている。さて、今回の調査地は、矢田野遺跡の範囲で北側にあたり、県調査の北端から北へ約50m地点に位置している。

第4節 発見された遺構

1. 基本層序

現況面の標高は10.050m、深さ15~30cmに現代層である表土、その下に旧表土とも言える盛土が認められる。地元の方の話によると、かなり以前にこの付近一帯で切り盛り工事を行ったということである。旧表土下には、遺物包含層並びに造構覆土層が認められ、厚さは北側で15~20cm、最も南側で25cmを測り、全体的に主体は20cm程度である。遺構の検出状況から、遺構の上面が削平された後に、盛土調整されたものと考えられる。要するに、遺構上面が破壊を受けていた。調査区の東側、南北全範囲において、旧表土から、赤道と呼ばれる家と家の地割り境に設けられた通路が硬化面を伴い検出され、この赤道の西側にピット列にきれいに並んでいる。これらは、いずれも現代のものであり、カクランとして扱うべきものだが、全体図に示されているので、古代遺構とは関連のないことを記しておく。地山土は、最下層に褐色土、1つ上層で暗褐色土、最も上層で黒褐色土と統く、当台地特有の層を呈している。地山土標高では、旧地表は南北に若干傾斜をもち、標高差30cmを測る。なお、本遺跡の基本層序図に関しては、SI19のCライン土層断面図を参照にされたい。



第4図 矢田野遺跡VIの調査地及び矢田野遺跡既往調査位置図 (S=1/2500)

2. 検出遺構

当調査区からは、竪穴建物4軒、掘立柱建物9棟、土坑2基、底面の被熱した土坑1基と周囲の土坑3基が検出された。また、竪穴建物では、床レベルに広い範囲で被熱焼結面が検出された。

底面の被熱した土坑は、建物内に収まる形で検出された。竪穴建物の床を切るように掘り込まれた土坑の底面が著しく被熱するものである。また、同じ竪穴建物内で、床面レベルに広がる被熱焼結を検出した。これは、竪穴中央に設けられるような炉の規模をはるかに超える規模をもつ焼結層である。これら一連の遺構群は、同じ項にて述べてゆきたい。他の竪穴建物では、4本主柱の大型建物、同じく4本主柱と考えられる小型建物、そして壁立式建物と様々なタイプの竪穴建物が検出されている。また、掘立柱建物もまとまって検出されており、このうち2棟においては、同位置での建物の建て替えが行われている。掘立柱建物は、柱圧痕が白色粘土状に残っているものが多く、柱穴の掘り込みも深く大きい。古代初頭の掘立柱建物の傾向である柱間を狭くもつといった特徴をよく反映する建物や、その後出現するような方形プランを呈している建物も認められる。これら検出された遺構は、田嶋編年Ⅳ期（8世紀中頃～後半）の土坑が2基ある以外は、すべて田嶋編年Ⅰ～Ⅱ3期（7世紀代～8世紀初頭）にあたる遺構であり、中でも主体を7世紀後半代にもつ。

(1) 壁穴建物

① SI18・SK603ab・SK604・SK605・SJ601

〈立地・規模・形態と状況〉 SI18は、E-F-0-1Grに位置し、カマドや柱穴を伴わない壁穴状の遺構である。SK603ab・604・605そしてSJ601と重複している。これら遺構群の重複の状況と、それぞれの出土遺物時期や接合状況、そして使用痕跡をもつ遺物が極めて少ないとことから、総じて工房としての機能を果たした可能性が高いと考えている建物と遺構群である。

SI18の内部に柱穴は検出されていないが、この周囲に同時期のSB44が検出されている。このSB44がSI18の柱穴になるのかもしれない。しかし、壁穴プランの主軸と掘立柱建物主軸が全く合わないため、別のものとして報告することとする。

当建物プランは部分的にしか検出されておらず、全体の1/2強にあたる。正方形に近い状態で、規模は490×480～530cm、推定面積24.75m²、主軸はN-135°-WもしくはN-45°-Eである。

〈SI18の状況〉 SI18の床は、すべてが地山床であり、南端壁からSK603の間の一部が、若干硬化している程度である。この若干の硬化を基本面として、標高8.50～8.54mを主体にフラット面が広がり、またこの面より完形遺物がまとまって張り付くように検出されていたことにより、床面と捉えたものである。北壁中央付近では、厚み5～6cmで灰白色(7.5YR7/1)粘土の集堆積塊が検出されており、白色粘土を置いたものかと思われる。貼床を施していないので、当然であろうと思われるものの、壁穴自体の明確な掘方は、確認されていない。南端壁からSK603間で、黒色ベース土がかろうじて検出されており、これが掘方にならうかと思われるが、極めて部分的である。この土は、軟らかい黒色土であり、貼床らしい堅さや質をもっていないものである。

南壁中央から、SK603aを取り囲むように、地山土の盛り上がりが検出されている。床レベルから測り、厚み6～10cmのもので、調査当初はカマドソデと考えていたものであった。土は地山土そのものと現地で判断されており、この部分を残して周囲を掘削したこととなり、判断に困難な痕跡である。但し、SK603aと何か関連があるものと予想している。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具24点、土師器食膳具126点、土師器煮炊具479点、焼成粘土塊57点である。図No3・4・5の坏A蓋は床レベルで張り付いて検出されたもので、田嶋編年Ⅱ1～Ⅱ2と判断され、時期判断には信憑性が高い遺物と言える。

〈SK603aの状況〉 SK603aは、SI18の西南・南東壁の軸に添った形で位置している。規模は、長径215cm、短径200cm、SI18床面より深さ50cmを測り、逆台形状プランを呈す。底面は、東側にテラスが設けられ、緩やかに下がって底は丸く、西側に至ると直立気味に壁が立ち上がる。SK603a右側と、SI18南東壁を繋ぐ形で、T字状の盛り上がった地山が認められることは前述のとおりである。本土坑の底面・西側壁では被熱面が確認された。底面のはば全体が酸化状態で赤褐色を呈し、西側壁は、底面より33～35cmの高さで焼け、最も上面いわば上端近くは焼けていない。また、底面の西側は、特によく被熱し焼結している。なお、この被熱は、地山が焼けているものである。

本土坑の周囲には、小ピットが7本検出されている。P1～P4は、土坑の上端レベルで、相対する位置に配置されているが、他のピットは土坑内からの検出であり、相対するような綺麗な配置となっていない。P3は、周囲の上面並びにピット内壁面が被熱している状態である。P1・2・7は半円形状で径14～18cm程度、深さはP1が28cm、P2が15cm、P7は13cmである。この他は土層断面の通りであるが、P6が20～38cmと最も深く、P5は斜めに入り込む形となっている。

出土遺物は、SK603ab合わせて、須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具10点、土師器食膳具56点、土師器煮炊具は、焼け弾き品39点を含む204点、そして焼成粘土塊68点である。なお、出土遺物の時期は、



第5図 矢田野遺跡VI 全体造構図 (S=1/150)

田嶋編年Ⅱ1～Ⅱ2期と判断される。

〈SK603b・604・605の状況〉これら3基の土坑は、SK603aにびったりとくっつくように、次々と掘り込まれたと考えられるもので、土坑規模としては径50cm弱の小規模なものである。深さは、SK603bとSK604が20cm、SK605が50～55cmである。SK605は、底面に砂っぽい感触の白色粘土を検出しているため、粘土を溜めておく機能をもっていたのではないかと考えられる。また、SK604には、集中して土器が廃棄されていた。

出土遺物は、SK604が須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具20点、土師器煮炊具が焼け弾き品6点を含む125点、そして焼成粘土塊30点である。時期は、田嶋編年Ⅱ1～Ⅱ2期と判断されるものである。なお、SK605からの出土遺物はない。

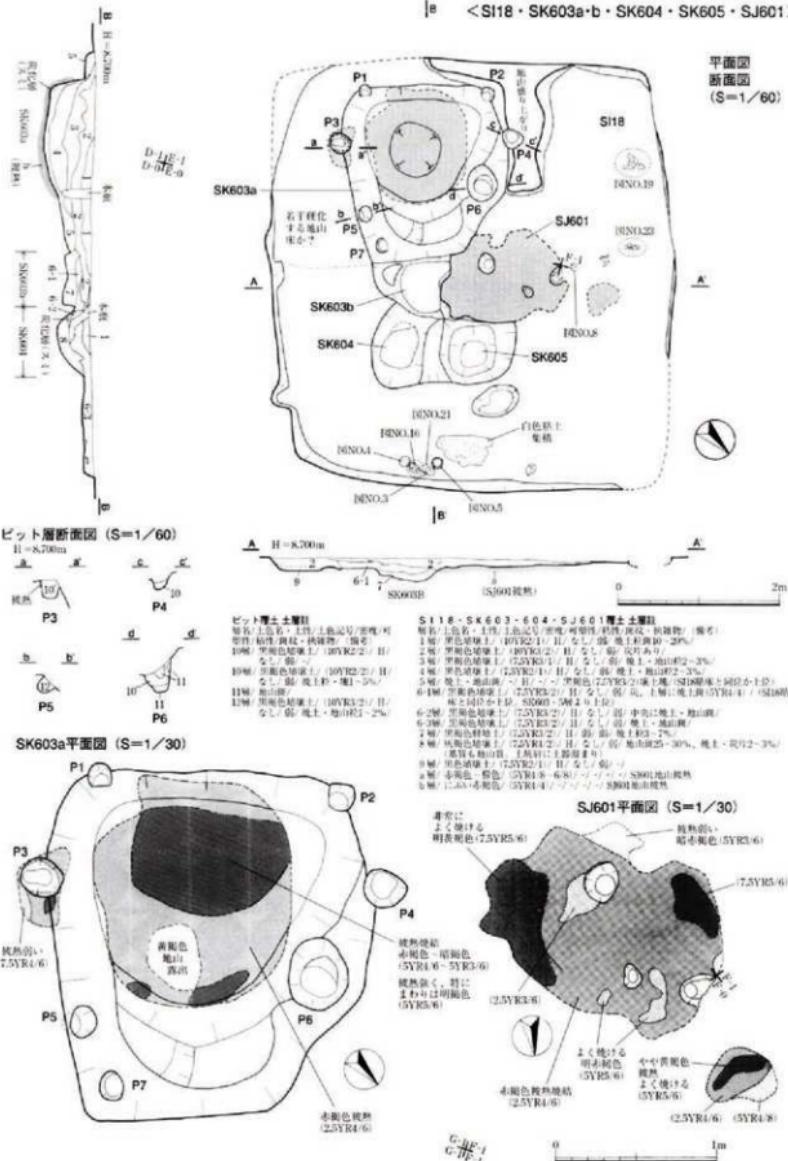
〈SJ601の状況〉 SJ601は、SI18中央の床面レベルが被熱するものである。規模は、長径155cm、短径105cmを測り、地山が被熱している。被熱面は平坦で、焼結して固く、特に西と東端で更に強く焼結して、明黄褐色を呈している。SJ601の北西にも小規模な被熱箇所が認められる。この焼面造構は、図面上はSK603aをはじめ周囲の土坑に切られているように見えるが、SK604の上に若干の構築されており、これら土坑群の中では最も新しいものと現地調査で判断している。

SJ601からの出土遺物は、土師器食膳具が焼け弾き品6点を含む21点、土師器煮炊具14点、焼成粘土塊4点である。

〈覆土〉 SI18の覆土は、SI18の床面レベルから10cm程の厚みを主体とし、最大で14cmを測る。この14cmが最大壁高ともなるわけであるのだが、竪穴内覆土がSK603やSK604内部に落ち込むように流れ込んでいる土層断面を呈している。SK603aの最下層にあたる5層は、炭や焼土、地山塊が多量に入るもので、この層上面にあたる4層との間の部分に、スサ入りの焼成粘土塊の集中を検出している。なお、5層と被熱面の間には、薄い炭層が検出されている。5層を切っているのがSK603bの覆土となる7層である。SK604にあたる8層の上面で、SK603b側にも炭層が認められる。1層～4層と6層は、深い部分に向かって落ち込んでいるため、自然堆積層と判断してよいのだろう。

〈遺物について〉 出土遺物の量については、各造構で述べたような数値となっているのだが、遺物はどの層からも、満遍なく出土している状況である。特筆すべきは、これら造構間の接合が多いということと、焼け弾き品、粘土焼成塊が出土しているということである。また、当遺跡では総数1,500点の土師器が出土しているが、この造構群の合計数が1,068点であり、土師器の71%がこの造構群から出土している。なお、焼成粘土塊の出土においては98%を占め、焼け弾き品もこれら造構群でのみ出土する。接合については、SI18+SK603、SI18+SK604、SK603+SK604、SI18+SK603+SJ601といった組み合わせが見られ、この他SI18+SK603+SK604+SJ601というように、すべての造構間で接合できている遺物も多い。このような場合は、焼け弾き品が多いことが特徴である。また、この他の接合に関しては、SI18+SB39-P8というもののや、SI18+SK603+SK604+SJ601+SB39-P7といったものあり、SB39がこれらの造構群と同時併存していた可能性が高いと思っている。なお、遺物の接合は、土坑の覆土下層と、竪穴建物床面との接合といった具合に、比較的信頼性の高いものが多く見られる。焼け弾き品は、土師器の表面を剥いだように割れている状態、片面のみ調整が残る状態であり、堅微なもののが多いため、焼成温度が高くなりすぎたことにより、弾き焼け飛んだのではないかと考えている。このような焼け弾き品は、土師器焼成造構に多く見られるものであり、また、多く検出されている焼成粘土塊も同様である。

〈造構群の性格〉 以上から、SI18・SK603ab・SK604・SK605・SJ601は、土師器焼成を目的とした施設ということができるだろう。造構の切り合いから、まず50cmの深さをもつSK603焼成坑を構築して



第6図 矢田野遺跡VI 遺構図(1) <SI18・SK603a・SI601> (上段S=1/60:下段S=1/30)

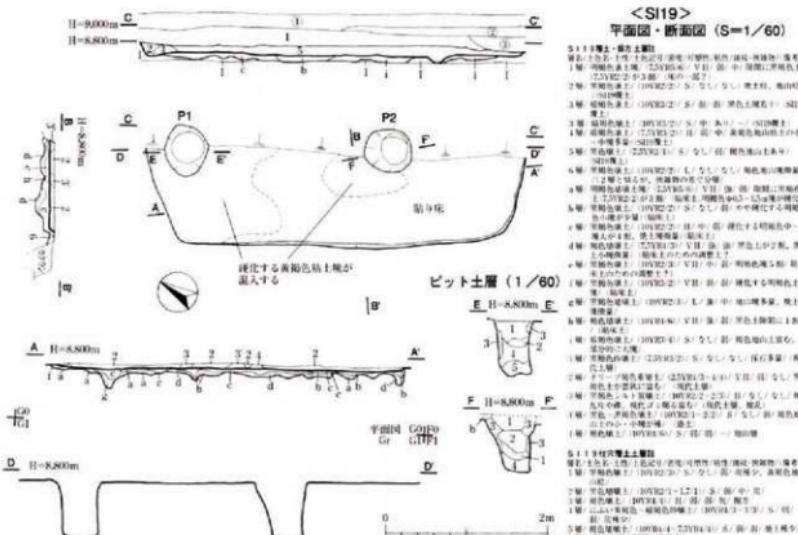
いる。周囲にピットが取り回んで並ぶため、覆屋または焼成方法に関係した構造をもっていたと考えられる。焼成時の覆い焼きに関連して、周りに杭のようなものが打ち込まれた構造であったものか、もしくは仮設天井のような重厚な構造であった可能性も考えられようが、この時の堅穴状建物と関係は如何ばかりであったか。しかし、7世紀後半での土師器焼成坑という事例が、北陸では確認出来ておらず、ロクロ成形から非ロクロ成形へと移り変わる時期の、初現期段階の土師器焼成坑と言えようが、いずれにせよ、特異な例であることは間違いない。

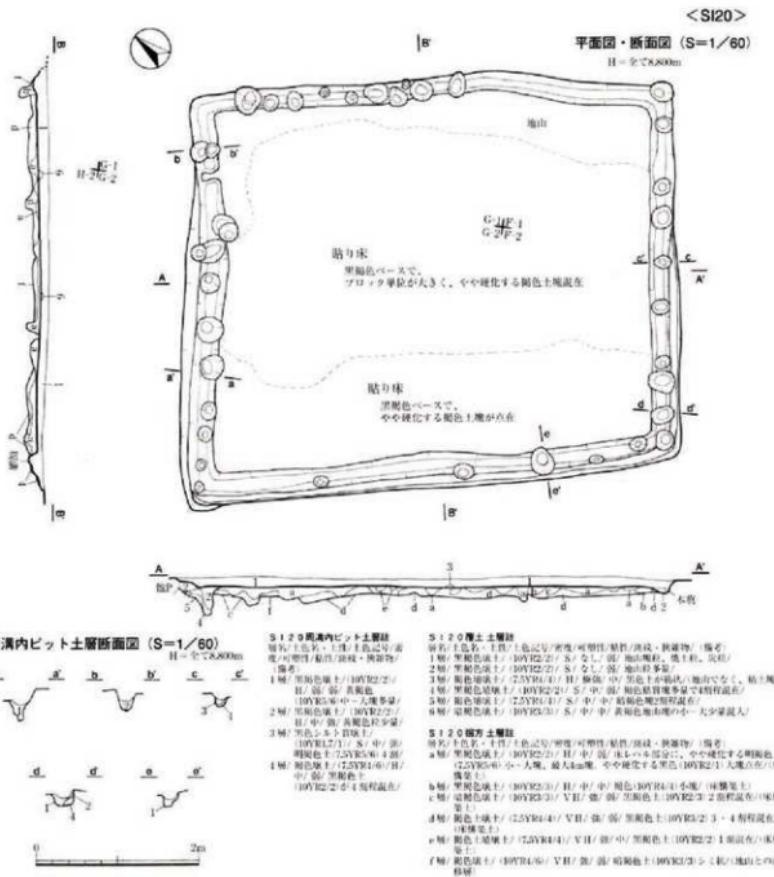
SK603土師器焼成坑を切って掘り込まれているのがSK604で、SK603の埋没後というより、掻き出した灰を溜めるために、時間差で機能したようなものと考えられる。SK604上面の一部にかかるように構築されたのがSJ601の焼面である。堅穴状建物の中央に平坦面もって位置するため、堅穴状建物と併存した可能性は高い。ただし、この形状は本当に平坦であつただけなのか、本来は土塗状で既に周りが削られてしまっているのかは不明である。

② S119

〈立地・規模・形態〉 G-F-0Grに位置、建物全体の約1/4が検出されたものである。堅穴の深が最大で15cmを測る部分もあるが、殆どが2~6cmの深さしかなく、上面の削平が著しい。堅穴プランは隅丸方形状と思われるが、北壁ラインが両柱穴軸に対して歪であり、壁の落ち込みも確認されなかつたため、もっと北側にプランが延びる可能性が高い。主軸はN-58°-Eである。

〈柱穴・覆土堆積と出土遺物〉 本来は4本主柱穴と考えられるが、2本のみが検出されており、残り2本は調査区外である。柱穴規模は、径58~64cm、深さ68cm、柱間規模260cmであり、しっかりとし





第8図 矢田野遺跡VI 遺構図(3) <SI20> (S=1/60)

た掘り込みをもつものである。柱穴の土層では、4層のような掘方埋土が認められ、他は抜き取り後の埋土層を示す。検出された柱穴位置から壁の立ち上がりまでの床間隔が狭いことから、竪穴の中央に対して、ずれて柱穴が配置するタイプと見受けられる。

カマドソテ崩壊土が確認できなかつたため、カマドは調査区外に位置するものと思われ、覆土を見ると、単層を呈しており、建物廃絶後一括埋め戻しがなされたものと判断される。出土遺物は総数で、須恵器食器具2点、須恵器貯蔵具1点、土器師煮炊具2点のみであり、極めて出土遺物は少ない。しかし、握方から出土した壺G身(図No30)が田嶋編年Ⅱ期にあたり、図化はされていないがⅠ期～Ⅱ期に位置づけられる壺Aも出土することから、構築段階ではⅡ期、その後Ⅱ期まで使用された可

能性があると考えている。

〈床の状況と掘方〉 床は全面貼床を施している。北側1/3とP2北側位置で、床の弱い硬化が確認できる。貼床は、黒褐色土をベースに硬化する明褐色土塊が3~4割混在するもので、掘方と貼床が一体となった土層断面と深さを呈している。掘方土坑は認められない。

③ S I 2 0

〈立地・規模・形態〉 F-G-1-2Grに位置し、壁周溝と壁支柱を伴う壁立式建物と考えているものである。プランは正な長方形を呈し、建物規模は、480~510×595~615cm、面積29.95m²を測る。カマドは検出されておらず、主軸はN-49°-E。

〈壁周溝と壁周溝内ビット〉 壁には、幅25~32cm、深さ5~15cmの壁周溝が廻る。深さについては、東側の溝が非常に浅く10cm以内に留まるものの、他の3本の溝は10~15cmの深さを呈している。周溝内では、ビットが検出された。ビットの規模は様々で、浅くて10cm以内、深くて28cmを測り、ビットの径も大小様々である。ビットは等間隔に並ぶものではなく、密度をもって並ぶ箇所もあれば、東側周溝の南側のようにビットが検出されていない箇所もある。このビット列は木舞の痕跡ではないかと考えている。

〈床の状況・覆土・掘方・遺物出土〉 建物の3/4に貼床が認められ、建物東側は地山床である。貼床は、掘方と一緒に土層を呈しており、黒褐色土ベースにやや硬化する黄褐色や褐色の地山塊が混入する土を主体としている。床面は、中央が若干マウント状を示すものの、ほぼフラットと言えるものであり、標高8.6mを基準としている。

覆土は、5~15cmの厚さで、上面がかなり削平されていることを物語るが、床面近くに地山ブロック塊が僅かに見られる以外は、単層を示す。掘方には、掘方土坑など一切認められない。

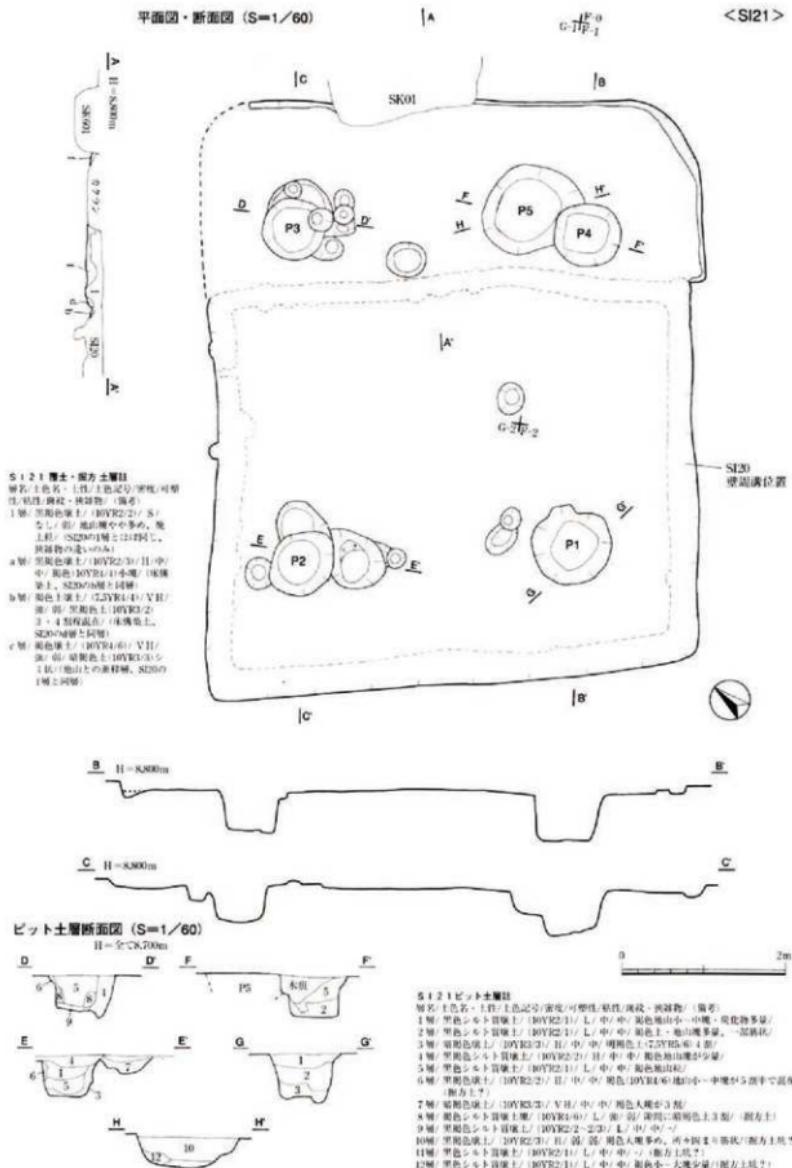
出土遺物は総数で、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具5点、土師器煮炊具16点のみである。床面に張り付いて出土するような遺物はなく、覆土から出土している。時期はI~III期にあたり、坏Hの蓋(図No31)・身(図No32)がI期、7世紀代Da類とDe類相当具をもつ須恵器壺が壁周溝やビットから出土すること、覆土から出土するII~III期にあたる坏Aが2点、底面にケズリをもつ盤もしくは坏Bの身はIII期以降のもので1点、この他、在地型の調整をもつ土師器煮炊具が3点と、ロクロ成形の調整をもつ煮炊具が1点である。

④ S I 2 1

〈立地・規模・形態〉 SI20床下の掘方掘削後に、大型柱穴が検出されたことを受け、改めてSI20建物外の東側を精査したところ、柱穴や部分的な浅い落ち込みが検出された。SI20床面レベルでは柱穴は全く見えなかつたため、SI20構築以前に4本主柱の大型建物が存在したと判断したものである。部分的に検出できた壁の落ち込みは、高さ10cm以内である。規模は推定で、740×590~620cm、建物面積は45m²になろうと思われる。堅穴主軸は、柱穴軸に合わせると、N-50°-Eとなる。北東壁はSK601に切られ、カマド位置は不明で、カマド被熱や、カマドの地山被熱さえも一切検出されなかつた。

〈柱穴・覆土と床・掘方・遺物出土〉 柱穴規模が径80~100cm、深さ50cmを主体にP3のみ40~44cmを測り、しっかりととした掘り込みをもつ。柱間寸法は、縦軸で390cm、横軸350cmを測る。廃絶時には全ての柱が抜き取られ埋め戻されており、部分的に掘方埋土が残存している。

覆土と床の境は明確に確認できない状況であった。覆土そのものは、SI20覆土と非常によく似たものであり、殆ど同じといってよいかもしれない。掘方についても、掘方埋土らしき土層は確認できていないが、I'層が既に掘方埋土である可能性が伺える。床面が検出されていないことから、この建



第9図 矢田野遺跡VI 遺構図(4) <SI21> (S=1/60)

物は、SI20よりも上面レベルで建物床があった可能性も考えられる。SI21廃棄後、SI21の床を剥ぎ取る形で更に掘り込んでSI20を構築したと考えるのが妥当でなかろうか。そして、現代カクランにより、SI20建物外の部分のSI21の床も削平されてしまったと思われる。

小型の床下土坑が2基、いずれも柱穴に接して検出されている。P5は、長径122cm深さ36cmを測る、黒褐色土や黑色土で埋められている状態であった。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具7点のみであり、極めて少ない。

(2) 据立柱建物

① SB38Ⅰ・Ⅱ

2棟の建物が重複するもので、SB38Ⅰの後にSB38Ⅱが建てられている。両者とも西部分が調査区外となるが、当調査区で検出されている他の据立柱建物から予想すれば、4ないし5間×4間の側柱建物となるのだろう。建物規模は、Ⅰが、桁行推定6.2mまたは7.8m、梁行6.0mで、推定面積37.2m²もしくは46.8m²となる。Ⅱは、桁行推定がⅠと同様に6.2mまたは7.8m、桁行6.12mで、推定面積が37.94m²もしくは47.73m²となる。ⅠとⅡは建て替え建物と考えられるが、同じような規模に留まつたようだ。建物主軸は、ⅠがN-40°-W、ⅡがN-39°-Wとほぼ変わらない。

SB38ⅠもSB38Ⅱも、殆どの柱穴で柱圧痕が残っており、柱底面が土に接していた部分が、硬化し、柱設置部分が白色の粘土質となっていて、非常に分かり易い痕跡である。柱径は25cm程である。ⅠもⅡも柱間寸法は、概ね140cmか160cmに決まっているものの、柱筋の通りがよいとは言えない。ⅠではP3とP9が柱の中心を通らず、外側にずれて柱に接する配置をとっている。また、Ⅱでは、P6底面の窪みが「柱のあたり」とすれば、かなりずれることになり、また、P8は内側にずれがみられる。

柱穴規模について、P8はⅠ・Ⅱ合わせて径156cmを測り、それぞれでは、Ⅰが径60~80cm、深さ30~70cmでP5のみ20cmである。Ⅱでは径72~92cm、深さ30~60cmで、P5のみ5cmと極めて浅く異質を呈すが、他には検出されなかったものである。埋土については、ⅠとⅡの分層は困難であった。からうして新旧を確認できたのは、P2やP3であり、殆どの埋土が入り混じった層をなしている。Ⅱ段階でⅠの柱を抜き取り後、柱穴を埋め戻し、柱位置を南東へ少しづらして構築しているため、Ⅰ段階の柱穴内埋土がⅡ段階で見られる埋土と混じる現象が非常に多い。

出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具7点が破片総数で出土する。須恵器食膳具がⅠ期にあたる坏Hの身と蓋、土師器煮炊具はすべて在地型・非ロクロ成形タイプである。

② SB39

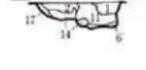
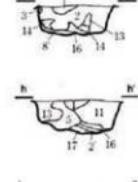
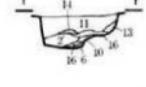
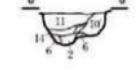
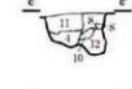
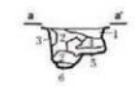
H・I-1・2Grに位置する、桁行9.08m梁行5.8mで面積52.66m²を測る、5間×4間の側柱建物である。SB40・SB41・SB42と重複し、SI20・SI21とほぼ建物軸と同じにもつ。建物主軸はN-52°-E。柱間寸法は120~160cmを主体とし、柱圧痕の検出されている箇所では、全て140cmを測る。桁行それぞれ1カ所ずつでは280cmの値となると箇所があり、中間に柱が1本あればちょうどよいのだが、検出されていない。柱穴プランは擬方形プランが多く、方形を意識するに留まつたものであろう。

柱穴規模では、径が64~80cmで隅柱が必ず80cmとなっている。深さは、60cmを主体として、最も深いもので80cm、最も浅いもので44cmを測るもの、底面が標高8.1mラインに収まって中柱にバラツキをもつといったところである。柱は廃絶時に、抜き取られ埋め戻されており、抜き取り方向に一定性はない。P12で「柱のあたり」が確認でき、この径が25cmである。また、6カ所で柱圧痕が残存しており、この径が20~26cmであった。柱筋の通りは、桁行梁行とも良好である。

出土遺物は、総破片数で、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具3点、土師器煮炊

柱穴 土壘断面図 (S=1/80)

H=全で8,600m



SB38Ⅰ・Ⅱ 土壘

別名：土色名 - 土色 - 土色記号/密度/可塑性/粘性/深部物 - (発見)

1層：黒褐色地盤土 (10YR2/2) / H: なし / 剥: 黄色土塊 (2.5YR4/6) / 4 断面在 /

2層：黒褐色地盤土 (10YR2/2) / S: 中 / 剥: 黄褐色地山小塊が若干 /

3層：黒褐色地盤土 (10YR2/2) / S: 中 / 剥: 黄褐色地山小塊が若干 / 2層と似る /

4層：黒褐色地盤土 (10YR2/2) / S: 中 / 剥: 黄褐色地山小塊多量 /

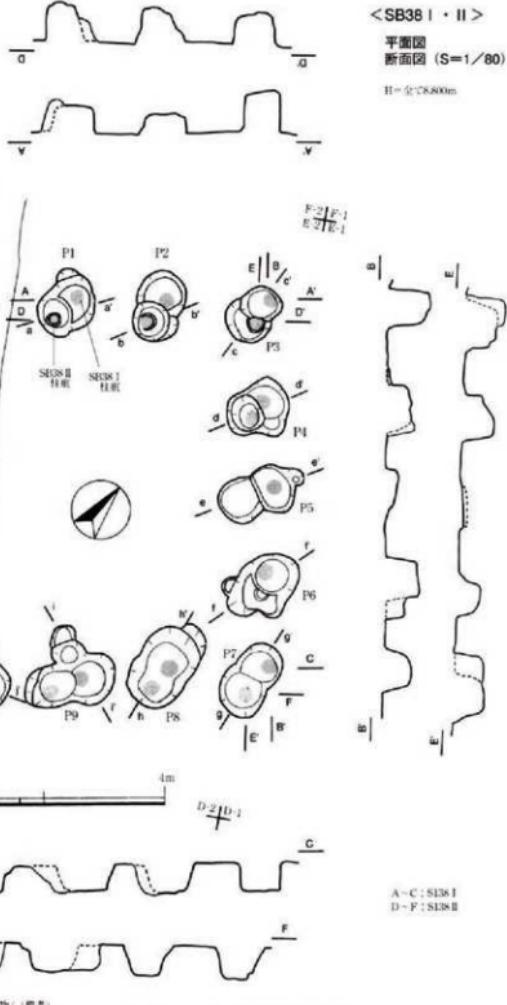
5層：黒褐色地盤土 (10YR2/2) / S: 中 / 剥: 黄褐色地山土塊5/6塊が剥離で混在 /

6層：暗褐色地盤土 (10YR3/2) / S: 強 / 中 / 剥: 黄褐色地山塊少量 /

7層：暗褐色地盤土 (10YR4/6) / V: なし / 剥: 黄褐色地山小塊多量 /

8層：暗褐色地盤土 (10YR2/3) / H: 剥 / 剥: 黄褐色土塊 (10YR4/6)が4割 / (擬方土 小?) /

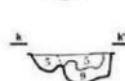
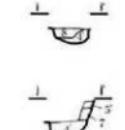
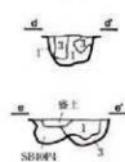
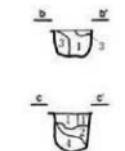
8層：(112.8層)と同層だが、褐色地の比率が6割 /

A-C : SB38 I
D-F : SB38 II

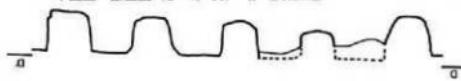
- 9層：黒褐色地盤土 (10YR4/2) / L: 剥 / 剥: なし /
10層：黒褐色土 (10YR2/1) / S: 中 / 剥: なし /
10層：(10層に越山地山土上の中塊が少額合有) /
11層：(11層に越山地山土上の中塊が少額合有) /
12層：黒褐色地盤土 (10YR2/2) / S: 中 / 剥: 黄褐色土塊 (10YR4/6)が5層在 / (擬方土 小?) /
13層：黒褐色地盤土 (10YR2/2) / H: 中 / 剥: 黄褐色土 (2.5YR4/6)の中へ大塊 2 塊 /
14層：黒褐色地盤土 (10YR2/2) / S: なし / 剥: 黄褐色地山の微小塊少量 /
15層：(15層に越山地山土上の中塊が少額合有) /
16層：黄褐色地盤土 (2.5YR4/6) / S: 剥 / 剥: 黑褐色土 /
17層：黄褐色地盤土 (2.5YR4/6) / S: 剥 / 剥: 黑褐色地盤

第10図 矢田野遺跡VI 遺構図(5) <SB38 I + II> (S=1/80)

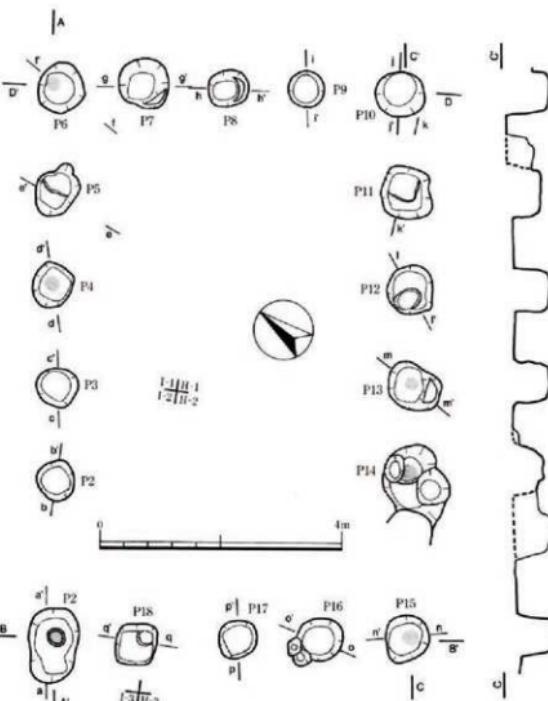
柱穴土層断面図 (S=1/80)
H=全て8,900m



平面図・断面図 (S=1/80) H=全て8,900m



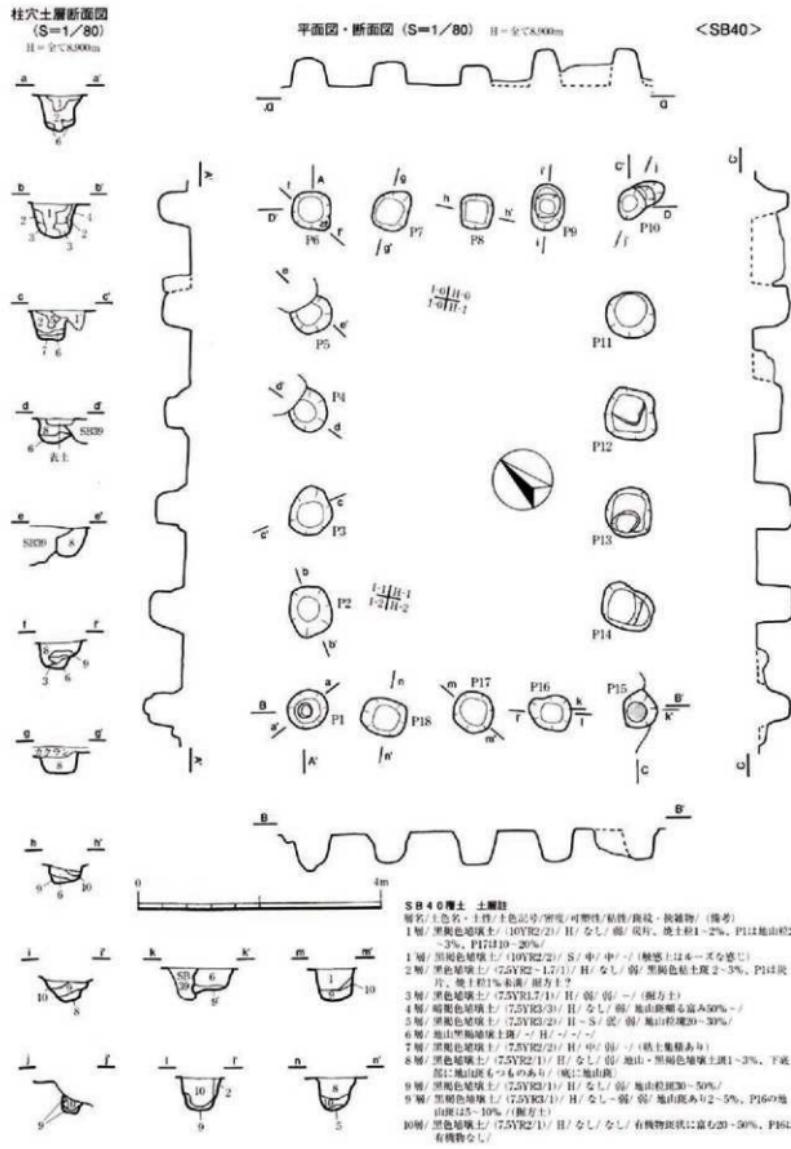
<SB39>



S 8 3 9 地上・土層図

- 層名/色名/土性/上部記号/密度/粘性/複雑度/(施物)
 1層/黒褐色埴楕土/(7.5VR2/2)/Hなし/弱/硬土粉、地山粉、黄土が時に植
 1層/黑褐色埴楕土/(7.5VR2/2)/Hなし/弱/地山塊埴土/(1層に並ぶ)
 3層/深褐色埴楕土/(7.5VR2/2)/Hなし/弱/地山粉一塊地山粉一塊地山粉
 4層/黑色基礎土/(7.5VR2/2)/Hなし/弱/弱(地山の移動範囲きゆうい)
 4層/黑色基礎土/(7.5VR2/2)/Hなし/弱/弱(地山の移動範囲きゆうい)
 5層/深褐色埴楕土/(7.5VR2/2)/Hなし/弱/地山粉2-3%、弱土粉2-5%
 6層/地山塊/(Hなし/弱/黑色壤土混在/(地山)は黒が多量入る土)
 7層/深褐色埴楕土/(10YR2/2)/Hなし/弱/地山块埴土/(P7は下部に粘土有機物重積)
 8層/黑色基礎土/(10YR2/2)/Hなし/なし/地山塊40-50%/
 9層/深褐色埴楕土/(10YR2/2)/Hなし/なし/地山塊40-50%/
 10層/深褐色埴楕土/(10YR2/2)/Hなし/なし/地山塊40-50%/
 11層/深褐色埴楕土/(7.5VR2/2)/Hなし/弱/地山塊20-25%/
 12層/黑色埴楕土/(7.5VR2/2)/Hなし/弱/弱(地山、有機物重積)
 13層/黑色埴楕土/(7.5VR2/2)/Hなし/弱/弱(地山)

第11回 矢田野遺跡VI 遺構図(6) <SB39> (S=1/80)



第12図 矢田野遺跡VI 遺構図(7) <SB40> (S=1/80)

具20点、鉄滓1点、焼成粘土塊2点である。時期はI・II期にあたり、またIV期の盤Aが1点出土しているが混在したものだろう。前述したようにSI18と接合している遺物があること、また、土師器煮炊具では非クロコ形成の破片は3点、クロコ形成のものが17点認められる。

③ SB 4 0

SB39よりもやや東へずれて位置し、SB41・SB42とも重複する。桁行8.2m梁行5.4m、面積44.28m²を測る、5間×4間の圓柱建物である。建物主軸は、N-50°-Eである。柱間寸法は、桁行が160cmに統一されており、梁行は1間分が120cmとなるが、他は140cmに統一されている。柱圧痕はP15のみ検出されて、径が24cm程度である。柱穴プランは擬方形が多いものの、側が揃うということもないため、SB39同様に方形を意識した故と思われる。

柱穴規模は、径65cmを主体に、最大で76cm、最小で60cmを測る。南東桁行の柱穴P11～P14は、SB39柱穴と共有しており、そのために規模が大きい。深さは、52～60cmが主体で、最も浅いもので40cmを測る。柱は、廃絶時に抜き取られ埋め戻されており、抜き取り方向は多方向である。柱筋の通りは、P10がずれているように思われるが、上層カクランのため下底部分のみが検出されている状況なので、全体としては非常に良好と判断される。なお、前述したように、SB39と4本の柱穴が共有されたものと同じ位置にあり、P4・5がSB39柱穴に切られていることから、SB39はSB40の建て替え建物である可能性がもたれよう。

出土遺物は、須恵器食膳具3点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具22点である。須恵器食膳具ではI期、土師器煮炊具では非クロコ形成破片が13点、クロコ形成破片が9点である。

④ SB 4 1

I-1Gr主体に位置する2間×2間の圓柱建物である。建物規模は、桁行4.4～4.72m、梁行3.72～3.84mで、P7のみ桁行と梁行が直行するが、これ以外は直行せず、並んだ平面プランとなる。建物面積は17.24m²で、建物主軸はN-45°-Wをとる。柱間寸法も揃うことではなく、176～256cmを測る。柱圧痕が比較的よく残っており、柱筋の通りについては、P1は外側にずれ、P8は内側にずれるため、柱筋の通りは悪い。しかし、深さがあり、しっかりと掘り込まれた柱穴である。P7では「柱のあたり」が認められ、この径が20cm、他多く検出されている柱圧痕は、径18～22cmを測るため、柱の太さは20cm程度であったと思われる。

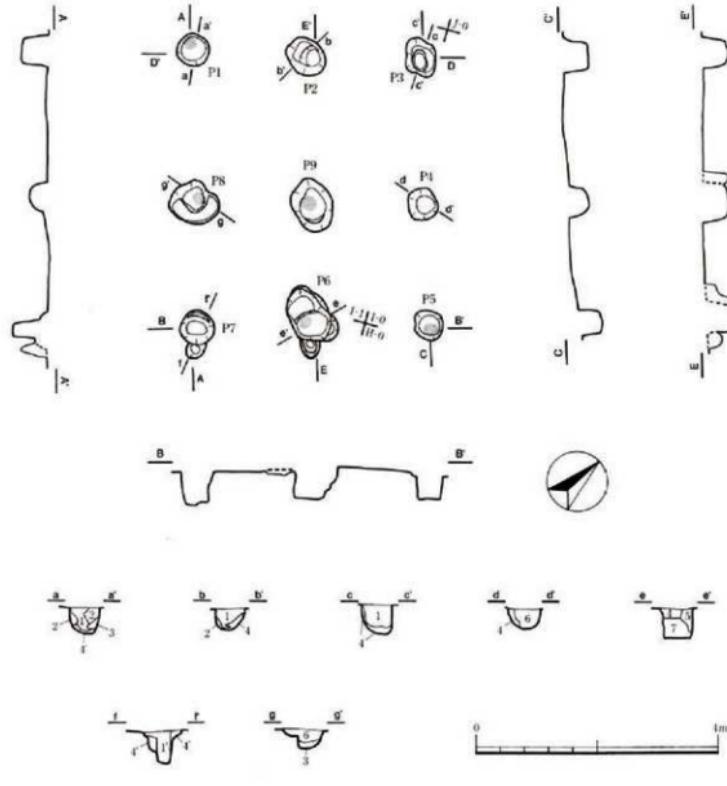
出土遺物は、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具18点。

⑤ SB 4 2

H-I-1-2Grに位置する建物で、SB39-SB40-SB41と重複する。建物規模は、桁行6.2～6.6m、梁行6.52～6.6m、建物面積29.18m²を測る、4間（南東桁行3間）×4間の圓柱建物である。現地調査で、P9南側に良好なピットが続いて2本、P13にも続いて1本のピットが並んでいたため、6間×4間の横配置建物と考えて調査していたのだが、掘立柱穴の深さの方が堅穴建物掘方よりも深いはずにもかかわらず、堅穴建物区域から掘立柱穴が検出されなかつたため、現地で4間×4間の規模として判断したものである。この建物は北西桁行と南西梁行が直行しておらず、また、南桁行は3間で、他の掘立柱と柱穴を同じにもつという、いずれにしても疑問が残る建物である。やはり、6間×4間の可能性は否定できず、そうなれば桁行9.8mとなって建物面積は64.29m²となる。建物主軸はN-53°-E。

柱間寸法は、144～172cmで、東梁行は160cmときちんと配置されている。柱穴は不整円形や擬方形プランを呈し、規模は径60cm前後を主体に、最大でP13の80cm、最小でP3の52cmを測る。深さは、隅柱をやや深めにあっており60cm前後、中柱は40cm程となっている。深さからみても、南桁行の柱穴は、特異な深さを呈している。柱筋の通りは良好であり、柱圧痕が9カ所で検出されている。その径

<SB41>
平面図・断面図
柱穴土層断面図 (S=1/80)
目 = 全て8900cm



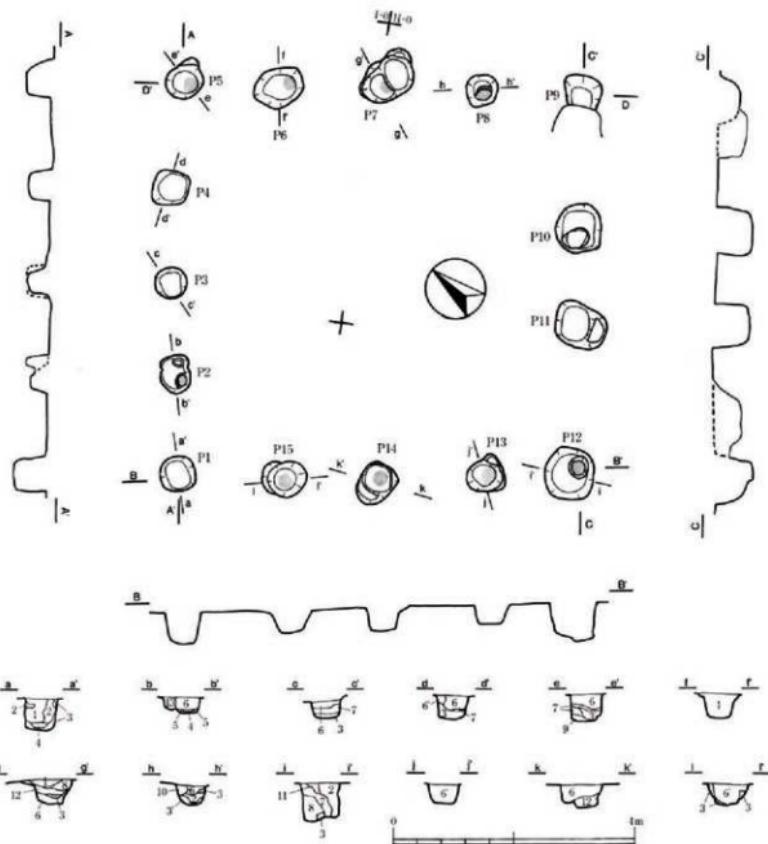
SB41 土層図 土層註

- 層名 / 層厚 / 土色記号 / 特徴 / 可塑性 / 粒度 / 指標物 / (備考)
- 1層 / 黑褐色粘土土 / (10YR2/2) / H-S / なし / 地山1-2%
 - 1層 / 黑褐色粘土土 / (2.5YR2/2) / H-S / なし / 地山1-2%
 - 2層 / 黑褐色粘土土 / (2.5YR2/2) / S / なし / 地山粒度30~40% / (無)
 - 3層 / 黑褐色粘土土 / (2.5YR2/1) / H-S / なし / 有機物有り / (植生地)
 - 4層 / 黑褐色粘土土 / (2.5YR2/1) / H / 剥 / 地山粒度40~50% / (無)
 - 4層 / 黑褐色粘土土 / (10YR2/2) / H-S / なし / 地山粒度20~30%
 - 5層 / 黑褐色粘土土 / (10YR2/2) / S / なし / 地山粒度2-2% / 黑褐色粘土土20~30%
 - 6層 / 黑褐色粘土土 / (7.5YR2/2) / H / なし / なし / 地上粒度2-2% / 黑褐色粘土土20~30%
 - 7層 / 黑褐色粘土土 / (7.5YR2/1) / S / 剥 / 地山粒度30~40% / (黑色粘土土は粘土集積あり)
 - 8層 / 黑褐色粘土土 / (7.5YR2/1) / H / なし / 剥 / 地上粒度1-2%

第13図 矢田野遺跡VI 造構図(8) <SB41> (S=1/80)

平面図・断面図
柱穴土屢層断面図
(S=1/80)
日 = 全て8,000m

<SB42>



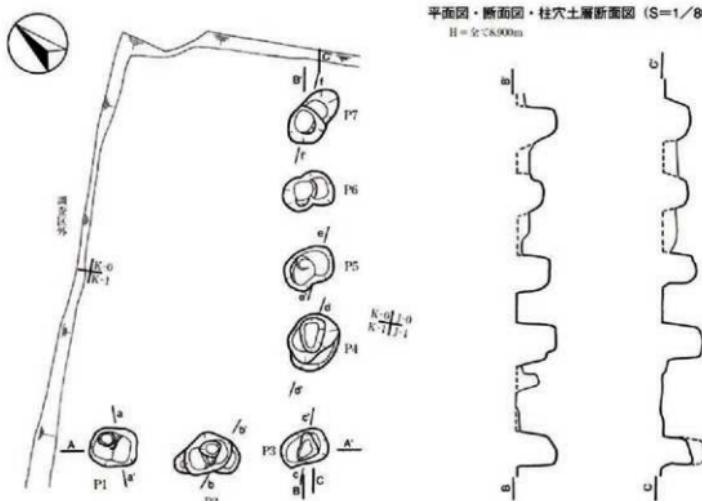
SB42層土 土層注

層名(上色名・土層上部記号)/密度/可塑性/粘性/液限・持続性/（箇数）/（箇号）
 1層/黒褐色砂質土/(10YR3/2)/H/なし/なし~弱/黑色粒1~2%または、塊
 2層/黒褐色砂質土/(10YR3/2)/H/なし/弱/地山粒20~50%/
 3層/地山粒20%超え/H/なし~弱/弱/地山粒20~50%/
 4層/黒褐色砂質土/(2.5YR3/1-3/2)/H/なし~弱/弱/地山粒20~50%/
 5層/黒褐色砂質土/(10YR2/1-2/2)/H/弱/弱/（粘土塊）
 6層/黒褐色砂質土/(10YR2/1-2/2)/H/弱/弱/（粘土塊）
 6層/黒褐色砂質土/(7.5YR2/1-2/2)/S~H/なし~弱/地山
 粒5%以上または種々/
 6層/黑褐色砂質土/(7.5YR3/2)/H/なし/弱/地山粒1~3%/(はんやり地山頭)

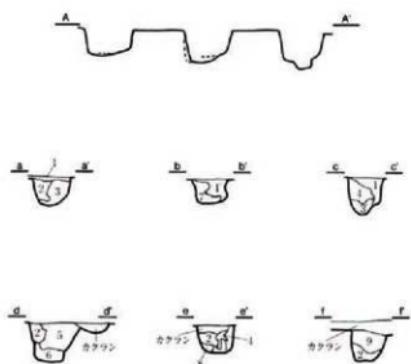
7層/黒褐色砂質土/(10YR2/1-2/2)/S~H/なし/なし~弱/なし、但し
 P12のみ弱/地山・地土・地盤1%以上/
 8層/黒褐色砂質土/(10YR1.7/1-2/2)/S/なし/弱/黒褐色砂質土粒20~50%/
 8層/黒褐色砂質土/(10YR2/1-2/2)/S/なし/なし/地山粒20~50%/
 9層/黑褐色砂質土/(7.5YR3/2)/S/なし/なし/地山粒5~20%/
 10層/黑褐色砂質土/(7.5YR3/1-1/2)/H/弱/弱/地山・地土粒2~3%/(地山底はま
 小引)
 11層/灰褐色砂質土/(10YR2/1-2/2)/S/なし/なし/地山粒40~50%, 地土3~50%/
 12層/黑褐色砂質土/(10YR2/2)/S/なし/弱/地山粒10~30%/
 13層/黑褐色砂質土/(10YR2/2)/H/なし/なし/地山粒5~7%

第14図 矢田野遺跡VI 遺構図(9) <SB42> (S=1/80)

<SB43 I + II>



断面A……SB43 I・II共通
断面B……SB43 II
断面C……SB43 I



SB43 I 残土 土色記

層名/土色名、土性/土色記号/密度/可塑性/粘性/斑紋・模様
(備考)

1層/ 黒褐色埴塗土/(10YR2/2)/ H/ なし/ 順/ P1灰片あり
2-3%、P3灰片(1%)以下、P5少し/

1層/ 黑褐色埴塗土/(10YR2/2)/ H/ なし/ 前/ 地山灰30-
50% H1/

2層/ 黑褐色埴塗土/(7.5YR2/1)/ S/ なし/ 前/ 地山灰/
2層/ 黑褐色埴塗土/(7.5YR2/1)/ S/ なし/ 前/ なし/

3層/ 黑褐色埴塗土/(7.5YR3/2)/ H/ なし/ 前/ 灰土約5-
10%、地山灰30-40%/

3層/ 黑褐色埴塗土/(7.5YR3/2)/ S/ なし/ 前/ 地山灰50%
以上/

4層/ 黑褐色埴塗土/(10YR3/3)/ H/ なし/ 前/ 地土、地山
灰、灰分20-30%/

5層/ 黑褐色埴塗土/(7.5YR2/2)/ H/ なし/ 前/ 地山灰5-
7%/

6層/ 黑褐色埴土/(7.5YR1/2)/ S/ なし/ 前/ 地山灰/

7層/ 黑褐色埴土/(10YR2/1)/ H/ なし/ 前/ 地山灰/

8層/ 地山灰/

9層/ 黑褐色埴土/(7.5YR3/2)/ H/ なし/ 前/ 地山灰/

黑色粒10-20%

第15図 矢田野遺跡VI 造構図(10) <SB43 I + II> (S=1/80)

は23~25cmが主体であった。建物廃絶時に柱は抜き取られており、若干掘方埋土が残存する状態で埋め戻されている。

出土遺物は、破片総数で、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具22点である。

⑥ S B 4 3 I・II

K-0-1Grにあたる調査区の北端から検出された側柱建物である。南桁行4間分、西梁行2間分が検出され、残存桁行5.6m、残存梁行3.4mを測る。建物規模を推定すると、桁行7m梁行6.4m、推定面積は44.8m²になるものと思われる。この建物は2棟の建物が重複している。最初に、柱を深く掘り立てる方が先で、これを抜いて少し内側に柱位置をずらし、柱間寸法を若干縮小して、先よりも浅く柱を掘り立てて、建て替えたものと考えている。土層断面での確認が難しく、唯一dラインでのみ確認できたため判断した。6層がIを埋め戻した土層で、5層・2層がII段階の廃絶時に埋め戻された土と考えている。建物主軸は、N-51°-E。

柱間寸法は、Iが120・140・160・180cm、IIが120・160・180cmである。180cmという長さについては、P3・4間のみであり、SB39と同様に、建物のこの柱間だけを長くとっている。柱穴規模は、I・IIとも径60cm前後を主体としており、深さは、IのP3が最も深くて60cm、他は旧地表に添った掘り込みをもつ。IIは、四隅が深めとなっている。

出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具12点である。

⑦ S B 4 4

F-E-0-1Grに位置する建物で、SI18やSK603と重複し、柱穴2本のみ調査区外で欠けるが、全体の復元は十分可能である。建物規模は、桁行6.6m、梁行5m、建物面積33.0m²を測る、3間×4間の側柱建物で、建物主軸はN-18°-Eをとる。柱間寸法は、120~232cmを測り、南梁行で柱間寸法120cmが2間分と140cmが1間分で、値が揃っているものの、他では揃う所はない。柱穴規模は、径40~44cmが主体で、最大径72cm。深さは28~32cm測り、深いもので16cmである。柱は、建物廃絶時に抜き取られているが、「柱のあたり」を確認することができ、この径が10~14cmである。出土遺物の破片総数は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具3点と極めて少ない。

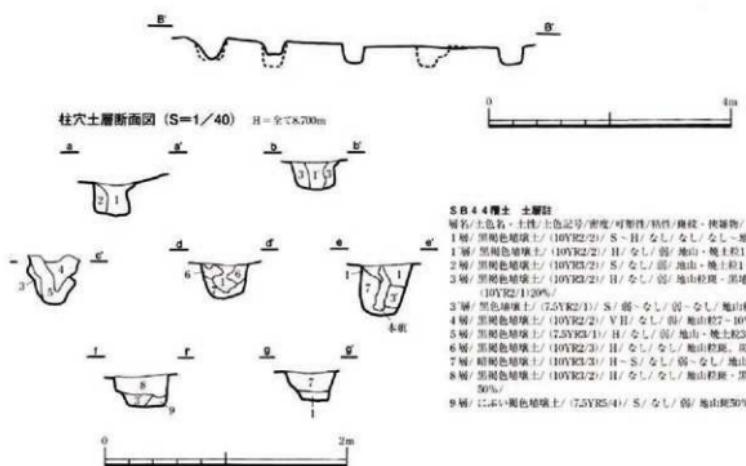
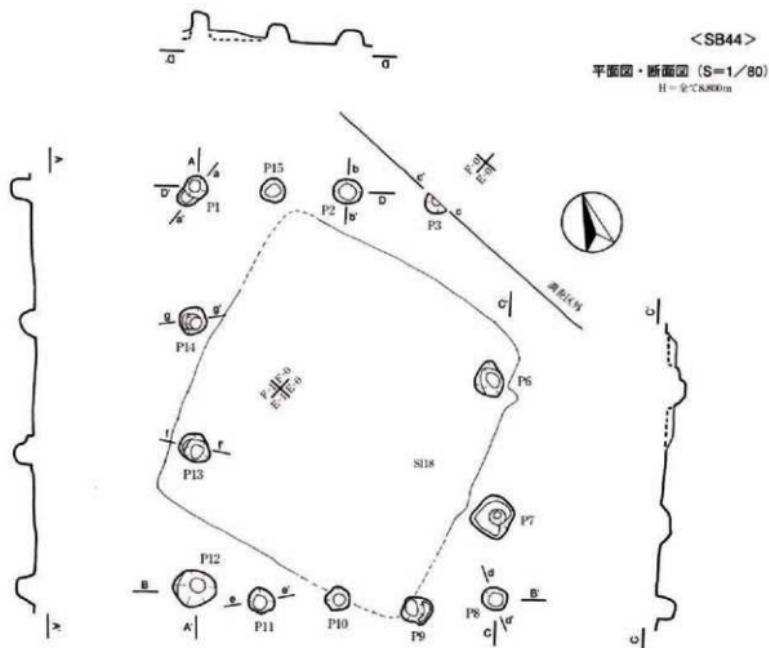
(3) 土坑

① S K 6 0 1

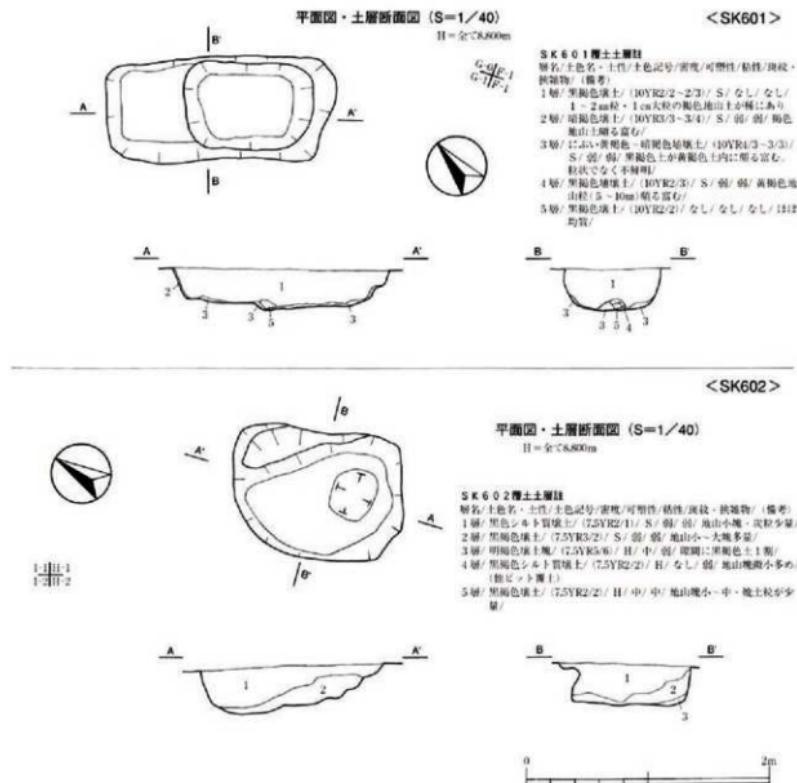
G-1Grに位置、SI21を切って掘り込まれている土坑である。規模は、長径170~188cm、短径80~84cmを測り、深さ30cm程、長方形プランを呈している。底面は平坦で、南側では一段低い落ち込みを有す。遺物が出土していないため、時期は不明だが、主体覆土の1層には、含有物が殆ど混入しない黒褐色土であることや、方形プランの形状から、この土坑は墓壙の可能性がもたれる。

② S K 6 0 2

長径140cm、短径100~106cm、深さ35cmを測る不整楕円形プランを呈し、底面には北から南へ向かい段状の落ち込みをもつ土坑である。覆土は上下2層を主として埋土が認められるが、自然堆積層であろう。出土遺物は、在地型・非クロコロ形成の煮炊具破片2点、ロクロ形成の煮炊具1点、糸切りの平底赤採挽1点出土しており、I~IV期までの時期幅をもつが、IV期とするのが妥当だろう。廃棄土坑とするには非常に出土遺物が少なく、機能は不明である。



第16図 矢田野遺跡VI 遺構図 (11) <SB44> (S=上段1/80, 下段1/40)



第17図 矢田野遺跡VI 遺構図(12) <SK601・SK602> ($S=1/40$)

第5節 出土遺物

当遺跡からは、パンケースで8箱の遺物が出土した。遺物破片数では、須恵器食膳具91点、須恵器貯蔵具129点、土師器食膳具266点、土師器煮炊具1,234点、鐵滓2点、焼成粘土塊161点で、総数1,885点である。遺構別データは、表2を参考にされたい。全体を通して、須恵器出土率が低いということが言え、遺構としてのカマドが1基も検出されていないにも係わらず、土師器煮炊具の出土が非常に多いということが特徴である。集落跡からの出土傾向は、土師器に比べれば大抵低いものだが、それでも須恵器食膳具で出土率が全体の10%弱から20%前後の数値を示す傾向をもつたに対し、当調査区では4.8%と低い。

堅穴建物SI18の項で述べたように、SI18・SK603・SK604・SJ601の出土遺物は、遺構間での接合が

遺構名	施設器		土器器						石製品	鉄製品開港	焼成粘土塊					
	食器片	野菜片	食器片			野菜片										
			計	直口クロ	ロクロ	計	直口クロ	ロクロ								
S116	12	21	126	10	25	479	130	349			57					
S119	2	1	6			2		2								
S220	5	5	0			16	10	6								
S221	1	2	0			7	7									
S238	2	2	0			7	7									
S239	5	2	3	1	1	29	3	17	1	2						
S240	3	0	2	2		22	13	9								
S241	5	2	1	1		18	11	8								
S242	2	0	0			22	12	10								
S243	1	0	2	1		12	9	2								
S244	1	1	1			3	1	2								
S2601	6	0	0			0										
S2692	0	0	1	1		3	2	1								
S2693	12	30	56			204	60	144			68					
S2694	2	1	20			2	12	113			30					
S2695	0	0	21			2	14	4			1					
Po.	6	17	7			106	85	21	1	1						
全食器	32	62	26			174	60	114			1					
	91	129	296			1234			2	163	1885					

4.8% 6.6% 14.1%

65.5% 0.1% 8.9% 100%

非土器器のロクロは確認可能なもののカウント
※S2693の土器器食器片ロクロ形成品は、焼け弾き粘土塊を含む

※S2694の土器器食器片は、焼け弾き粘土塊を含む

※S2695の土器器食器片は、焼け弾き粘土塊を含む

第2表 矢田野遺跡VI 遺構別出土遺物破片数データ表

可能であり、焼け弾き品が多量に出土することや、焼成粘土塊の出土も合わせ、これらの遺構群が土師器焼成坑の関連遺構と判断できた。そして、これらの遺構群から出土する土師器は、本調査区の実に7割以上を占める。逆に、土師器焼成坑以外の出土量は非常に少ないのであるが、上面がカクランを受けて、遺構が削平されていたことが、少ないとことへの要因になるのだろう。

上記のように、当調査区では、土師器が主体で出土するわけだが、ここで、土師器煮炊具について見てみる。非ロクロ成形破片は425点、ロクロ成形破片は809点を数える。非ロクロ成形のものは、所謂、在地型とも言える伝統的な器種、器形、技法を受け継いでいるものである。例えば、胎土に多量の混和材を入れ、口縁が頸部から外側に「くの字」に反り、成形後に内外の継ハケを施して器面を調整する、所謂、在地に古墳時代から受け継いでいる伝統的とも言える技法である。これに対し、ロクロ成形破片は、ロクロ回転による工具痕跡が認められるものである。器面には、ロクロ成形後にハケ調整やケズリ調整を行うなどの器面調整を行なうが、ロクロ成形という新しい技法と古墳時代から受け継がれてきた技法が融合した、両者の技法をもつものもあれば、ロクロ回転による工具痕跡のみを有するだけのものも認められる。

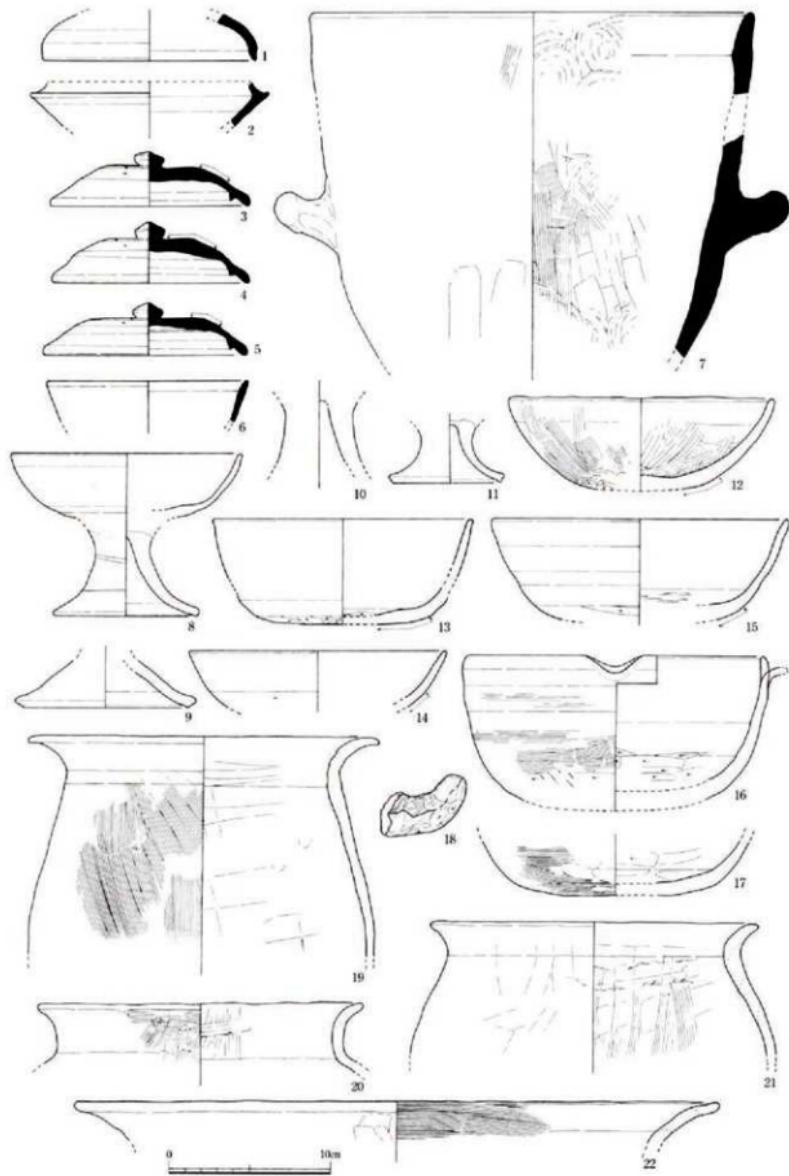
当調査区では、古来の技法から、新技法への過度的な技法をもつ破片が多いということが言え、これが土師器焼成坑と何らかの関わりがあるものと考えている。

1. 壁穴建物出土遺物

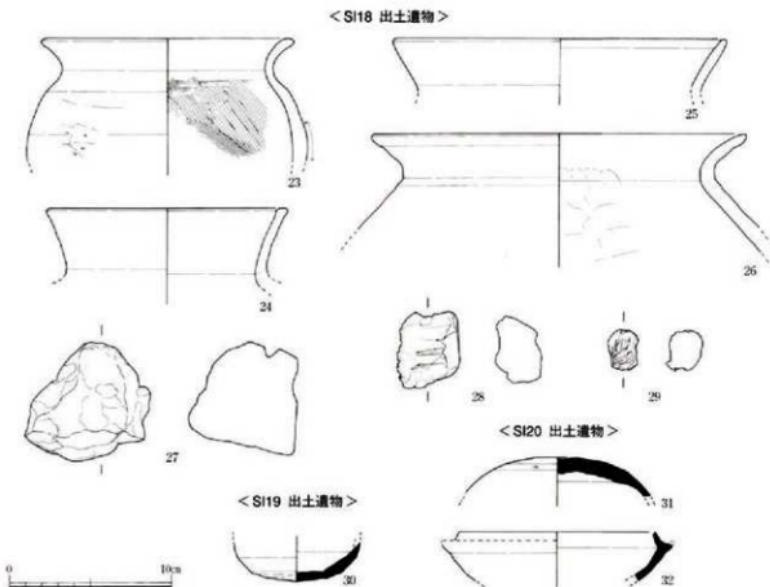
(1) S118出土遺物

① 須恵器

この堅穴建物から須恵器食膳具は、壺Hが2点(図No1・2)、壺Aが7点(実測は図No3~6)出土している。壺Hは、受け部高が短く内傾する最終段階の様相をもち、多く出土する壺Aは器形や鋤など扁平を呈している。このほか、図No7の瓶は、口縁と胴部の接合がしっかりしていないものであるが、



第18図 矢田野遺跡VI 出土遺物(1) <SI18①> (S=1/3)



第19図 矢田野遺跡VI 出土遺物(2) <SI18②・SI19・SI20> (S=1/3)

同一個体と見なしてよいと思われるものである。生焼け品、つまり焼成不良で柔らかく白色に近い灰色を呈するもので、柔らかいために胴部外面の調整はよくわからないものの、ロクロ成形で、内面には当て具、縦ハケ、指ナデ調整が施されている。

② 土師器

土師器の片口鉢(図No16)は、口径18cmを測り、口縁端部が若干内湾気味で、片方に指で下方へ引っ張ったとみられる片口がつけられているものである。三湖台地では通常みられない器種であり、塊にしては法量が大きく、胴部から口縁に至って垂直気味であり、また、小型鍋にしては法量が小さすぎ、その上、片口である。外面下半にヨコハケ後ケズリを伴い、内面にもケズリ調整が認められる。内面ケズリ調整は、「近江系煮炊具」の10様式(TK10古)に成立した古い調整であり、その後12様式(TK209・TK217、7世紀前半)に内外ハケ調整後外面下半のみケズリ調整といった手法が成立したとされ、この調整は近江甕に見られるものである。しかし出土した片口鉢はこのような調整をもつてゐるもの、胎土は在来型であり、近江系煮炊具の調整の影響を受け在地で作られたと思われる。

土師器高杯は、全てロクロ成形の脚部中空の高杯Gであり、図No8は焼け弾き品である。いずれも内外ミガキや内黒品・赤彩品は確認できず、II2期と考えられるものである。

土師器塊は、非ロクロ成形の塊H(図No12)と、ロクロ成形の塊F(図No13・15)が確認できる。塊FのNo13は深身で内面にケズリをもち、No15は深身で体部が開く器形で内面にミガキを施している。両者とも底面にケズリを伴う。まだ、宮都的な様相は認められない段階と考えられる。

煮炊具は、長胴釜、短胴釜、小釜、浅鍋が出土している。この他、口縁端部に面をもつ釜の口縁と考えられるものも出土している。いずれも、非ロクロ成形とロクロ成形のものが認められる。長胴釜は、非ロクロ成形で、頭部内面に横ナデ調整、外面に縱方向のハケ調整を施す、典型的な在来型の手法で作られているものである。短胴釜には、非ロクロ成形とロクロ成形の両者が認められる。非ロクロ成形品の図No20・21は在来型手法であるが、内面はケズリ調整ではなくハケ調整が施されている。小釜は、ロクロ成形で、内面胴部に斜め方向のハケ調整を施し、外面胴部にはハケ調整は見られないが、下半にケズリ調整をもつものあり、近江系煮炊具の影響を受けたものと考えられる。煮炊具からは、典型的な在来型の手法をもつもの、在来型と移民系煮炊具が融合した調整をもつものが認められる。

(③) 時期

以上の出土遺物から、須恵器では田嶋編年Ⅰ期と考えられる坏Hが出土しているものの、数量としてはⅡ以降から出土する坏Aが多いことが上げられる。土師器煮炊具においては、額見2B期（Ⅱ期）では、「当段階では、在来型に内面ハケ目調整を施すものではなく、在来型煮炊具に移民系煮炊具からの顕著な影響は認めがない」とされること、次段階である額見3A期で「定型化した坏Aの出現段階」とされることから、時期は、額見3A～3B期、田嶋編年Ⅱ1新～Ⅱ2期に位置づけることが妥当と考えられる。

(2) S I 19 出土遺物

当建物からの出土遺物は極めて少なく、実測可能であったのは、図No30の坏G底部のみである。器肉は薄く、底面は丸く、ロクロヒダを顯著にもつものであり、焼成は非常に堅密で、紫がかった青灰色を呈しており、内面には灰がびっしりとかかっている。この他、実測不可能だったが、須恵器坏A蓋の口縁端部が出土しており、土師器では内面にハケ調整や當て具痕をもつ煮炊具破片が出土する。時期を決定させるには遺物に乏しいが田嶋編年Ⅱ1期～Ⅱ2期になるものと思われる。

(3) S I 20 出土遺物

当建物からの出土遺物も少なく、実測可能であったのは、図No31の坏H天井部と、図No32の坏H身である。この他には遺構で記述しており、時期の詳細を提示するのは難しいが、坏A破片が2点出土していること、7世紀代と考えられる當て具痕をもつ壺胴部破片の出土と、Ⅲ期の遺物がたまたま混入したものとすれば、Ⅱ2期とするのが妥当と思われる。

(4) S I 21 出土遺物

この建物からの出土遺物も少なく、実測不可能なものばかりであった。遺物の詳細は遺構で述べた通りなのだが、唯一須恵器食器具で出土した坏Aまたは坏Bの口縁破片が1点でⅡ期にあたると思われるもの、壺胴部はDb類當て具がみられるので7世紀代のものである。土師器煮炊具は内面ケズリ調整、外ハケ調整が施されているものばかりで、非ロクロ成形の在来型である。時期を決定付ける遺物は少なく、SI20との切り合いかから考えれば、Ⅱ1期以前とするのが妥当だろう。

2. 売立柱建物出土遺物

(1) S B 3 8 出土遺物

SB38Ⅰ・Ⅱからは、須恵器坏Hの蓋と身が出土しており、両者ともケズリ調整はなく、図No34は受け部が内傾して短く、口径12cmを測るものである。土師器煮炊具は、全て非ロクロ成形の在来型であり、よって時期は、Ⅱ1期までにあてはまるところだろうが、Ⅰ期とするのが妥当と思われる。

(2) S B 3 9 出土遺物

SB39からは、特に土師器煮炊具破片が非常に多く出土する。非ロクロ成形の釜底部（図No40）は、

平底を呈しており、内面にハケ調整が施されるものである。図No39は短胴釜口縁で、くの字口縁という在来型の口縁形態でありながらも、ロクロ成形であり頭部内面にカキメ調整が見られるもの。この他にも土師器煮炊具破片は多く、ロクロ成形破片が非ロクロ成形破片より破片数が多い。ただし、ロクロ成形でありながら、内面ケズリ外面ハケ調整といった在来系調整をもつものや、そうではなく内外カキメ調整のもの、外面にケズリをもつものなども出土しており、移民系煮炊具の影響が顕著に現れているといえようか。勿論この他にも多様な調整をもつものが出土している。平底器形という朝鮮系煮炊具の影響を受けつつも、内面はハケ調整を施すといった、在地化現象と判断できる。よって、SB39は、坏Hの身と蓋や甌といった田嶋編年II期までに位置づけられるものもみられるが、他の出土遺物では額見3A～3B期に時期をもち、田嶋編年II新～II期に位置づけられよう。

(3) SB40出土遺物

SB40からは、坏Hでケズリを伴った底部や蓋の破片、(図No44)は土師器小型鍋で内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を伴う。図化可能だった2点の土師器はいずれも非ロクロ成形のものである。この他にII期以降に出現する坏Bの蓋天井部分や、口縁端部がIV期の特徴をもつ鍋も出土しているものの、各1点ずつである。圧倒的に出土が多いのは土師器煮炊具破片で、在来型の調整をもつものが多い。以上から時期は、SB39との切り合い関係も含め、額見2A期、田嶋編年II期までに収まるものと思われる。

(4) SB41出土遺物

SB41で図化したのは、天井にケズリをもった坏H蓋(図No46)、体部の立ち上がりが弱く内向する額見2A期に相当する坏H身(図No47)、器肉が薄く口縁端部が外反する器形の図No48は坏A身とした。須恵器中壺口縁(図No50)は、口縁端部にかけて内湾気味で内面に段を有するものであり、II期に認められる壺部形態である。土師器の短胴釜底部は、平底を呈して内外にハケ調整が認められるもので、平底という朝鮮系煮炊具の影響と、内外ハケ調整という近江系煮炊具の影響も窺えようか。この他には、土師器煮炊具で非ロクロ成形の在来型調整をもつ破片が多いが、ロクロ成形の破片でも在来型の調整をもつものがある。総じて時期は、額見2A～3B期の田嶋編年II期にあたるが、II期でも初段階のII1期やII2期あたりになるのではないだろうか。

(5) SB42出土遺物

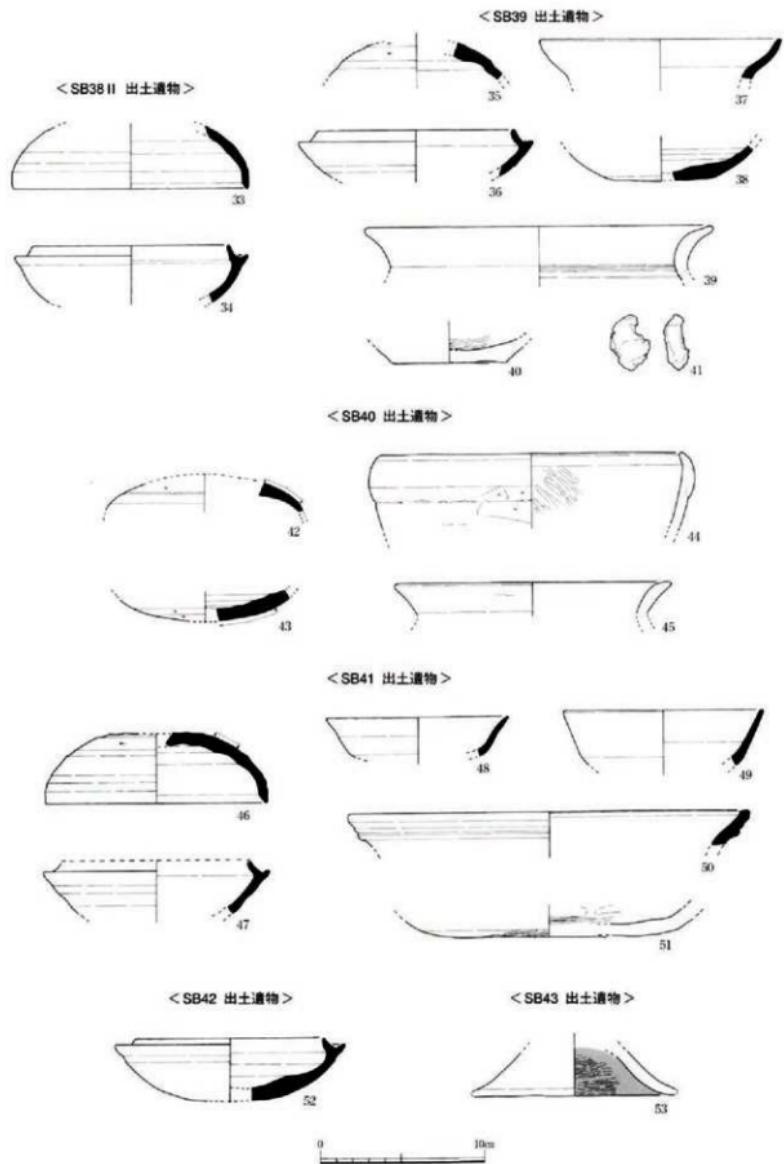
この造構からの遺物も出土は少なく、図化出来たのは坏H身(No52)1点のみである。この他、II3期以降に出現する口縁端部に重焼痕跡をもつ坏A破片が1点出土しており、土師器煮炊具では、非ロクロ成形破片12点、ロクロ成形破片10点が出土し、約5割率といった比率を示す。時期は田嶋編年II3期までに位置づけされると思われる。

(6) SB43出土遺物

SB43で図化出来たものは、図No53の土師器内黒高坏の脚部である。外面は剥離が著しく調整をみるとできなかったが、内面は内黒が施されヨコミガキ調整がなされており、脚端部の形状から中実になるものと思われる。なお、内黒高坏は、田嶋編年I期からII3期まで残る器形である。この他、やはり土師器煮炊具破片が多く出土し、調整は在地化が進んで、様々な調整をもつ破片が認められる。時期は、額見3A～3C期の田嶋編年II期～II3期となる。

(7) SB44出土遺物

SB44で図化できた遺物はない。遺物量については、造構で既に記述済みである。II1期以降の須恵器中空高坏が出土している。



第20図 矢田野遺跡VI 出土遺物(3) <SB38・SB39・SB40・SB41・SB42・SB43> (S=1/3)

3. 土坑・土師器焼成坑・被焼造構出土遺物

(1) SK601・SK602出土遺物

SK601から出土する遺物はなく、図化是不可能である。SK602から出土する遺物で、図化したもののは、底部が糸切りの土師器赤彩塊F(図No54)である。糸切り痕が見られるのは、田嶋編年IV期造構であり、これと相当の時期と位置づけされるものである。

(2) SK603(土師器焼成坑)出土遺物

この土坑からの出土遺物は非常に多い。須恵器では、壺A蓋(図No55・56)は全体に扁平を呈して、天井にケズリをもち、図No55は天井部から口縁端部から丸く落ち込む形状となっている。図No57も天井にケズリをもった丸い形状のものだが、図No55よりも器高が高い。

土師器の出土は多い。塊F(図No59)は、赤彩ではないものの、浅身で内外にミガキ調整を施され、焼け弾き品でもあり、SI18、SK604、SJ601、SB39と接合出来ている。このような比較的大型の塊もあれば、小型タイプとなる塊F(図No60・61)も出土しており、底部の図No60は内外ミガキが認められるものであり、両者とも質が非常に堅密で、焼け弾いた品である。土師器高壺は、いずれも中空高壺、ロクロ成型品である。図No62は大型口径の壺部(盤状のもの?)が取り付くと思われるもので、焼き弾きは著しく歪みもある。

土師器煮炊具の釜口頭部(図No66)は、典型的とも言える在来系の非ロクロ成型品だが、他に比べ突出して器肉が厚いものである。浅鍋(図No68)も同じく非ロクロ成型で外面が典型的とも言える縱ハケ調整を施す在来型で、内面はケズリ調整後にナデ調整をし、その後頭部工具ナデを施している。瓶底部(図No65・67)は、いずれも焼け弾いており、内面が殆ど剥がれてしまっている。両者ともロクロ成型品であり、図No67は、内外カキメ後に指ナデ調整されている。

この土坑からは、焼け弾き品が最も多く出土しており、またSI18出土品との接合がされていることや出土傾向がよく似ていることから、同時期に機能したと判断してよからう。詳細は、前述した堅穴建物の①SI18・SK603ab・SK604・SK605・SJ601の項で述べている。

(3) SK604出土遺物

この土坑からの出土遺物は、SK603と同様に圧倒的に土師器が多く出土する。実測可能であったものは土師器ばかりだが、出土した須恵器は、壺A破片2点と貯蔵具破片1点のみであった。

土師器の塊F(図No74)は、ロクロ成型で内面にミガキ調整、外面底部にケズリ調整が施されたもので、赤彩は施されていない。短胴釜の胴部(図No77)もロクロ成型で内外に底部張り出しのタタキ・当て具痕がみられ、外面上部にはカキメ調整が施されている。最終調整で内面と外面底部に縱方向のハケ調整を施すという、在来型技法を併用しており、朝鮮系煮炊具が在地化したものと判断できる。この短胴釜は、焼け弾き品である。

この他に図化できたものは、いずれもロクロ成型品ばかりで、全体としてもロクロ成型品が多いのだが、非ロクロ成型の在来型の煮炊具胴部破片も出土している。器種別の出土傾向、またSI18やSK603との接合が認められることから、ほぼ同時期に機能していたものと判断され、詳細については、前述した堅穴建物の①SI18・SK603ab・SK604・SK605・SJ601の項で述べている。

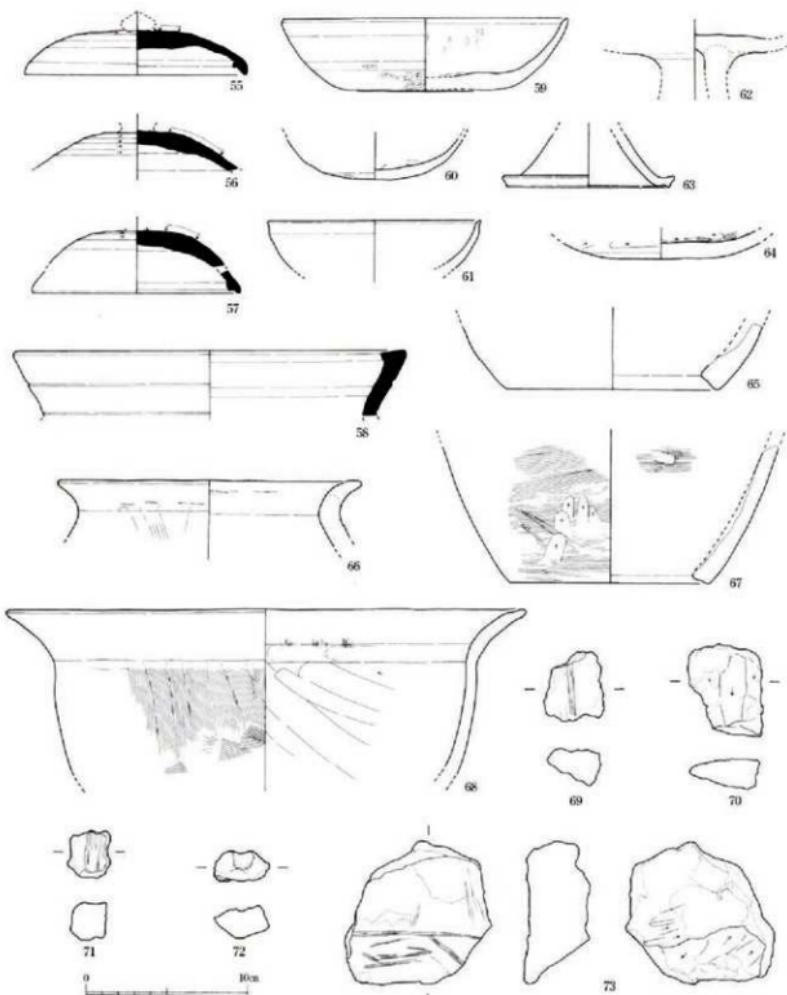
(4) SJ601出土遺物

この焼面造構からは、土師器のみが出土している。図化した2点の土師器はいずれもロクロ成型で作られたもので、図No80の塊Fは外面底部にケズリが認められ、内面にはミガキが確認できるが、赤彩は施されていないものである。また、図化されているものを含め出土する土師器高壺は全て中空のロクロ成型品である。これに対し、非ロクロ成型の外面がハケ調整、内面にケズリ調整をもつような

<SK602 出土遺物>

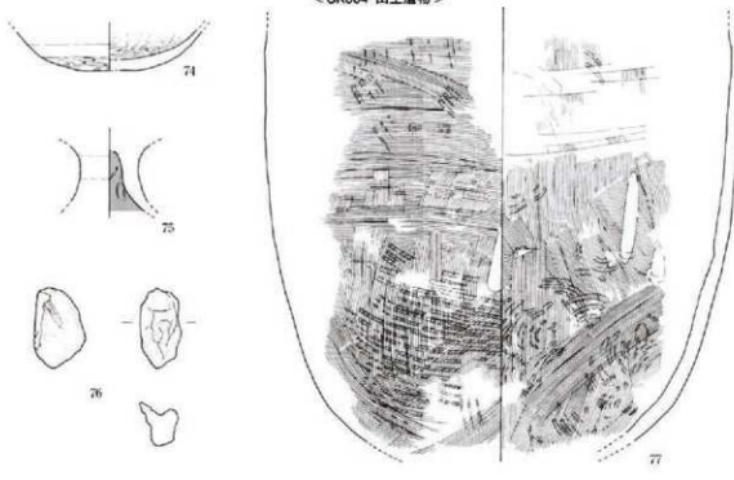


<SK603 出土遺物>

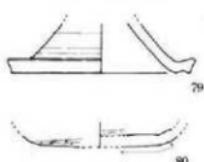


第21図 矢田野遺跡VI 出土遺物(4) <SK602・SK603> (S=1/3)

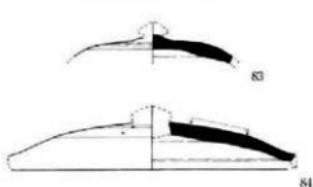
< SK604 出土遺物 >



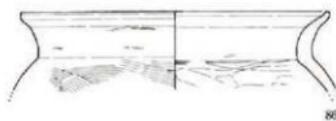
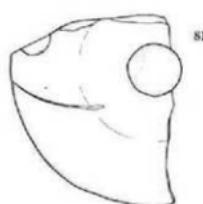
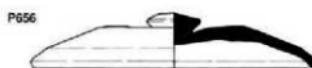
< SJ601 出土遺物 >



< 包含層 出土遺物 >



< ピット 出土遺物 >



0 10m

第22図 矢田野遺跡VI 出土遺物(5) <SK604・SJ601・ピット・包含層> (S=1/3)

在来型の釜胴部破片も出土している。焼け弾き品も認められ、SI18、SK603、SK604との接合も確認できる。時期は田嶋編年Ⅱ1～Ⅱ2期が主体と判断されるが、SI18遺構群の中で遺構の切り合いからみて最も新しい段階のものと考えられる。

4. ピット、包含層（Gr）出土遺物

ピットや包含層から出土する遺物で、特に包含層遺物には時期幅が認められる。遺構から出土する遺物の時期である田嶋編年Ⅰ期～Ⅱ2期は勿論だが、Ⅳ期に相当する遺物が認められる。

5. 焼成粘土塊

焼成粘土塊は、遺構で記述したように、SI18・SK603・SK604・SJ601の遺構群から全体の98%が出土している。全体としてパンケース1箱分であり、総重量は約2.8kgである。最も多く出土しているはSK603で、5層を主に次いで4層から多量に出土する。その次に多く出土するのはSI18であるが、SK603の半分以下の量である。その次にSK604でSI18の出土量のそのまた半分強であった。

出土する焼成粘土塊は、粘土の質からみると2通りの質をもっている。1つは、土師器胎土と同様の土（I類）で、砂の多少により細分類も可能だろうが、ここでは一連のものとしておきたい。もう1つは、粘土がベースとなっているのだが、混和材等を多く混在させているとみえ、軽鬆で脆く、中にはスサ混在の痕跡をもつものもある（II類）。

また、粘土の質以外にも、焼成粘土塊の表面に痕跡をもつものがある。

（I類）では、押しつけたような平坦面をもつもの、平坦面には稲藁圧痕が認められるもの。稲藁の圧痕のみが認められるもの。粘土紐が認められるもので、稲藁圧痕がみられるもの。板状の粘土を重ねたものを軽く丸めているもの。以上6種類の表面痕跡が認められる。

（II類）では、割れているものも多いため、断面に痕跡が残っているものがある。まず、平坦面をもつもの。稲藁が混在するもの。小枝と思われる痕跡をもつもの。工具で撫でつけたような痕跡をもつもの。稲藁圧痕も平坦面も工具痕も認められるものがある。以上5種類の表面痕跡が認められる。II類のものは、SI18とSK603でのみ出土している。

第6節 まとめ

当調査区で、最も古い段階（田嶋編年Ⅰ期）の建物はSB38で、これと同時期もしくは少し後に、SI20（田嶋編年Ⅱ1期）が構築される。次の段階（田嶋編年Ⅱ1新期～Ⅱ2期）では、SI18と内部に収まる土師器焼成坑・土坑群、被燃遺構、SI19、掘立柱建物の重複群が構築される。そして、SI21はSI20に建て替え、或いはSI21の廃絶空みを利用して構築された建物だった可能性をもつ。前段階に収まるかもしれないが、最終的段階にはSB42・SB43（～田嶋編年Ⅲ期）が加わってゆくと思われる。以上のような建物の変遷を捉えることができる。

大きく捉えれば、7世紀前半には数棟の建物しかなかったのに対し、7世紀中頃から後半に入ると、恐らく工房であろうSI18と土師器焼成坑にて土師器生産が開始され、外來系として知られる壁立式建物SI20や小型建物のSI19、そして掘立柱建物の数も増えて、活性化の様相を見せると言えよう。要するに7世紀前半と後半とで格段の変化がみられるのである。

また、当調査区での壁立穴建物からは、造り付けカマドが検出されないという事実がある。調査区が狭いことや、SI19のように調査区外に延びる壁立穴建物もあることから、偶然カマドが検出されなかつただけなのかもしれない。通常地山に残る被燃痕跡すら認められず、造り付けカマドを使用した可能性が低いのではないかと思われる。大型建物であるSI21は、当然カマドを伴うべき規模と構造をもつ

ものである。但し、SI20構築時の際に、カマド被熱までも削り取られた可能性も否定できない。勿論、移動式カマドを使用した可能性もあるが、使用痕跡をもつ土師器煮炊具も極端に少なく、全体として生活痕跡が薄い印象を受けるのである。通常、集落遺跡からの土師器出土率は高い。当調査区もこれに準じ土師器出土率は高い。しかし、出土する土師器はSI18に収まる遺構群、つまりSK603土師器焼成坑と、この周辺に掘り込まれた土坑群から出土するものが、調査区全体の出土数1,500点のうち、1,068点を占める。要するに、土師器全体で71%を占め、また焼け弾き品は、全てこれら遺構群からの出土である。

さて、出土遺物からは、在来系土師器と外來系土師器の併存若しくは在来系土師器の変質や外來系土師器の在地化が認められる。合わせて考えれば、当調査区は、7世紀後半に入り、外來系である壁立式建物（SI20）が建てられ、土師器焼成坑で土師器生産を行うという、新しい土師器づくりが導入され浸透して在地化しつつある段階であるということが、特徴として挙げられる。

このような様相は、望月精司氏が2007「第IV章総括－三湖台地集落遺跡群の古代前半期土器様相－」『額見町遺跡Ⅱ（B地区及びC地区一部区域の調査）』で述べられているとおりであり、当調査区はこれを裏付ける形となろう。ここで望月氏は、額見2期を「2期は三湖台地集落群の中で先行して成立した集落が終焉する一方で、新たな集落が成立する画期にあたり、集落再編期であり、從来の‘在来型土師器’に、朝鮮半島や近江、丹波等の移民がもたらしたと予想される‘移民系土師器’が出現するとともに、器種構成においても新旧交代の様相が見えてくる、從来の在来型土師器生産の変質が見られる段階」として、田嶋編年Ⅰ2期を額見2A期、田嶋編年Ⅱ1期を額見2B期としている。また、額見3期を「移民系煮炊具の在地化とその影響による在来型煮炊具の変質、それに付随して生じた土師器生産の須恵器窯場導入の段階」とし、田嶋編年Ⅱ1新段階～Ⅱ2最古段階を額見2A期としている。当調査区は、額見2B期～3A期に相当し、主体をおくものと考えられる。

引用・参考文献

- 望月精司2007「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落－移民系煮炊具と堅穴建物構造、集落経営の視点から－」『日本考古学 第23号』日本考古学協会
- 望月精司2007「第IV章総括－三湖台地集落遺跡群の古代前半期土器様相－」『額見町遺跡Ⅱ（B地区及びC地区一部区域の調査）』石川県小松市教育委員会
- 北野博司1988「重焼の観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』（財）石川県埋蔵文化財センター
- 花塚信雄1984「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畠田・寺中遺跡』金沢市教育委員会
(財) 石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会2006『矢田野遺跡群』

矢田野遺跡VI 凡例

遺構図について

- ・遺構名称は、堅穴建物跡をSI、掘立柱建物をSB、土坑(焼土坑も含め)をSK、ピットをPとした。
- ・遺構図版内の縮尺は、堅穴建物が1/20、掘立柱建物が1/80、土坑が1/30及び1/40である。
- ・遺構図の中で、掘立柱建物の柱穴内の網点は柱位置を示す。掘立柱建物以外の網点は、被窓部分を示す。
- ・土層記について。土色名、上色記号は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に基づいている。土性、密度、可塑性、粘性は、日本ペドロジー学会編1997「土壤調査ハンドブック改訂版」に基づいている。なお()内は、名称に対する記号を示している。
- 【土性】は、野外での土性判定目安として次のようによがされる。砂土(S)=殆ど砂ばかりで、粘り気を全く感じない。砂礫土(SL)=砂の感じが強く、粘り気は僅かしかない。壤土(L)=ある程度砂を感じ、粘り気もある。砂と粘土が同じ位に感じられる、シルト質壤土(SIL)=砂はあまり感じないが、サラサラした小麦粉のような触感がある。重壤土(CL)=僅かに砂を感じるが、かなり粘る。輕壤土(LC)=殆ど砂を感じないでよく粘る。重埴土(HC)=砂を感じないで非常によく粘る。
- 【密度】は、判定方法として指観の基入程度による方法があり、土壤面を指観で押したときのへこみの程度から次のように区分されている。なお、ここでは「密度」を略して「密度」と記載している。すこぶるしょう(VL)=殆ど抵抗なく指が貫入する。しょよう(L)=指が土層内にたやすく深入る、軟(S)=はっきりと深い指のあとが容易にできる。堅(H)=強く押しても指のあとが僅かしか残らない。すこぶる堅(VH)=強く押しても指のあとが残らない。固結(EH)=移耕コテによってやっと土塊を削れる。

【可塑性】は、力を加えてゆくと変形し、力を除いたときにその変形を保持する能力をいい。可塑性の強弱は、土壤に十分な溝りを与え、親指と人差指の間で校杖を壊し、こねている間に水分が蒸発して土が指に付着しなくなった時に棒状に捏ねて延ばし、その状態により次のように区分するものである。なし(NP)=全く棒状に延ばせない。剛(SP)=辛うじて棒状になるが直ぐに切れてしまう。中(P)=直徑2mm程度の棒状に延ばせる。強(VP)=直徑1mm程度の棒状に延ばせる。柔(EH)=直徑0.5mm程度の棒状に延ばせる。

【粘性】は、粘着力を略して記載して、土壤を親指と人差指の間で圧して引き離すときの付着する性質を示し、次のように区分される。なし(NS)=土層が殆ど指に付着しない。弱(S)=土壤が一方の指に付着するが、他の指には付着しない。指を離した時に土壤は延びない。中(S)=両指頭に付着する、指を離した時に土壤が多少糸状に延びる傾向を示す。強(VS)=両指頭に強く付着する。指を離した時に土壤が糸状に延びる。

遺物図に関して

- ・遺物図版内の縮尺は、全て1/3である。
- ・土器の器種名は、基本的に須恵器・土師器とともに食器類は北陸古代土器研究会で使用するものに準じた。
- ・本書で示した土器編年並びに屏年代記については、1988年北陸古代土器研究会シンポジウムの際の田嶋明人氏の古代土器編年論を基本として、1997年北陸古代土器研究会10・11世紀シンポジウムの際の田嶋明人氏の雨加賀編年修正を加えたもの(=田嶋編年)に準じた。
- ・土器図版中で示す右側断面に書き込んである「」は、ヘラケズリの範囲を、左表面並びに展開図中の「→」はケズリの方向を示す。

・土器図版中の右表面の中の破綻は、粘土縫接着痕を示す。

・土師器・薄い刷毛は赤彩を示し、濃い刷毛は黒色を示す。

遺物観察表に関して

・焼成、焼き色(色調)で示す用語は、「堅壁」が良好以上の強い堅密な焼きのもの、「良好」が堅壁よりも焼き締まりの弱いもの、「良」が還元状態は保つが焼き締まりの弱いもの、「不良」は白い還元状態のものや焼成不良で軟質のものをそれぞれ示す。焼き色は、灰陥部分や釉付着部分を除いた大まかな色調である。2種類の用語を提示している場合は、その遺物が約半割ずつの焼き色もっていることを示す。

・法量で示した、口=口径、底=底径、台=台高、高=高台高、つまり=蓋つまり径、つまり高=蓋つまり高さ、基=基部径、环=高環部径、高=高環、残高=残存器高、頭=頭部径、頭高=頭部高、胴=胴部最大径、長=長軸長、巾=最大径、厚=平均厚、最厚=最大厚、孔=孔径を示し、「残」は残存部分での法量を示す。単位はcmである。

・定容とは、記述であれば全体の未完割合が、その部位のみ完割合を示す。

・船底で示す用語は、須恵器では、「通常」が南加賀置賤郡の「津オオダニ地区で通常見られる、素地が粘土質で適度に砂粒が混在する上、土「砂多」が、通常の状態より多くの砂が混入が多いもの、「砂少」が砂粒の混入が少ない良質の土を示す。土師器では、「口」は、砂が通常の状態で混入しているものの、「口」は砂が多く混入するものの、「口」は砂が非常に多く混入するものの、「口」は砂が多めだが粘土の本理が細かく粘土を粗積した感があり手触りの柔らかいもの、「口」は砂が少なく赤色絞のシャモット?が混入するもので手触りは柔らかい、「口」は砂が少なく手触りの柔らかいもの、「口」は砂は通常だが手触りが柔らかいもの、「口」は砂が多く、シャモットなど混和材が多いものを示す。

・備考中の重複の分類は、北野博司氏の分類(「重複の觀察」『辰巳西部遺跡群I』(財)石川県埋蔵文化財センター1988年)に基づき、「口」は、蓋身正位に合わせたものを1単位として2段程度に重ねたもの。「口a類」は、蓋を逆位にして身を重ねたものを1単位として柱状に重ねたもの、「口b類」は、蓋を逆位にして身に重ねたものを1単位として対互に蓋口同士が合わさるように柱状に重ねたものを示す。

・備考中の副部形成・調整で示すタキ及び当て具の分類については、花屋信雄氏の分類(「須恵器類叩き口目について」『金沢市歴史・寺中遺跡』金沢市教育委員会1984年)に基づいており、「Ta類」が本目直行の平行文、「Hb類」が本目左下がりの平行文、「He類」が本目右下がりの平行文、「Ha類」は本目の見えない平行文、「Da類」が本日の見えない同心円文、「Db類」が本目が年輪状に入る同心円文、「Dc類」が柱状本目が入る同心円文、「SD類」が年輪木目のみが見える細かな同心円文(木製無)で示してある。

・土器器の色調については、「表」は外表面の表面色調、外表面の表面色調が異なる場合に「内」は内面色調、「外」は外面色調を示す。また、表面に酸化鉄膜が認められるものについては、「酸」は表面で酸化した部分の色調、「呑酸」は酸化しない表面色調を示す。そして「斯」は断面色調、内外断面とも同一色である場合は土色記号のみで記した。色調で示した記号は「新版標準土色帖」に基づく。

第3表 矢田野遺跡VI出土遺物觀察表

番号	文書名	識別	器種名	出土施設	記量	形状	色調	胎土	残存	調整等	備考	備考2
1	1	須也器	耳H・茎	SII8-C14	1113.0, 須02.9	直	内:墨1, 5234.1, 5310V1.1	須加厚- 砂多	111/36			
2	2	須也器	耳H・身	SII8-A18	1114.1, 須02.7	直	1073G.2	須加厚- 砂多	112/36			
3	3	須也器	耳A・茎	SII8-C14-8	1112.0, 須33.3, 1115.0, 須00.6	直折	537.1	須加厚- 砂多	完形	瓦井ケメリ, 内面中 央2本筋ナギ	近原地, 諏訪山, ロクロ右側板	
4	4	須也器	耳A・茎	SII8-D16-6	1112.0, 須33.3, 1118.0, 須00.6	直折	1076.1	須加厚- 砂多	完形	瓦井ケメリ, 内面中 央2本筋ナギ	近地丘上地, 諏訪山, ロクロ左側板	
5	5	須也器	耳A・茎	SII8-9	1112.3, 須32.2, 1118.0, 須00.6	直折	586/	須加厚- 砂多	完形	瓦井ケメリ, 内面中 央2本筋ナギ	近原地, 諏訪山, ロクロ右側板	
6	6	須也器	耳A・身	SII8-D16	1112.2, 須32.5	不良	2378.1	須加厚- 砂多	112/36		ロクロ右側板	
7	7	須也器	盤	SII8-C14+ SII8D-5B	1125.9, 須01.8	不良	337.1-7.2, 内面2-5, 外面 2-5, 5234.2, 5310V1.1	須加厚- 砂多	1/36	外側11.5mm厚 ハサ, 制限タリ タリ		
8	8	土器器	島H4	SII8-D16+ +SII8-4+ SII8D-1制+ +SII8-1	1111.0, 瓢高3.5, 32.5, 壁厚0.6, 底厚0.5	直折	1071V38.1/ 112.5V38.3	II	9/10	腹の外側面に擦れ2 と直	ロクロ右側板, 摩き押き品 で, H部と腹部の接点ない が, 14-側体	ロクロ底形
9	9	土器器	高H-G-脚部	SII8-C14	1111.1, 須02.5	直	1071G.4	I	仰1/4			ロクロ底形
10	10	土器器	高H-G-脚部	SII8-D16	1113.8	直	1071V38.1- 112.5V38.1~ 4.1	I	—			ロクロ底形
11	11	土器器	高H-G-脚部	SII8-A18	1117.0, 須03.5	直	7.5V38.1/6.6	V	仰1/4			ロクロ底形
12	12	土器器	楕H	SII8-A18	1116.0, 茎高3.5	直	1071V38.1- 4.2	III	1/4	外腹ハサ→底面ケズ ナギナギ, 内面ナギ ナギ	近原地, 在地名	
13	13	土器器	楕H	SII8-A18+D16	1115.7, 茎10.6	直折	1071V38.1- 4.2 1071V38.1	II	1/4	外腹ハサ→底面ケズ ナギナギ, 内面ナギ ナギ	ロクロ右側板, 直置 11.5mm厚に接点ないが, 同一側体	ロクロ底形
14	14	土器器	高H-G-脚部	SII8-D16	1115.6, 須02.5	直折	1071V38.1/ 112.5V38.1	I	112/36	腹面にケズリ	ロクロ右側板	ロクロ底形
15	15	土器器	楕H	SII8-D16+SK009-8	1118.0, 須02.2	直	1071V38.1/4	I	1/10	外腹底部ケズリ	ロクロ右側板	ロクロ底形
16	16	土器器	H11H	SII8-7+SII8-D16+ SII8-C14	1118.0, 須05.8	直	1071V38.1/ 26.23M	III	1/4	腹面にキズナギナ ハサ, 内腹ハサ, 内面 底部ケズリ	ロクロ右側板, No.39号と 同一側体ない, 壁点がない	ロクロ底形
17	17	土器器	楕・底部	SII8-D16	1118.4	直	1071V38.1/ 26.23M	III	底1/5	外腹シケズナギナ ハサ, 内腹ハサ部に ケズリ, 底面ナギ ナギ	外底面に黒斑	ロクロ底形
18	18	土器器	長柄足	SII8-1+SII8-B, SII8-A+C-D, SK009-Ps, 1995	1115.5, 須06.7, 9.0L13.6	直	5397.5	II	1/16	外腹ハサ, 内面ナギ ナギ	近原地, 在地名	
19	19	土器器	短柄足	SII8-B	1119.6, 須17.8, 9.0L5.7	不良	1073H.4	III	112/36	外腹ハサ, 内面ハサ ナギ	近原地, 在地名	
20	20	土器器	短柄足	SII8-B	1119.6, 須17.8, 9.0L5.7	不良	1073H.4	III	112/36	外腹ナギ, 内面ハサ ナギ	近原地, 在地名	
21	21	土器器	短柄足	SII8-B	1120.0, 須18.0, 9.0L5.1	直	1071V38.1- 2.2	II	112/36, 旁 1071V38.2	外腹ナギ, 内面ハ サナギ	近原地, 在地名	
22	22	土器器	洗H	SII8-D16+S11B-A +SK009-8B	1120.6, 須02.4	直折	1071V38.1/ 26.23M	III	112/36	外腹ナギ, 内面ハ サ	近原地, 在地名	
23	23	土器器	小盆	SII8-2+SII8-B	1115.5, 須13.0, 9.0L7.7	直折	1073H.4	II	111/4	外腹ケズリ, 内面ハサ	ロクロ右側板, 摩り押き品	ロクロ底形
24	24	土器器	H-11H	SII8-A18	1114.8, 須12.3, 9.0L4.2	直	1071V38.1/ 26.23M	III	111/4		ロクロ右側板	ロクロ底形
25	25	土器器	短柄足	SII8-D16+SK009-2	1120.2, 須03.3	直折	1071V38.1/ 26.23M 1071V38.2, 2.2	II	111/9		ロクロ右側板, 摩り押き品	ロクロ底形
26	26	土器器	短柄足	SII8-B	1122.6, 須19.0, 9.0L5.9	直折	1071V38.1/ 26.23M 1071V38.2	II	112/36	内面ナギナ	ロクロ右側板, 摩り押き品	ロクロ底形
27	27	土器器	短柄足	SII8-D16	1123.3, 須02.2, 9.0L5.6	直折	5397.5/ 1071V38.1/ 1071V38.2, 2.2	III				
28	28	土器器	楕1.3m	SII8-A18	1124.7, 須03.9, 9.0L2.0	直折	1071V38.1/ 26.23M	I			標準丸瓶, 重536g	
29	29	土器器	楕土壤	SII8-A18	1124.6, 須19.0, 9.0L1.9	直折	1071V38.4/7.74	V	完形		幾つもの粘土層板を重ね えた物状, 重量536g	

観察 No.	測定 No.	識別	品種名	出土地点	法算	地成	色調	粒度	残存	調整値	指名	備考	
30	30	須志器	SHG-?	SHG+CH+御方	朝日、残高24	堅穀	E/N5、W: SY4-1	由加 青 7等 粉	0.1/3		ロクロ左回転、内面も深所 基なしで地成	ロクロ成形	
31	31	須志器	SHH-?	SHG+DH+CH	1m	残高23.5	良	2.5Y7/1 由加粉 青	0.1/3	外舟キズリ	ロクロ右回転、外面薄削	ロクロ成形	
32	32	須志器	SHH-?	SHG+DH+CH	1m	1112.0、残高0.5、 残高M65	堅穀	E/N5Y1- 5.1、 W:10Y3E-2	由加粉 青	1.1/36		内斜、受部葉折口に毛傷痕	ロクロ成形
33	33	須志器	SHH-?	SHG+P10	1114.5、残高3.5	堅穀	E/N5Y1- 5.1、 W:10Y3E-2	由加粉 青 7等 粉	1.1/36, 0.1/30		ロクロ右回転、外面薄削	ロクロ成形	
34	34	須志器	SHH-?	SHG+P14	1112.0、残高2.2 W:0.5、残高3.1	堅穀	E/N5Y1- 5.1、 W:10Y3E-1 5.2、 W:10Y3E-2 4.2	由加粉 青	1.1/36		ロクロ左回転、内面薄削、 基なしで地成、底と斜の 可逆性あり	ロクロ成形	
35	35	須志器	SHH-?	SHG+P7	残高1.9	良好	2.5Y8E-1 由加粉 青	-	天津キズリ	ロクロ右回転	ロクロ成形		
36	36	須志器	SHH-?	SHG+P16	1112.0、残高4.2 W:0.5、残高2.9	良	E/N5Y1- 5.1、 W:10Y3E-2	由加粉 青	1.1/36		外面受部の内斜、葉付き 底基質、底部前面に 毛ダメキ	ロクロ成形	
37	37	須志器	SHH-?	SHG+P3	1114.8、残高3.5	良	SY6/1-7/1 由加粉 青	1.1/36			ロクロ成形		
38	38	須志器	SHH-?	SHG+P18	1117.0、残高1.8	良	SY7/1 由加粉 青	0.1/9	内面ナデハライ	ロクロ右回転	ロクロ成形		
39	39	土跡器	平鉢型	SHG+P5	1121.0、10.8.2	良	E/N5Y1-4、 W:10Y3E-4/ 5.2	II	1.1/36	ロクロ左回転 内斜開拓、ロクロ 右回転のナラ	1層相思は、地形	ロクロ成形	
40	40	土跡器	平鉢型	SHG+P16	9.7.0、残高1.0	良	E/N5Y1-6/ 7.4、 W:10Y3E-4	II	0.1/1等	内面ナタ 底へク切丸	表ロクロ 成形		
41	41	須志器	平洋	SHG+P3	1124.1、9.2.5、 W:1.25	良				參量15g			
42	42	須志器	SHH-?	SHG+P9	-	堅穀	SY7/1 由加 青 7等 粉	-	天津キズリ		ロクロ成形		
43	43	須志器	SHH-?	SHG+P2	-	良好	2.5Y7/1 由加粉 青	0.1/4	ヘラ切丸、 底部キズリ		ロクロ成形		
44	44	土跡器	小型器	SHG+P18	1118.4、残高0.6	良好	E/N5Y1-4、 W:10Y3E-1	II	1.1/36	外舟キズリ、 内面ミガキ	表ロクロ、 在地系		
45	45	土跡器	平鉢型	SHG+P6	1116.8	良好	SY7/6 由加粉 青	II	1.1/9		表ロクロ、 在地系		
46	46	須志器	SHH-?	SHG+P5	1113.5、残高3.3	良	SY7/6 由加粉 青	1.5	天津キズリ	ロクロ右回転	ロクロ成形		
47	47	須志器	SHH-?	SHG+P3	1113.9	良	SY7/1 由加 青 7等 粉	1.1/36		ロクロ右回転	ロクロ成形		
48	48	須志器	SHH-?	SHG+P3	1111.2、残高2.5	良好	SY6/1 由加粉 青	1.1/7		外側のみ薄削、 ロクロ右回転	ロクロ成形		
49	49	須志器	SHH-?	SHG+P6	1112.0、残高3.4	良好	SY7/6-6/ 7 由加粉 青	1.1/9		ロクロ右回転			
50	50	須志器	中更	SHG+P8	1124.4	良	2.5Y7/1 由加粉 青	1.1/36		ロクロ左回転	ロクロ成形		
51	51	土跡器	平鉢型器	SHH+P7	9.15.8、残高1.1	良	E/N5Y1-4/ 6.4、 W:10Y3E-4/ 5.2	II	0.1/5	内斜面ハケ 外面撓屈、使用痕	表ロクロ、 在地系		
52	52	須志器	SHH-?	SHG+P15	1111.4、残高3.8、 W:1.0、残高0.6	不良	SY8/1 由加粉 青	1.7			ロクロ成形		
53	53	土跡器	内凹高脚	SHG+P6	1122.6	良	E/N5Y1-6/ 7.6、 W:10Z/1	II	0.1/36	内斜面凹、 1等劣	表ロクロ、 在地系		
54	54	土跡器	平鉢型	SHG+P14	9.7.0、残高1.3	良	E/N5Y1-6/ 7.6、 W:10Z/1	II	0.1/5	内斜面凹、 1等劣なし	ロクロ成形		
55	55	須志器	SHH-?	SHG+3-3#	1123.5、残高2.8	良好	SY7/1 由加粉 青	0.1/2	天津キズリ	ロクロ右回転	ロクロ成形		
56	56	須志器	SHH-?	SHG+4-4#+	SHG+4-8#	残高2.3	不良	E/N5Y1-3/ 4.1- W:10Y3E-1- 7/1 由加粉 青	II-11# 底部穴入り	天津キズリ	ロクロ右回転		
57	57	須志器	SHH-?	SHG+4-6#、 SHG+4-11#-1	1112.7	不良	SY8/1 由加粉 青	0.1/1-11# W:10Y3E-1/ 1.26	天津キズリ		ロクロ成形		
58	58	須志器	表	SHG+3-1#	1124.0	良好	E/N5Y1-3/ 7.6/ W:10Z/1	1.1/36		ロクロ右回転、正直筋	ロクロ成形		
59	59	土跡器	地F	SHG+3-5#	29.58.900-1# 29.58.900-1# SHG+3-2#、SDH+6# SHG+3-5#	1117.2、高4.5	残高、 不良	2.5Y8E-4/ 10Y3E-1/ 10Y3E-4	II	1/8	内斜ヒビキ	ロクロ左回転、 横け剥き島で、色で壁に深いがある	ロクロ成形
60	60	土跡器	地F	SHG+3-5#	残高2.5	不良	2.5Y7/3-7/4 V	0.1/2	ヘラ切丸、 内斜ヒビキ	ロクロ右回転	ロクロ成形		

試験番号	試験日	試験器	器具名	供試土地点	法量	塊度	色調	粒度	残存	調整率	備考	備考2
61 61	8/20	土壤器	液P	SK600-5M+SK600-4M+SK600-2M	11130.純K3.0	堅相	7.5YR12/4	V	131/6		飛行機用品	ロクロ成形
62 62	土壤器	液Hg	SK600-5M	純K2.15	堅相	7.5YR12/2-6.2	W	外周部1/2割	内部にハリミガキ	飛行機用品	ロクロ成形	
63 63	土壤器	液Hg	SK600-5M	酸K6.0,純K3.3	良	赤10YR7/4,黃12.5Y5/1	I	無1/4				ロクロ成形
64 66	土壤器	液Hg?	SK600-1号	純K1.05	堅相	10YR7/2-7/4,2.5YR9/4-6/6	II	赤1/2	外周にケズリ,内面 ハサカケズリ	外周・市化・素ロクロ成形の 技術的なたがい、上はロクロ成形のもの	ロクロ成形	
65 67	土壤器	液	SK600-5M+5M下限	純K2.8,純K3.0	不良	10YR8/4,7/4	I	無1/5		ロクロ左回転 飛行機用品	ロクロ成形	
66 64	土壤器	液Hg?	SK600-1号	11186,純K4.0,純K2.6	良好	9.5YR8/2-9/2,5YR11/1-11/2	II*	131/9	外周ハサカ		素ロクロ, 在地品	
67 68	土壤器	液	SK600-4M-6-1号	純K2.0,純K3.45	堅相	10YR8/5.5,9/5,5YR8/2-6/4	I	赤1/7	外周ハサカ+ケズリ 内面ハサカ	ロクロ右回転,飛行機用品	ロクロ成形	
68 65	土壤器	液Hg	SK600-2号+3号	純K1.9,純K2.6,純K1.02	良好	9.5YR8/6-6/6,2.5YR9/3-7/6,無 5YR8/4-4/4	II*	131/4	外周ハサカ 内面,ケズリ+ナデ 底部ナシ 底部上月ナシ	外周・市化にスズ	素ロクロ, 在地品	
69 71	粘土質	粘土塊	SK600-5M	長L0,短L7, 最厚22	不良	10.5YR7/6,4.5 10YR8/1.5,無 10YR8/3-3/3	III			重量22.4 g		
70 72	粘土質	粘土塊	SK600-5M	長L7,短L4.6, 最厚1.8	良- 不良	10.5YR7/6-6/ 6.8,不平 5YR7/6-7/6	III			工具跡,重量33.9 g		
71 70	粘土質	粘土塊	SK600-5M	長L9.0,短L2.7, 最厚2.4	良好	10.5YR7/6- 6.8,7.5YR7/4- 5YR7/4	III			小枝跡? 重量13.6 g		
72 69	粘土質	粘土塊	SK603-5M	長L4.1,短L8, 最厚1.9	堅相	7.5YR6/2-6/3 W				小枝跡? 重量9.5 g		
73 73	粘土質	粘土塊	SK603-5M	長L0.0,短K8, 最厚4.0	良好	赤10YR6/6- 6.8,4.5 7.5YR7/6- 6.6	III			沿テク成形,底の平衡面上 に粘着状,重量22.7 g		
74 74	土壤器	液F	SK604	純K2.45	良好	赤10YR6/6- 6.8,4.5 7.5YR7/6-7/6	I	底1/3	外周ケズリ+ミガキ 内面ミガキ	ロクロ右回転	ロクロ成形	
75 75	土壤器	内面高Hg	SK604-4M	純K3.6	良好	9.5YR7/7-2- 7/4,内 10YR7/1	II		内面吸込痕跡	ロクロ右回転	ロクロ成形	
76 76	粘土質	粘土塊	SK604-2M	長L4.8,短L2.6,最厚 2.5	良好	10YR7/6-6/ 7.5YR7/5-5	III	定形		粘土状性をもつてゐる 相手,相手用,重量24.7 g		
77 76	土壤器	液側面	SK604-1号+2号+6 号T+SK604-1号 SK604-8M+SK603-A 4+SK603-C4, SK603-3M	斜切29.1,純K2.54	堅相	7.5YR7/3.7/4	II	側1/2	外周側+相側タキ+ ハサカ+ナシ 側内側+相内側+ナシ ハサカ+ナシ	ロクロ右回転,飛行機用品	ロクロ成形	
78 77	土壤器	液Hg	SK604-2M+SK604-1 号,2M-6	137.1,純K2.3	堅相	7.5YR7/4	II	131/7		ロクロ右回転	ロクロ成形	
79 79	土壤器	液Hg	SK604-1号	純K0.9,純K2.05	良好	7.5YR7/6-6/6	I	底1/4		ロクロ右回転,飛行機用品	ロクロ成形	
80 80	土壤器	液P	SK601	純L2,純K1.1	良好	赤10YR6/6- 6.8;10YR7/2	II	底1/5	外周吸温-外周手持 ミガキ。	ロクロ右回転	ロクロ成形	
81 81	土壤器	液D-素	P656	1117.1,純L4, 純K2,純K1.2	良好	56/	面加賀, 溝通	1/2		ロクロ右回転,正位能,天井 121-121-121記号,底ふくれ	ロクロ成形	
82 82	拱開通	液D	P642	長L4.2,短L2.2, 最厚2.1						重量19 g		
83 83	泥炭	液A-素	P65-0	純L2	良好	赤10YR6/3- 3.5,10YR7/1	面加賀, 溝通	1/1/2		ロクロ右回転	ロクロ成形	
84 84	泥炭	液B-身	表土	台10.2,台9.05, 純K1.5	良好	2.5G/7/1	面加賀, 溝通	0/1/3			ロクロ成形	
85 85	泥炭	液B-素	P64-0	純K2.4	良	7.5YR6/1-7/1	面加賀, 溝通	无/3/36		ロクロ右回転,重版3.5倍	ロクロ成形	
86 86	土壤器	小便	SK-0	1118.8,純17.0, 純K1.0	堅相	内10YR6/4- 6.8;2.5YR8/4- 5.5/5/1	I	131/6	外周ハサカ,内面ナシ	ロクロ左回転	ロクロ成形	

第Ⅲ章 千代オオキダ遺跡発掘調査

第1節 調査に至る経緯等

金沢市米泉町在住の山上幸一氏より、小松市千代町乙98番地1での住宅建設計画に伴い、平成18年10月30日付けで埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である千代オオキダ遺跡に含まれていたことから、事業者の協力もあり、即座に同日付けで試掘調査を実施した。その結果、一部区域で埋蔵文化財が確認されたため、工事実施の際には保護措置が必要である旨を事業者に伝えた。しかし、当該工事計画が地盤改良工事を実施するものであったことから、工事による埋蔵文化財の破壊が避けられない状況となつた。よって、遺跡の破壊が免れない区域約69m²を発掘調査対象とし、個人住宅建設であるため、石川県教育委員会の同意の下国庫補助事業として実施することで事業者と同意した。これを受けて平成18年11月1日付けで、事業者より埋蔵文化財発掘調査の実施について依頼書が提出された。平成18年11月2日付けで事業者に対し、埋蔵文化財発掘調査の実施回答を行つた。さらに同日付けで、事業者より文化財保護法第93条第1項に基づく「土木工事等のための発掘届」が石川県教育委員会宛に提出された。これにより平成18年11月2日付で、石川県教育委員会教育長より、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」が事業者に対し通知され、平成18年11月7日付けで事業者と間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書を締結に至つた。発掘調査は、平成18年11月9日から平成18年11月13日にかけて実施した。平成18年11月15日付けで、事業者に対し完了報告を行い、当該地の引渡しを行つた。

第2節 調査の経過

1. 現地調査の概要

調査に際し、調査区内に5m×5mのメッシュを基本として任意に設定した。基準点及び水準点に関しては、業者委託による4級基準点測量及び4級水準点測量を実施し調査区近接地に設営した。

遺跡は、表土より約80cm下に存在したため、調査員立会いのもと、重機で表土除去を行い、その後人力による遺構検出作業を行つた。湧水対策のため、調査区南辺に排水溝を掘削し、ポンプによる汲み上げを行つた。遺構検出時に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げた。遺構は、任意の箇所に適時土層観察用のアゼを設定し掘り下げた。遺物については、基本的に層位で取り上げる方針とした。

2. 調査の経過

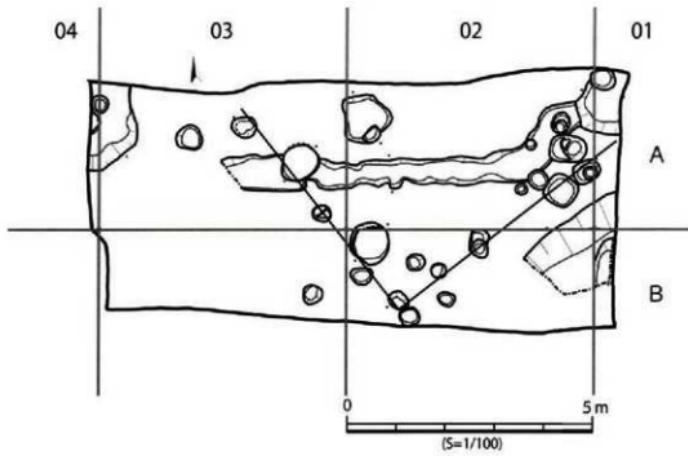
今回の調査は、発掘調査期間の確保が困難な状況であり、休日なしの突貫作業で実施された。発掘調査は、排水溝掘削より開始し、即座に遺構プラン確認および遺構掘削作業に入った。遺構は、調査区全体から確認されたが、調査区西部が広範囲に擾乱を受けてこともあり調査期間に若干の余裕を持つことができた。幸い調査区の土質が降雨に左右され難いものであったため、雨天時でも作業を進めることができ、11月13日までに発掘調査を全て完了することができた。遺構平面図については、調査区内に水糸を張る方法で実測し、設定グリッド上の国土座標を測定することで座標軸に合わせた。

3. 出土品整理

出土遺物は少なかったため、調査年度中に洗浄・注記・接合・実測作業を出土品整理作業員により行った。報告年度である平成20年度に、トレース等の作業を行つてゐる。



第23図 千代オオキダ遺跡 調査地位置図



第24図 千代オオキダ遺跡 グリッド配点図

第3節 既住の調査

千代オオキダ遺跡は、今回の調査以前に、昭和62年度～平成元年度に石川県立埋蔵文化財センター（現財団法人石川県埋蔵文化財センター）によって、発掘調査が行われている。その結果、弥生時代～中世に至るまでの大規模な複合遺跡であることが確認された。また、平成11・12年度に国道8号線小松バイパス建設に伴い11,000m²を、平成12年度に工場建設に伴い330m²を小松市教育委員会が調査しており、同様の結果を得ている。今回の調査地点は、市教委の調査区より直線距離で約500m北東方向に離れた位置にあり、県調査における平成元年度調査区A区に近い。その県調査区では、古墳時代前期～中期、7世紀後半～8世紀中頃、12世紀～13世紀代の遺跡が確認されており、本調査区も同様に遺構が複合して検出されることが想定された。

第4節 発見された遺構

1. 基本層位について

当該調査区の現況は畠地であり、地表より80～90cm下が遺構確認面である。一部区域で地山直上に厚さ約10cmの黒褐色埴土の遺物包含層が確認されている。遺構確認面の標高は、概ね3.6m前後であり、鍋谷川西岸に広がる微高地に位置している。調査区より約50m南の地点では、湿地帯の堆積状況を呈し、遺構面の確認ができない状況である。千代オオキダ遺跡では、点在する微高地の区域ごとに集落が営まれていることが理解できる。

2. 古代の遺構

(1) 堀立柱建物跡

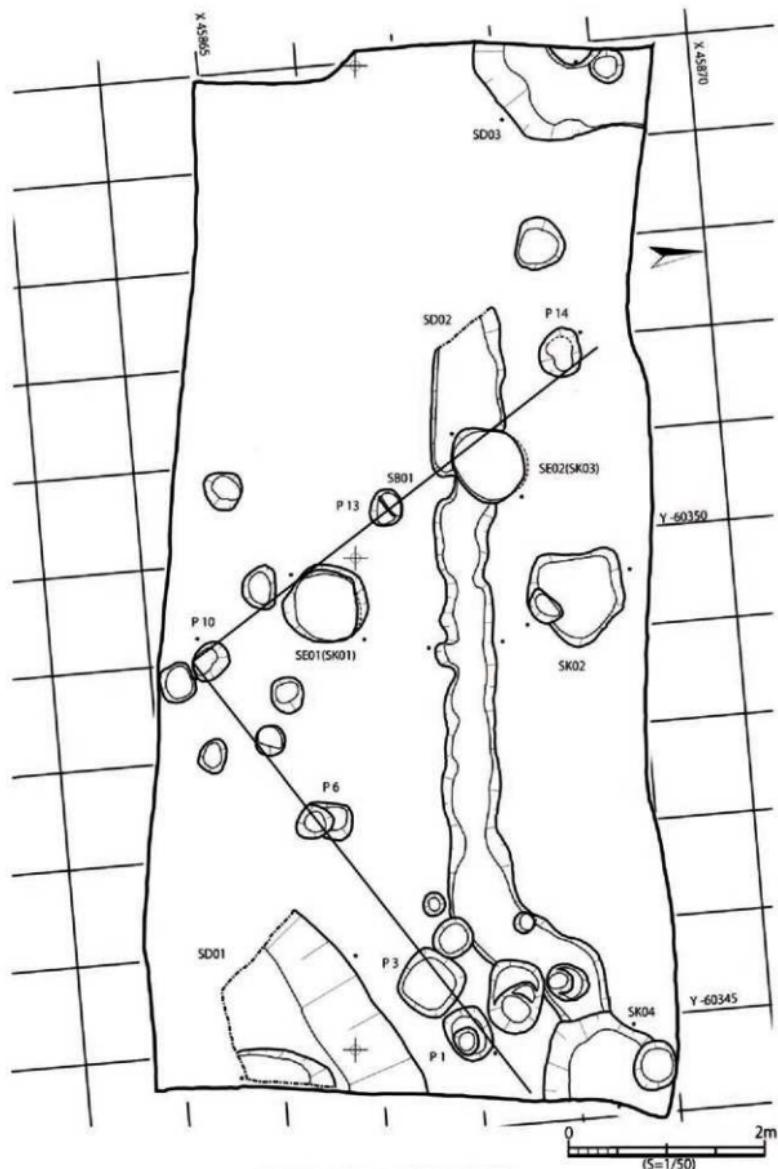
① SB01

A・B02～03Grで検出された、梁行2間×桁行2間のみが確認された堀立柱建物である。他の部分は調査区外に延びているが、梁行2間×桁行3間以上の建物が想定される。柱間寸法は、梁行235cm（平均）、桁行200cm（平均）を測り、やや広い間隔をとる。確認された部分に限っていえば、柱間寸法にはばらつきはない。但し、P-1が建物に係る柱穴とすれば、P-1～P-6間の柱間寸法は270cmとなる。主軸はN-53°～Eの東西軸建物である。柱穴は約40cm～60cmの楕円形であるが、P-3のみ一辺約60cmを測る、隅丸方形となっている。深さは、20～30cm前後が平均的であり、底面は概して平坦である。埋土は、灰黄褐色埴土である。遺物は、須恵器片や土師器片が柱穴より出土しているが、固形化もできないような細片が多く詳細な時期を判別することができない。須恵器壊A片にはV期～VI期と想定できるものが含まれており、土師器片にはロクロ土師器無台壇の底部破片があり、須恵器の時期よりもさらに下る可能性がある。少なくともSD01以降であり、SD02・SK04と重ならない時期で古代後半期の遺構であることは言える。

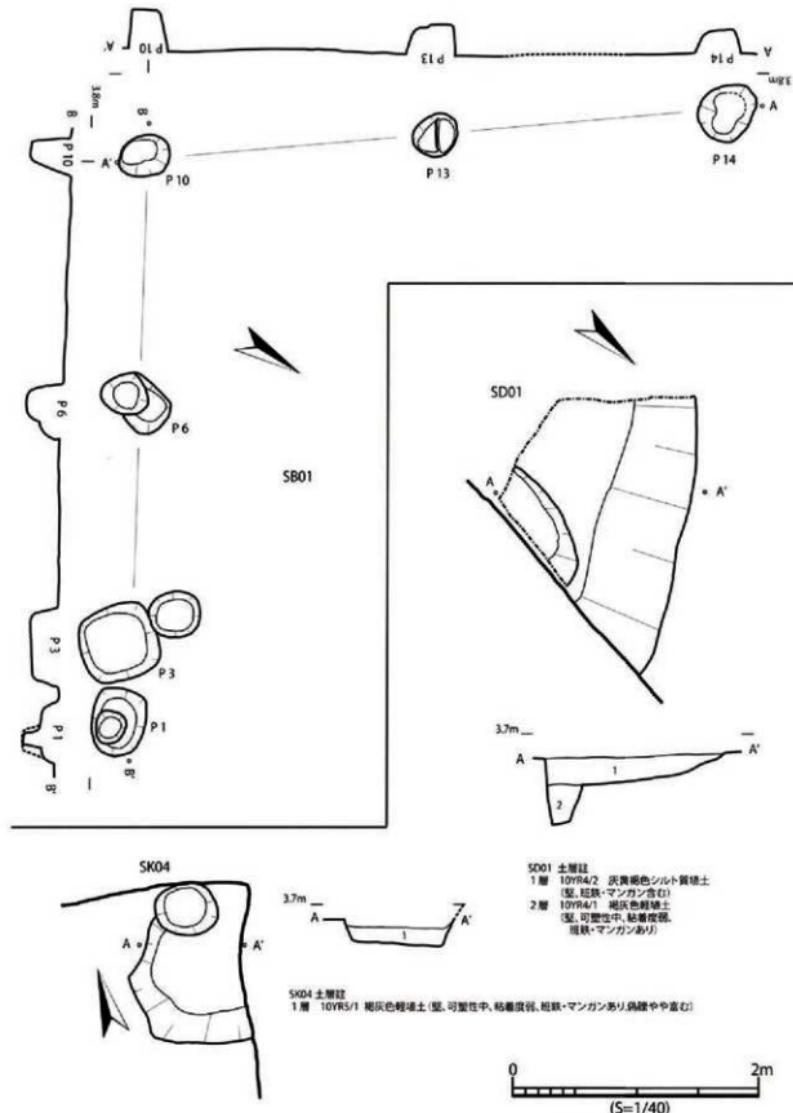
(2) 土坑

① SK04

A01Grの調査区北東隅部から検出された土坑である。調査区外にも延びるため、全体形状は不明である。検出部延長で約130cmを測るやや大型の掘り込みである。確認された深さは約15cmであり、浅く平坦な底面を持つ掘り込みである。覆土は、褐灰色埴土の偽蹠を含む單一土層である。遺物は少量ではあるが、古代の須恵器・土師器片のみが出土している。よって、古代の遺構と判断されるが、



第25図 千代オオキダ遺跡 平面図



第26図 千代オオキダ遺跡 掘立柱建物・土坑・溝実測図

時期は、土師器壺片がⅣ期頃（8世紀中頃から9世紀初頭頃）を示すが、切り合いからSD02より新しい遺構であることが確実であり、遺物は混入と判断せざるを得ない。

（3）溝

① SD01

A・B01～02Grに位置し、調査区南東隅部を北東から南西方向に横切る溝である。ただし、調査区南端は搅乱により形状不明となる。確認幅で145cmを測る溝であり、下底面に一段落ち込む部分が確認された。深さは浅い箇所で20cm、深い箇所で55cmを測る。覆土は浅い部分と深い部分で異なっており、前者は灰黄褐色シルト質埴土、後者は褐灰色軽埴土が堆積している。遺物は、須恵器壺B身や瓶類及び壺の胴部の破片や、ロクロ土師器壺の破片等が出土している。時期は、壺B身片からⅣ～2期頃（8世紀後半から9世紀初頭頃）が考えられる。

② SD02

A02～03Grに位置する溝で、東端でやや北東方向に折れており、SK04に切られている。西端は搅乱により切られており、調査区外まで延長するかどうかは不明である。最大幅約75cm、深さ10cm程度の極浅い溝ある。灰黄褐色シルト質埴土で埋っており、土中には偽蹕が多く含んでいる。簡便な排水路か、何らかの区画を示すものであろうか。遺物は、須恵器壺同部破片や盤A片や、ロクロ土師器壺細片や鍋の破片、ロクロ土師器壺の底部が出土している。また、大型の土錐も出土している。時期は、ロクロ土師器鍋の口縁部形態から、VI～2期（9世紀後半～末頃）が考えられる。

③ SD03

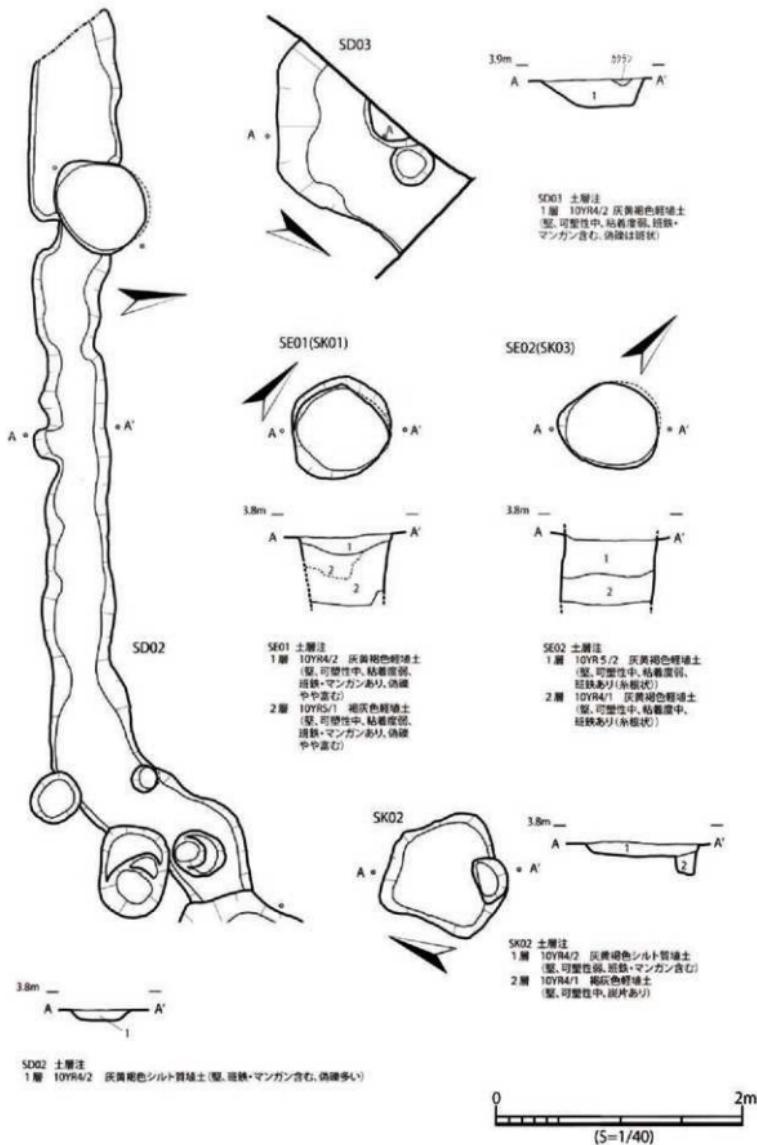
A03～04Grの調査区北西隅部に検出された溝である。遺構の極一部が掛っているのみであるが、北西から南東方向の溝が南西方向へ向きを変える屈曲点である。幅約84cm、深さ22cm測る断面台形状の溝であり、コーナー部は内側壁の方が急傾斜である。灰黄褐色軽埴土で埋っており、上面には搅乱を受けた後も見受けられた。下底面より遺物がまとまって出土しており、検出遺構の中で最も多くの量が出土している。須恵器壺A、壺B身・蓋、瓶類などや、非ロクロ土師器の小壺や高杯が見られ、須恵器壺類は比較的の完形率も高い。また、土師器高杯は少なくとも3個体の破片があり、内2個体は内黒処理が施されている。ただ、壺部と蓋部はあるが、脚柱部が一点も出土していない。他の土器についても、何らかの部位が欠けており、廃棄後の流失の可能性も無いとはいえないが、廃棄時に漏れたと考える方が自然であろう。ただし、1点のみだが肥前系陶器碗が出土しているが、土層断面で確認されるように搅乱で入り込んだものと考えられ、他はまとめて廃棄されたものであるといえる。時期的にもまとまりを持っており、II～3期（8世紀初頭頃）が考えられる。

2. 中世の遺構

（1）井戸

① SE01（SK01）

B02Grに位置し、直径85cmを測る円形土坑である。壁面がほぼ垂直に掘り込まれており、小型の素掘りの井戸であると判断された。バイパス調査区においても、同形状のものが大型の井戸に隣接して確認されている。今回の調査では地山面を大きく立ち割ることは不可能だったため、約60cm掘り下げたところで掘削を断念している。よって、深さは不明だが、バイパス調査区のものは110cm～150cmを測る。埋土は褐灰色軽埴土層が大部分を占めているようであり、土中に偽蹕が多く含まれていた。遺物は、加賀窯の壺の胴部破片と土師器皿片が出土している。また、焼け焦げた凝灰岩の破片も出土しており、行火等の一部ではないかと推察される。時期は土師器皿から14世紀後半頃と推察される。この井戸は、掘削時に壁面がやや硬質化した印象があった。単に層離面に土中の鉄分が溜まったもので



第27図 千代オオキダ遺跡 溝・井戸・土坑実測図

ある可能性もあるが、作業員に昭和初期に井戸掘削を経験した者がおり、壁面補強に漆喰を塗り込める工法があると教えて頂いた。残念ながら今回の緊急調査では特定するには至らず、中世に遡る工法かどうかは不明である。今後、同種の遺構を調査する時には注意したい観点である。

(2) SE 02 (SK 03)

B03Grに位置し、直径82cmを測るやや梢円形状の土坑である。SK 01とほぼ同形状を呈しているため、これも小型の素掘りの井戸であると判断される。SK 01と同様の事情から、約60cm掘り下げたところで掘削を断念している。よって、深さは不明である。埋土は上部が褐灰色埴土層、以下が灰黄褐色埴土層である。土中には偽礫の含有は認められず、SK 01とは埋没過程が異なっており、時期差が存在する可能性もある。遺物は、少量だが土師器皿小片が出土しており、須恵器小片は2点のみであり混入と判断される。時期は、遺物からは中世としか判断できないが、同形状をなすSK 01と同じ14世紀後半頃と考える。梯川中流域の中世遺跡では、地下水に鉄分が多く溜まるため比較的頻繁に井戸が造り替えられる地域であり、SK 01とSK 03も前後関係は判断できないがその関係にあるのではないかと判断される。

(2) 土坑

① SK 02

A02Grに位置し、セクション部分で全長97cmを測る略台形状の土坑である。平坦な底面を持つ、深さ10cm程度の浅い掘り込みである。覆土は灰黄褐色埴土層である。北辺中央隅部にピット状の掘り込みがあり、炭片を含む褐灰色埴土で埋まっており、杭穴とも考えられる。遺物は、古代の土師器や須恵器の小片と輸入白磁の皿片が出土している。遺構の時期は、SK 01でも確認された焼け焦げた凝灰岩の破片も出土していることから、新しい方である白磁片の時期としておきたい。遺物の性格上厳密な時期は特定できないが、SK 01と同時期か隣接する県調査区で確認された12世紀頃まで上がる可能性も考えられる。

第5節 出土遺物

はじめに

当該調査区の出土遺物では、古代遺物が195点（須恵器70点、土師器125点）と大部分を占める。次に、中世遺物は11点のみである。

1. 古代の遺物

(1) SK 04 出土土器（第28図-1）

土師器ロクロ甕口縁部破片である。端部は若干上方に摘み上げた形態をしており、時期はIV期頃と考えられる。口縁部内面に水平方向のカキメ調整が施されている。

(2) SD 01 出土土器（第28図-2）

环B身である。体部外面は降灰により黒色に鈍く照った状態である。能美窯産であり、時期はIV-2古～新期頃と考えられる。

(3) SD 02 出土土器（第28図-3～5）

3点を国化している。3は土師器ロクロ無台壇の底部である。精良胎土で赤色粒を含み、やや赤味を帯びた発色をしている。底部形態のみでは時期の特定はし難い。4はロクロ土師器縁の口縁部と考えられる。端部を上方にやや屈曲させてつまみ上げた形態である。胎土は、粘土系だが微砂粒を多く含みサラサラした器肌のものである。時期はVI-2期頃と推察される。5は大型の土壙であり、両端

部は使用に伴い欠けた状態である。形態的には側面が膨らみ、長さが2倍以下のものであるI b類に分類される。バイパス調査区では主体的にみられる形態である。胎土は、塊における精良胎土と赤色粒を含まないことが以外は共通しており、产地が同じかごく近いと考えられる。

(4) S D O 3 出土土器 (第28図-6~18)

前述のとおり、まとまった遺物が出土した造構である。14点を図化している。時期については、ほぼII-3期でまとまると考えられる。接合後破片数で、須恵器14点、土師器46点が出土している。須恵器では食膳具が11点と79%を占める。土師器では29点が煮炊具であり63%を占めるが、高坏6点や赤彩の坏蓋片1点など12%程の食膳具もみられる。

① 須恵器

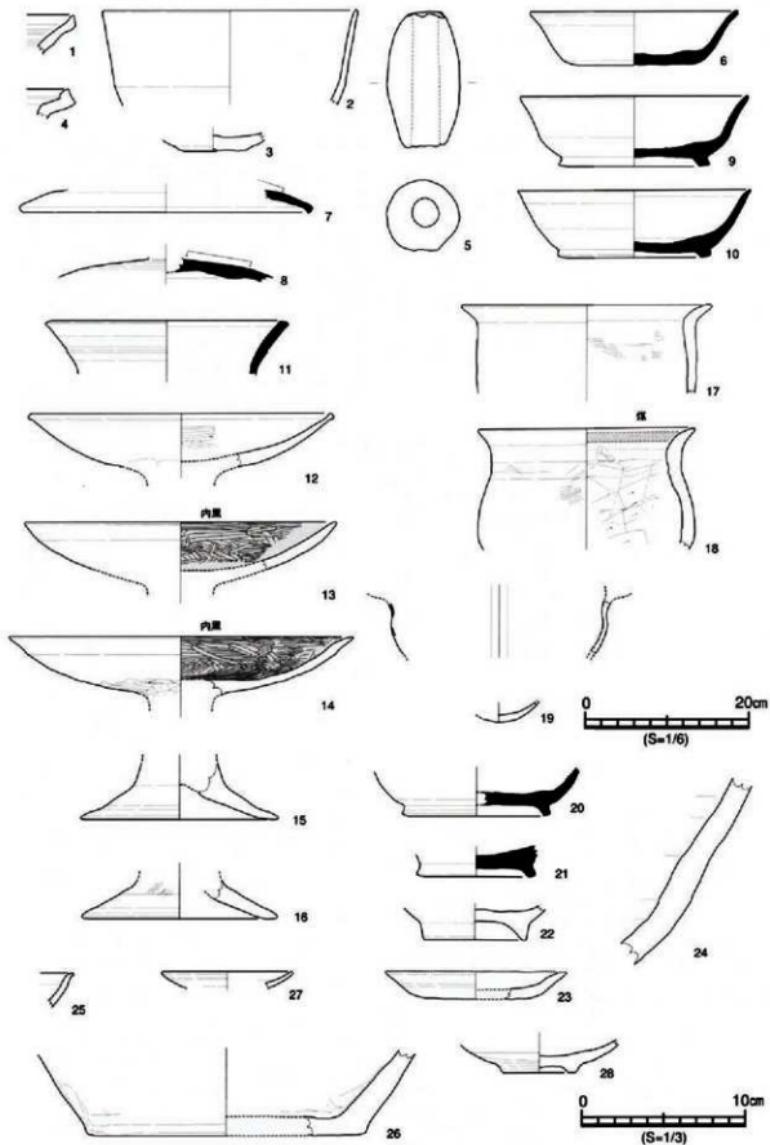
6は坏Aであり、胎土は能美窯産である。口縁部がやや外反する器形で、底部は回転ヘラ切り離しである。7・8は坏B蓋である。7は南加賀窯産で、端部が断面正三角形となる。8は能美窯産で、やや焼き歪みが見られる。9・10は坏B身である。9は南加賀窯産で、体部がやや外反して立ち上がる器形であり、焼き締まりが非常に良い状態である。10は能美窯産で、底部には火だしき痕が認められる。口縁端部を回転ナデにより薄くシャープに仕上げておらず、全体的に精緻な作りである。11は瓶類の口縁部と考えられ、南加賀窯産である。内外面とも降灰しており、外面には沈線が一条巡っている。端部には使用痕と考えられる小欠けが認められる。

② 土師器

12~16は高坏である。全て脚高で坏部皿形タイプのものと考えられる。坏部の3点とも坏部内面にヘラ磨き調整が施されており、特に、13・14は黒色処理も施されている。しかし、胎土と口縁端部の作りは、3点とも異なっている。12は、内黒処理されていないタイプのものであり、胎土はやや精良な胎土であり斑なく橙色に発色している。口縁端部は、小さい玉口状に納めている。脚部との接着部付近に幅広いヘラ削り痕が認められ、脚部にかけて施されていたと考えられる。13は、内黒処理されたタイプであり、胎土は12と同系統だが、砂粒が多く含まれている。口縁端部は、丸く納めている。14も内黒処理されたタイプであり、胎土はさらに砂粒を多く含むや粗いものとなっている。口縁端部は、ヨコナデによりやや外反気味に細く仕上げられている。脚部との接着部付近に幅の狭い細かいヘラ削りがあり、上方向に施されている。灰白色の焼き上がりである。15・16は脚の裾部である。器壁の厚み以外は、形態的に大差はない。胎土から15が13に、16が12に対応するものと想定される。なお、16には、外面にハケ調整の痕跡が確認できる。これらの型式の高坏も、II-3期まで残るそうである(註1)。17・18は小壺である。17は、胴部から外側に屈曲させた短い口縁部を持つタイプで、胎土は粒の大きい(1~3mm)砂粒を多量に含むものである。内面にハケ調整が施される。18は、ヨコナデにより頭部がつくり出されており、胴部がやや丸みを帯びる形態である。口縁部内面に焦げ痕が帶状に残る。外面はハケ調整、内面は右斜め上方へのケズリ調整が施されている。胎土は粒の大きい砂粒が目立たず、微砂粒を多く含むものである。

(5) ピット・包含層出土遺物 (第28図-19~22)

19はP-1出土であり、土師器把手付き壺の胴部と底部の同一個体破片と考えられる。外面にハケ調整を施しており、底部には二次的に火にかけられた痕跡が残る。時期は、古代I期頃のものではないかと推察されるが、破片が少ないので断定は保留しておきたい。20~22は、包含層出土資料である。20は南加賀窯産の須恵器坏B身である。時期はS D O 3の時期と同じ頃とみておきたい。21は南加賀窯産の須恵器塊Bである。底部には回転糸切り痕が残る。内面見込み部み摩痕が認められ、体部を打ち欠いて転用視として使用していたようである。時期はVI-3期前後の時期が考えられ、S B O 1と



第28図 千代オオキダ遺跡 出土遺物実測図

同時期の可能性もある。22は、試掘調査時に見つかったもので、ロクロ土師器の塊Bである。比較的高台が高め器形であり、見込み部がやや内側に押された形となっている。胎土は水窯された精良胎土であり、形態から出越編年Ⅲ-1～2期（Ⅷ-2新期）頃かと推察されるが、底部だけでは断定はできない。

2. 中世の遺物

（1）SE01出土土器・陶磁器（第28図-23・24）

23は土師器皿である。口縁端部は欠けていたが、口径11cmのものとして復元図化している。水窯された精良胎土であり、体部がやや外反気味に立ちあがる器形である。普正寺地山面に類似しており、藤田編年Ⅳ-1期頃と考えられる。24は加賀窯の大甕の胴部下半の破片とである。胎土はやや粗雑な部類に分類される。内部はナデ痕及び指捺え痕跡が残っている。P-12出土破片と接合関係にある。

（2）SE02出土磁器（第28図-25）

中国製白磁の皿と考えられる。口縁部内面に1条の沈線が施され、端部は外面方向に摘み出されている。釉薬に透明感はない、器表面にやや細かい貫入が入る。上田分類白磁Ⅲ・V類に該当する可能性がある。12世紀まで上がる可能性があるが、伝世も十分考えられるため井戸の時期とは評価していない。

（3）包含層出土陶磁器（第28図-26）

26は表土除去中に出土した加賀窯の甕か壺の底部である。胎土は精良であり、25とは異なる窯場である。体部外面にはヘラ状工具での調整痕がみられる。底面は全体的に薄く汚れており、何かが付着しているようである。27は白磁の皿である。

3. 近世の遺物

（1）包含層出土陶磁器（第28図-27・28）

27はSD03混入遺物であり、肥前系陶器の碗である。裏灰釉がかけられており、体部下位から高台を経て、底部外面に至るまで露胎である。また、釉には細かい貫入が入っている。高台は削り出しであり、見込み部に胎土目が付着している。28は国産白磁の皿と考えられる。施釉は極薄いものであり、細かい貫入が入っている。外面とも口縁部以外は露胎である。

第6節 小結

1. 調査成果のまとめ

今回の調査は狭い調査区であったが、多くの知見を得られるものとなった。確認されたもので、古代II-3期（8世紀前半頃）、古代IV期（8世紀中葉～9世紀初頭頃）、古代VI期前後（9世紀後半～10世紀）の時期と中世IV-1期（14世紀後半頃）の少なくとも4期の時期に属する遺構が確認されている。バイパス調査区では同様の時期が全て確認されているが、当調査区北側の県平成元年度調査区では、中世IV-1期（14世紀後半頃）が確認されていなかった。当調査区で井戸が確認されたことにより、当該期の集落が鍋谷川西岸の微高地にも存在することが判明した結果となった。

掘立柱建物の時期は、今回明確にすることはできなかった。しかし、別の単位の集落であり、参考ならないかもしれないが、バイパス調査区においてほぼ同時期の建物群が同じ主軸方向をとることを追記しておきたい。次に、出土遺物の様相を確認しておきたい。ただし、ここに示す数値は、接合後（同一固体も可能な限り判定した）の破片数を基にした統計処理である。少ない量なので、参考程度にしかならないが、須恵器については、食器と貯蔵具の比率が約62%と約38%になり、食器の割合が

高い。土師器は、食器が約20%、煮炊具が約80%となり者炊具の割合が高いという当地域通例の様相であることがいえよう。全体傾向としては、古代II～III期以前の遺物は、P1とSD03出土遺物にはば限られることが特徴として挙げられる。遺構や包含層から主体的に出土するのは古代IV以降の遺物である。中世遺物は少ないが、図化したものも含めて内訳が、土師器皿5点、加賀焼3点、珠洲焼1点、輸入白磁碗1点、不明1点であることを報告しておく。

2. 調査区検出の中世遺構と調査区周辺の歴史的環境

前述のとおり、当調査区において14世紀後半頃の遺構が検出されている。当調査区の隣接地には戦国期の千代城の包蔵地が存在していることから、関連遺構の検出が期待された。結果として、千代城よりも先行する集落が検出されており、千代城の位置に関しては、再検討が必要となった。

さて、千代城は、永禄5年（1562）に一向一揆方が要害を構えたとの記載があり、「能美郡名鑑誌」などによると、一揆方武将徳田志摩が城主であったと推測されている。その後、天正八年（1580）に柴田勝家配下の武将や、慶長5年（1600）に前田利長配下の武将が置かれたとのことであり、詳細は不明である。

当調査区は、元来の千代集落のうち本村と小野町の間の小野町に隣接した位置にある。それらの集落は、近世以降に成立したと考えられ、1946年の米軍の航空写真によると、両集落間は耕地となっており民家は存在しない。当調査区の集落が存在した時期とは集落立地が異なっていたようである。また、千代から国府へ向かう道路は、現在のような直線路ではなく、小野町の手前で北方向へ折れ100mほど進んだ後、東方向へ折れるクランクを経て鍋谷川を渡っていくという道筋であった。明治前期までは梯川の水上交通も盛んであり、この道がどこまで通るかは不明である。しかし、現在確認できる道筋であり、古代・中世期に安宅湊から国府まで陸路が全く存在しないとは考えにくい。となると、現在の千代城の推定地は、直線的に道路がぶつかる位置にあり、前述の航空写真でみる限りではあるが、それらしい区画は見えない。また、近年の下水道工事の立会からも存在する可能性は低く、存在したとすれば既に削られてしまったとしか考えられない。よって、隣接地をみると、八幡神社を含む区域に、長辺約110m（約1町）×短辺約45mの長方形区画が存在している。さらに、同じ航空写真での確認だが、北側と西側に細長い区画の耕地を確認することができる。加えて、この区域の北側には「城北堀」、西側には「西北堀」、南西側には「城」の地名が残っていることが示唆的である。立地的に城館であった可能性が考えられ、当該地が千代城の候補地となるのではないだろうか。クランクの折れた部分に隣接しており、安宅湊から国府を通り得橋郷や軽海郷へ抜ける往来の抑えとして設置されたのではないか。史料の時期は、信長はまだ美濃を攻めていたころの時期であり、永禄7年（1564）に、本居口・小松口合戦や淡川（現手取川）際まで放火とあることから、朝倉氏との緊張関係のなかで設置されたものかもしれない。ただし、規模的に小さいことから、それ以前から存在した在地領主の館跡の可能性もある。また、道を除外すれば、当調査区を含む東側は微高地が広がっていることから、もっと規模の大きなものであった可能性もある。現状の推定地が不確かなこともあり、1つの候補地を提示したものの、今後、地図図や発掘調査などによってさらなる検証を行うことが必要である。

註（1）望月 精司氏教示。参考文献 田嶋明人1988年「古代編年軸の設定」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）」北陸古代土器研究会、出越茂和1997年「古代後半期における椀皿食器（後）」「北陸古代土器研究第7号」北陸古代土器研究会



第29図 1946年航空写真にみる千代

第4表 出土遺物観察表

(単位:cm)

番	地名	種別	器種	色調	胎土	焼成	寸法	器高	底径	側面径	底部径	見込み高	備考(□総面積)
1	SD004	土師器	コクシ	10YR8/3赤黄褐	C・良	中							初期?
2	SD001	埴輪器	馬身	N3/4灰白	陶瓦	上	15.4						内曲面N3/4、3/36、2古一期
3	SD002	土師器	碗A	2.5YR8/3赤黄褐	C・稍良	上			4.2				質2.7
4	SD002	土師器	碗B	2.5YR8/3赤黄褐	C・良	上	8.3	4.45					質2.7、全高6
5	SD002	土師器	碗C	2.5YR8/3赤黄褐	C・良	上	12.6	3.3	8.4				質2.7
6	SD004 A区	埴輪器	馬身A	31Y7/16白	陶瓦	中	12.6						2.6 14/36 B 3
7	SD003 A区	埴輪器	馬身B	N4/4灰	陶瓦	上	17.4						4/36 B 3
8	SD003 A区	埴輪器	馬身C	N5/7灰白	陶瓦	上							3
9	SD003 A区	埴輪器	馬身D	10Y7/1オフ白	陶瓦	上	13.8	4.3	9.2				3.5 16/36 B 3
10	SD002 A区	埴輪器	馬身E	2.5G27/2青オリーブ灰	陶瓦	中	14.3	4.15	7.3				3.2 16/36 B 3
11	SD002 A区	埴輪器	瓶A	5Y6/1灰	陶瓦	上	13.8						3.3?
12	SD002 A区	埴輪器	瓶B	5Y7/6灰	C・良	上	16.2						(3.0) 内曲面-ラミガキ、4/36 B 3
13	SD002 A区	埴輪器	瓶C	5Y7/6/6灰-2.5Y9/7/2青白	C・良	上	18.9						(3.0) 内黒釉、内曲面ヘラミガキ、7/36 B 3
14	SD003 A区	埴輪器	瓶D	10Y9/8/16白	C・やや粗	中	20.0						(2.6) 内黒釉、内曲面ヘラミガキ、8/36 B 3
15	SD002 A区	埴輪器	瓶E	2.5YR8/3赤黄褐	C・良	上			12.0				II 3
16	SD003 A区	埴輪器	瓶F	2.5YR8/3赤黄褐	C・良	上			11.9				外削りテ漏れ、B 3
17	SD003	埴輪器	ハケA	2.5YR7/2青黒灰	C・やや粗	中	15.0		13.4	13.4			5.36 B 3
18	SD003	埴輪器	ハケB	5YR8/3赤黄褐	C・良	上	13.2		13.2	11.6			4.26 B 3
19	P-1	埴輪器	ハケC	5YR8/4/15灰	陶瓦	上			16.4				把手付、3.1 初期?
20	A-03Ge	陶器	瓶身	2.5YR1/1青白	陶瓦	中			9.0				内曲面-ヨリ2/2区段、底部ヘラミガキ、B 3
21	SD001-D区	陶器	瓶B	5YR2/1青白	陶瓦	上			7.2				転用瓶、V 3.7?
22	試掘坑2	土師器	碗A	10Y9/8/3赤黄褐	C・精良	上			6.0				底部保存率1/2 調2新?
23	SD001(S5001)	中空土器	瓶	2.5YR8/2/6白	C・精良	上	(11.0)	(2.7)	6.4				(1.1) N-1
24	P-1	陶器	瓶	10YR4/3赤褐	やや粗	上							
25	SD002(S5002)	A 白瓶	瓶	5Y7/16白	陶瓦	上							V瓶? (12世紀代~)
26	長上断去	陶器	瓶	5YR8/1/1青白	陶瓦	上			16.8				直抜?
27	S-04Ge	白瓶	瓶	5YR8/16白	陶瓦	上			7.8				直抜? 動土53TR6/250萬、肥前系、道

注 1 土師器の胎土は、粘土ベースをC (Clay) で表し、精良・良・やや粗・粗の4段階に分類している。

2 烧成は、焼きまろりの良いものを上とし、以下下-中の3段階で判定している。色調は、原則外表面を記入、内面等異なる場合は、備考欄に記入。

3 ()内の数値は復元値である。

第Ⅳ章 波佐谷城跡確認調査

第1節 調査に至る経緯等

小松市には、古代加賀国の中核施設であった加賀国府や加賀国分寺、白山信仰の重要寺院である中宮八院、そして一向一揆の舞台となった中世城郭遺跡など、重要な遺跡が多く所在している。ただし、これらの遺跡は所在地をはじめとして、その実態も把握されていないものが多く、現在、遺跡の具体的な保護政策を講じることができていない。よって、これら的小松市にとって特に重要と判断され、将来的に保護していく必要性が高い遺跡を市内重要遺跡として位置づけ、所在地確認と遺跡の実態解明を目的とした確認調査を平成14年度より着手したものである。

その第一弾に実施したのが、一向一揆関連城郭遺跡確認調査である。平成14・15年度の2カ年に渡り、小松市波佐谷町所在の波佐谷城跡の確認調査と測量調査を行った。事前に波佐谷町内会の役員会において事業の説明を行い、町内会及び地権者の了解を得た。町内会には、調査員及び作業員の車両の駐車、道具小屋の設置場所等、様々な面でご協力を頂いている。事業費については、石川県教育委員会の同意の下、国庫補助事業として実施した。

第2節 調査の経過

1. 現地調査の概要

現地は、植林された杉や桧の林であったが、調査時には竹林や雑木で生い茂った状態であった。過去には凝灰岩の産地として利用され、石切り場も斜面に見ることができる。

調査において、概算で10ha以上あるとみられる城域を便宜上4分割し、A～D区の調査区を設定した。A区は、波佐谷城西郭を中心とする区域（約19,000m²）であり、平成14年度調査区とした。B区は、波佐谷城の主郭とみられる東郭を中心とする区域で、C区は伝承による波佐谷松岡寺跡の区域であり、両区を合わせて平成15年度調査区（約51,000m²）として設定した。D区については、A～C区が現在利用されていない雑木林であるに対し、森林組合が管理し現在も林業利用されている区域にあたり、下草刈りにおいて苗木や成本を損傷する恐れもあったことから、今回の調査対象からは除外している。

2. 調査の経過

〔平成14年度〕 前述のとおり、A区を対象として実施している。現地調査期間 平成14年12月20日～平成15年3月24日まであるが、天候の良い時に測量を行い、トレンチ掘削調査は主として3月に行っている。A区については、約半分が竹林に覆われていたが、郭部分は比較的見通しが効いたため、下草刈りは最小限に止めている。

地形測量に関しては、調査区内に任意に30m×30mのグリッドを業務委託により設定し、そのグリッド点の国土座標（日本測地系7系、以下同）を基準として1/40縮尺の地形図を調査員により作成した。試掘調査は、西郭の平坦面を対象に任意に十字トレンチを2カ所設定した。人力により掘り下げを行い、遺構の確認を主として行った。必要に応じて遺構の一部掘り下げも行い、内容及び土層の確認を行っている。トレンチ調査に係る測量は、基本的に1/20縮尺で作成している。遺物は、トレンチ掘削に伴うもの及び遺構の一部掘削で出土したものに限り取り上げた。重要なものに関しては出土状況の記録を行った。なお、調査成果については、次年度も調査が継続することもあり、地元町内



第30図 波佐谷城跡 調査地位置図及び区割り図

会及び関係者に対してのみ書面により報告を行った。

【平成15年度】 B・C区(約51,000m²)を対象としている。現地調査期間は、平成15年10月20日～平成16年3月26日までであり、1・2月は冬季閉鎖として一部を3月に実施している。A区に対し、雑木林が発達しているため、下草刈りに長期間を要している。また、その際には、現地を走る送電線の下部に地上権を持つ関西電力の担当者と現地で協議を行い、その承認のもとで作業を実施している。

地形測量に関しては、調査対象区域が広範であることと、より精度の高い測量図が必要とされたことから、民間測量業者に業務委託を行い、1/200縮尺のコンターを含む地形図の作成を行った。ただし、予算上の制約から、斜面裾部を含めた全域約51,000m²の作図を行うことができなかつたため、平坦面等が確認される範囲約33,000m²に限定して行わざるを得なかった。試掘調査は、B区は東郭の平坦面を対象に任意に十字トレントを1カ所設定した。C区は、松岡寺跡の伝承が残る丘陵先端部の中央に谷を挟んで何北に位置する2箇所の平坦面を対象に、任意にトレントを設定した。人力により掘り下げを行い、遺構の確認を主として行った。必要に応じて遺構の一部掘り下げも行い、内容及び

土層の確認を行っている。トレント調査に係る測量は、基本的に1/20縮尺で作成している。遺物は、トレント掘削に伴うもの及び遺構の一部掘削で出土したものに限り取り上げた。重要なものに関しては出土状況の記録を行った。

なお、調査成果については、地元町内会及び関係者に対して現地説明会を実施し、報告を行った。

3. 出土品整理

出土遺物は少なかったため、調査年度中に洗浄・注記・接合・実測作業を埋蔵文化財調査室臨時作業員により行った。ただし、一部未注記遺物に関しては、報告年度である平成20年度に、整理作業員により実施している。

また、トレース等の報告書作成作業も同様に報告年度に実施したものである。

第3節 周辺の城郭と歴史的環境

波佐谷町のある地域は、中世輕海郷の政所があったとされる大野から梯川が郷谷川と大杉谷川に分かれる分岐点を経て、大杉谷川の方の谷奥に入ったところにある。史料によれば、江指・長谷辺りまでは輕海郷の領域であったようであり、白山中宮の末寺である中宮八院の蓮華寺の推定地も長谷地内に所在している。山内莊に抜ける交通の要衝であり、その分岐点の谷の入口には、江指城があり、往来を監視していたようである。単郭の城郭であり、波佐谷城の出城と解釈される方もおられる。一方で、未確認だが梯川を挟んだ対岸には、一向一揆の武将「平野某」の平野塙があったという伝承もあり、土壘跡があったという言い伝えや、「門ノ内」、「馬乗」の地名が残っている。山裾に居館と山頂に山城があった可能性がある。居館と山城の時期が一致するかどうかは不明であり、金沢市の堅田B遺跡と堅田城のように両者が時期をずらして存在した可能性もある。「平野某」とは関係のない在地領主のものという可能性もあり、非常に近接する江差城との関係も含めて検討が必要である。

さて、磯前神社背後の丘陵上には、谷を挟んで南に「波佐谷松岡寺跡」、北に「波佐谷城跡」の存在が伝えられていた。松岡寺跡は、長享2年(1488)長享の一揆で加賀國守護富樫政親を滅ぼしたあと、加賀を支配した加州三ヶ寺の一つであり、本願寺八代宗主尊如の三男蓮綱によって創建された寺院である。享禄4年(1531)の享禄の錯乱(大小一揆)により焼失したことが文献にみえる。波佐谷城は東郭と西郭から構成される山城である。最高所(標高約100m)に位置し複雑な構造である東郭が主郭、単純な構造である西郭が副郭と考えられている。越前朝倉氏が侵攻してくる弘治元年(1555)頃までに造られたとみられる。また、東西両郭の構造差を時期差とみる説があり、新しいとされる東郭の築造及び修築主体については、天正8年(1580)柴田勝家軍に攻略されたときの城主である、一向一揆の武将宇津呂丹波・藤六の父子とする説や、同11年に小松城主となった村上頼勝が一族村上勝佐南門を置いたとの伝承から、その時点で改修を受けたとする説もある。村上頼勝の越後転封とともに廃城になったようであり、近世には西郭の西側斜面下には十村屋敷が建てられており、郭平坦面を畠地利用するために、その斜面の岩盤を削り抜いて階段と水溜めを敷設している。

また、明治34年に、城の北側に位置する畠地、通称「御城町」より、仏具や陶磁器を内蔵した壺が出土している。陶磁器は、瀬戸美濃天目茶碗1点、青磁碗2点、青磁香炉2点、白磁皿4点があり、15世紀後半から16世紀初頭が主体の製品である。戦国時代の陶磁器埋納事例の中でも規模が大きいものであり、時期的に見て、松岡寺に関連するという見方が有力であるが、内容が上八里横穴や津波倉ホットジ遺跡の地下式坑から出土した遺物に類似することから、場内に多数存在する横穴・地下式坑とその造成主体との関連性も考えられる。

第4節 確認調査の成果

1. 測量調査の概要

〔西郭〕 南北約80m×東西約40m、面積約3,200m²の大きさの曲輪である。南北上下2段に分かれた平坦面を東と南は土塁、北と西は切岸によって防御している。谷部を利用した堀切状部分のある比較的緩い斜面の方に土塁を構築し、防御性を高めている。土塁は東郭に比して高いものである。土塁頂部の幅は1m程しかなく、狭いものである。平坦面からなだらかに傾斜して上り、北側平坦面の東側土塁では約3m手前、南側平坦面の南側土塁では約2m手前で急傾斜となる構造で、内側に「武者走り」と考えられる段が確認されている。土塁頂部と谷底の比高差は、東側の谷奥部分の高い箇所で約7m、谷口の低い箇所で約18mを測る。南側では、23mを測る。急斜面側は、平地との比高差約30mを測り容易には登れない斜面である。その途中の標高65m地点（比高差約23m）より上位に切岸を設置している。よって、その地点に帶郭が残る。切岸の高さは、高い平坦面で約7m、低い平坦面で約4mを測る。平坦面は建物が建つ広さが十分にある。南東隅部を突出させ、折れをつくることで、北の谷間からの侵入に横矢が掛る構造である。虎口は、東面の土塁の切れ目部分が想定される。ただし、現地に所在する送電線の鉄塔工事の際に破壊したという話もあり、確認が必要である。また、その鉄塔により郭南東隅部の状況は把握し辛いものとなっている。南北平坦面の比高差は、約2mあり、土塁との比高差は、北側平坦面（上）で約3.5m、南側平坦面（下）で約3mを測る。最高所は南東隅部であり、標高約74mを測り、平坦面との比高差は約5mある。

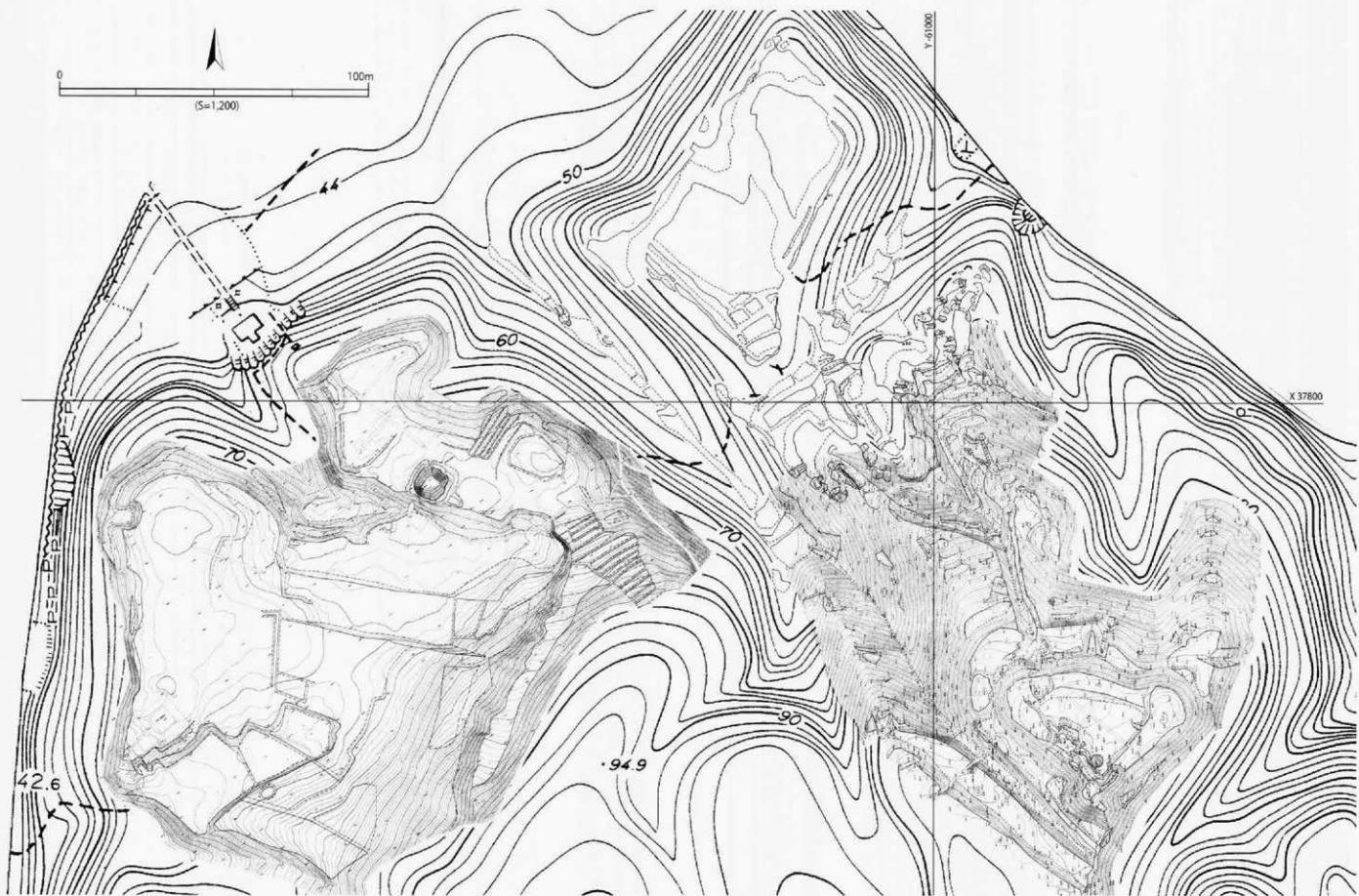
〔東郭〕 東西約60mの底辺を持ち、他の2辺が約45mを測る直角三角形状の形態を持つ。面積約1,350m²の大きさで、広さでは西郭の半分以下である。平坦面は1面であり、三方を土塁によって防衛している。平坦面の標高は約99.4m、最高所は約102mを測り、西郭との標高差は約28mである。土塁は西郭に比して低いものであり、平坦面との比高差は、1m前後しかない。一番高い南側隅部で、約1.8mである。土塁頂部の幅は平均5m、東側隅部では、14mもあり、根本的に構造が異なるようである。平坦面上に櫓等の構築物を造作して防衛したものと考えられる。土塁頂部と真下の平坦面との比高差は、3.5m程度でしかも、西郭のような高さに頼った防衛方法ではないことが考えられる。最高所の南側隅部は、南側に突出させており、櫓台を作成したものと考えられる。櫓台は、虎口に対する横矢掛かりとなっている。虎口は平入りであり、幅約7mもある広いものとなっている。南西片土塁の中央部を切って造られており、その部分にやや広い平坦面を持つ。その部分を中心として、前後に一段低い段を持っていている。虎口に至るには、北側丘陵から登ってきた場合、郭直下の平坦面で右方向へ一度折れて幅の狭くなった部分を通り、左方向へもう一度折れて、さらに左へ折れて到達するという3段階の折れを伴う導線となっている。郭自体は、南東方面は、横堀状に幅約7~7.5mの箱掘りを設置し侵入を遮断し、北側には直下の平坦面に土塁と縱掘りにより、横方向への動きを遮断している。また、櫓台直下にも横掘が掘られており、その防衛性を高めるとともに、その前の通路を狭くしており、南東辺側斜面への回り込み等をし難くしてある。その、南東辺自体は、深い谷に面しており、急斜面をそのまま利用した防衛となっている。ただし、櫓台下部に帶郭状の平坦面が若干残っており、その部分のみ切岸を施し、斜面をより急にした可能性がある。郭内部の櫓台直下には、直径約4.5mの円形土坑が開口しているが、貯蔵穴及び水溜め等が想定されるが確認はない。

〔東・西郭以外の部分〕 東西両郭間は、約140m離れており、西曲輪東側に接した谷を堀切状として明確に分かれている。緩斜面に転換するまでは、谷口で比高差は15m程度あるが、谷奥では比高差が無くなるため、緩斜面側には高さ約1.8m、幅約8m（裾部含む）の土塁を約25m（裾部含む）

に渡って構築し、敵の侵入を防いでいる。緩斜面には、段上に平坦面を作成することで防御しているが、規模の大きな平坦面はみられない。なお、東郭に近い平坦面の一つに円筒状の土坑の開口が確認されている。また、緩斜面は深い谷を挟んで東西に分かれ尾根が伸びている。その浅谷の奥から西曲輪に至る間には、緩掘が掘削されており、郭直下の平坦面まで斜面の分断は維持される。東郭南西側の横堀は、そのまま西郭の南東側の谷底へと連続し、集落部まで抜けている。後述する松岡寺推定地と城を分断する大堀切となっている。その意味では、横堀も谷奥で高低差が無くなり尾根統合となつた部分を切る目的で掘削された堀切の一種であり、郭の後線を開拓したのではないといえる。ここで、城内における道を若干検討しておきたい。さて、城の大手であるが、西郭北東側の谷口と南西側の谷口が考えられる。東西両郭への進入口としては、北東側谷口の可能性が高くなる。理由として、西郭虎口に通ずることや、緩斜面側土塁の北隅部に階段状の斜面や緩斜面浅谷を塞ぐ土橋状の土手から緩斜面最端の平坦面に通じており、東郭に至る進入口と考えられることからである。そこから現在の遊歩道脇で浅谷に落ちる手前の箇所に道状に幅約1~1.6mの1段低く掘削された部分があり、そこがルートであった可能性がある。その掘削部は谷奥で土塁側の丘陵から登るルートと合流し、前述の緩掘の堀底を通って東郭に至ったものと考えられる。一方で、大堀切状の南西側谷部についても、谷底を伝って行けば、東郭に到達することができる。また、かなり無理をすれば、西郭に上ることもできる。また、堀底の中間地点に10m×12mの方形の平坦面が造られていることからも、一つのルートであった可能性は残る。但し、その場合緩斜面にのこる様々な施設が不要となるため、やはり、両郭へ通ずる北東側谷部が大手ではなかったかと考える。

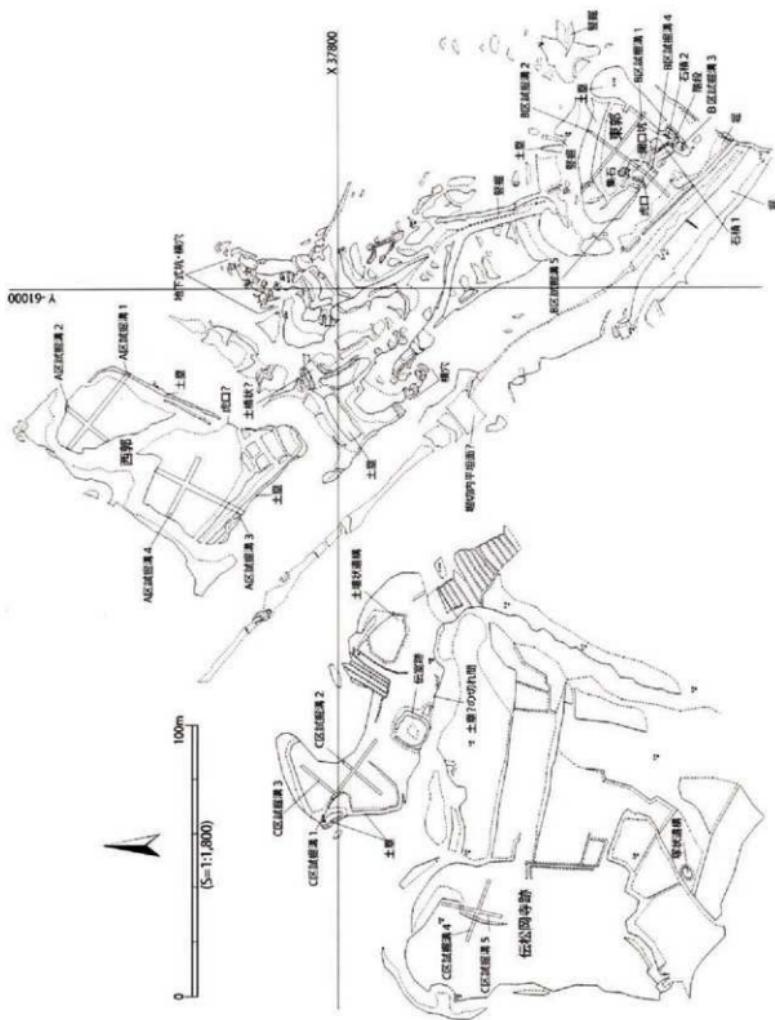
〔伝松岡寺跡〕 伝松岡寺跡については、面積が広大でかつ竹藪や雜木林が密集していたため、予算上の制約から最低限測量必要な部分しか下草刈りを行っていない。よって、試掘を行った場所は伝承の残る地点を優先して選択したことはじめにお断りしておく。

城跡から大堀切状の谷を挟んで南西側に位置している。丘陵先端の平坦面は、小谷を挟んで南北に分かれ、北側平坦面の先端部に土壘状の遺構が残る。また、北側平坦面北端と南平坦面西端には大走り城の平坦面がある。ただし、南側平坦面のその部分は、小学校建設時にグラウンドの土砂を採取したそうであり、当時の遺構であるか見極めが必要である。標高は西郭と同じ70m前後を測る。谷奥に広大な平坦面が存在しており、室跡とされる1辺10mの縦坑が現状で確認できる。その室跡は、四方を土手で囲み、北隅部を開口させている。深さは約4mあり、南側の一段下の平坦面と横穴で繋がっている。土壘状遺構は、北側平坦面の南西側にのみ認められ、高さ80cm程度の低いものである。土壘の内側に平坦面より一段高くなした平場も確認できるが、あまり防御性の高いものとはいえない。測量調査によって、北側平坦面の奥に約20m×12mの基壇状の部分が確認された。南側の空閑地を挟み、一段下の平坦面へ降りる部分にある土壘（土手状）の切れた部分が入口とも考えられ、南面する何らかの建物が存在した可能性も考えられる。ただし、礎石等は確認されておらず基壇状の形態も歪であり、浄土真宗において中心建物は、西へ向いて拝む配置とすることが望ましいため、検討を要するものである。平坦面は、少なくとも段によって区画が分けられていることは分かる。ただし、平坦面は後世において耕地化されており、現在の区画がどの段階のものであるのかは判断できない。また、西奥部分には一段低く現在でも水の滞留する箇所がみとめられる。池状に水を溜めた施設かもしれないが、谷水田の可能性もあり、平坦面上はかなり後世において開発されたことが予想される。さらに、谷奥平坦面南端付近において、長径4.5mを測る土饅頭型の塹も1基確認されているが、その性格も分らない。平坦面南側は緩斜面状を呈しているが、平坦面の南端を示す部分（標高71~80m）において、高さ約5mの急斜面による段差が付けられており、段上部が帯郭状の平坦面となっている。それ



第31図 波佐谷城跡 測量図

第32图 波佐谷砾脉 读構図



より南側は、再び急斜面となっており、約20m標高が上がり丘陵頂部へと至る。

2. 試掘調査の成果

今回の調査において、調査後の政策が未定なため、試掘溝は幅1mで設定し、最低限のものとしている。よって、造構の保全を最優先したため、試掘溝の拡張及び造構の完掘は原則行わず、土壠の立ち割り調査も実施しなかった。

〔西郭北側平坦面試掘溝〕

(1) 土坑

① SK01

試掘溝2西端から検出された土坑である。調査区域外にも延びるため、全体形状は不明である。検出部辺で一辺約120cmを測る隅丸方形状の掘り込みである。確認された深さは約43cmであり、底面は一定しない。最下層より焼土を含む炭層が確認されている。ただし、壁面等は焼けておらず、その場で火を焚いたものではない。遺物は、土師器小皿片が出土している。SK03出土の小皿片と類似していることから同年代と考える。

② SK02

試掘溝2西端から検出された土坑である。調査区域外にも延びるため、全体形状は不明である。検出部辺で一辺約112cmを測り、深さ15cm程度の方形状の浅い掘り込みである。覆土を取り除くと東隅部より礎石様の平坦な石が検出された。石は、略方形を呈し、一辺約35cm、厚さ約13cmを測るもので、現地で採取可能な凝灰岩である。

③ SK03

試掘溝2中央付近から検出された土坑である。調査区域外にも延びるため、全体形状は不明であるが、不整形であると想定される。検出部辺で長辺約210cmを測る。確認された深さは約26cmと浅く、底面は平坦面である。にぶい黄褐色埴土で埋まっており、埋土には炭化物や焼土が多く含まれている。土中より土師器大皿2個体と小皿1個体の破片が出土している。土師器皿から16世紀後半（1560～80年）の造構と想定される。

④ SK04

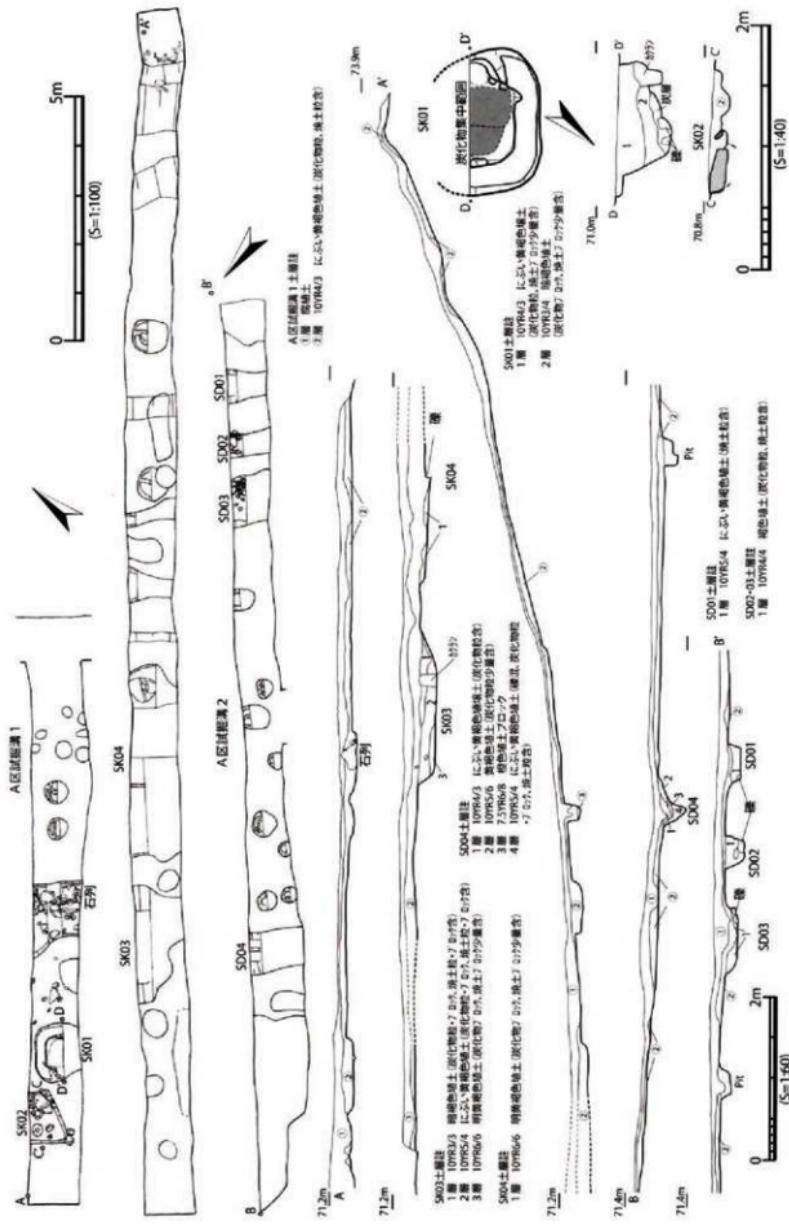
SK03東側から検出された土坑であるが、深さ5～10cm程度で土層断面でも明確に確認できるものではない。確認長で約4.5mもあり、落ち込みないし造成痕というべきものである。調査区域外にも延びるため、全体形状は不明である。東側隅部でピットが確認されている。遺物は、備前窯在地の作見窯とも考えられる瓶子の破片や、国産と考えられる柴付磁器の皿片のほか、小刀とみられる鉄製品が出土している。加えて、加賀窯の破片や土師器灯明皿小片もみられるなど検出造構の中では雑多な印象を受ける。17世紀前半頃の近世初頭の造構と考えられ、造成時に下位の土坑を破壊したものかもしれない。

(2) 溝

① SD01～03

試掘溝1南側に位置し、試掘溝を東西方向に横切る溝である。SD01が幅54cm×深さ20cmで埋土がにぶい黄褐色埴土、SD02が幅46cm×深さ30cmで埋土が褐色埴土、SD03が幅96cm×深さ20cmで埋土が褐色埴土である。3条とも浅いものであるが、SD01と02は壁面が立つ箱状を呈しており、幅が広いSD03とは形状が異なる。また、SD02と03の南半分において、壁面から下底面にかけて小蝶や人頭大の蝶が出土している。

② SD04



第33图 波佐谷城镇 A区试验段 1+2 断面图

試掘溝 1 北側に位置する溝で、試掘溝を東西方向に横切る点は S D 0 1 ~ 0 3 と同じである。ただし、断面 V 字状になる点が異なっている。埋土はにぶい黄褐色埴土で、上面は擾乱を受けたようである。よって、南岸のなだらかな部分については、地山粘土ブロック層が挟まっていることからも、崩れたものと判断される。溝の幅は、現況では約60cmだが、V字状に復元すれば45cm程度となる。深さは約30cmを測る。S D 0 3 - 0 4 間は約8m開き、S K 0 3 - 石列間は約10mあることから、この間には約80m²の空間地が存在している。

(3) 石列

試掘溝 2 西寄りに検出されたもので、石は南北に連なっているようである。幅約95cmを5cm程度溝状に掘削したなかの東寄りに設置されている。検出箇所では、40~50cm台の礫を2列に配置し、隙間に10cm大の小礫を詰めているようである。

〔西郭南側平坦面試掘溝〕

(1) 土坑

① SK 0 5

試掘溝 4 中央付近より検出しており、直径約240cmを測る略梢円形状を呈する想定され、南側端部はテラス状となる。深さ約25cmの浅い掘り込みであり、底面はすり鉢状に中央部が低くなっている。埋土はにぶい黄褐色埴土層が大部分を占めているようであり、土中に炭化物や焼土粒・ブロックの他、礫が含まれていた。礫は小型のものが多いが、中央部に30cm大のものが出土している。遺物は、瀬戸大窯の灰釉後皿とみられる製品が出土している。時期は、大窯Ⅱ期後半の器形に近いと思われるが、遺構の時期判定の決定打にはならない。しかし、16世紀中頃~後半頃の遺構であることは間違いないと思われる。

② SK 0 6・0 7

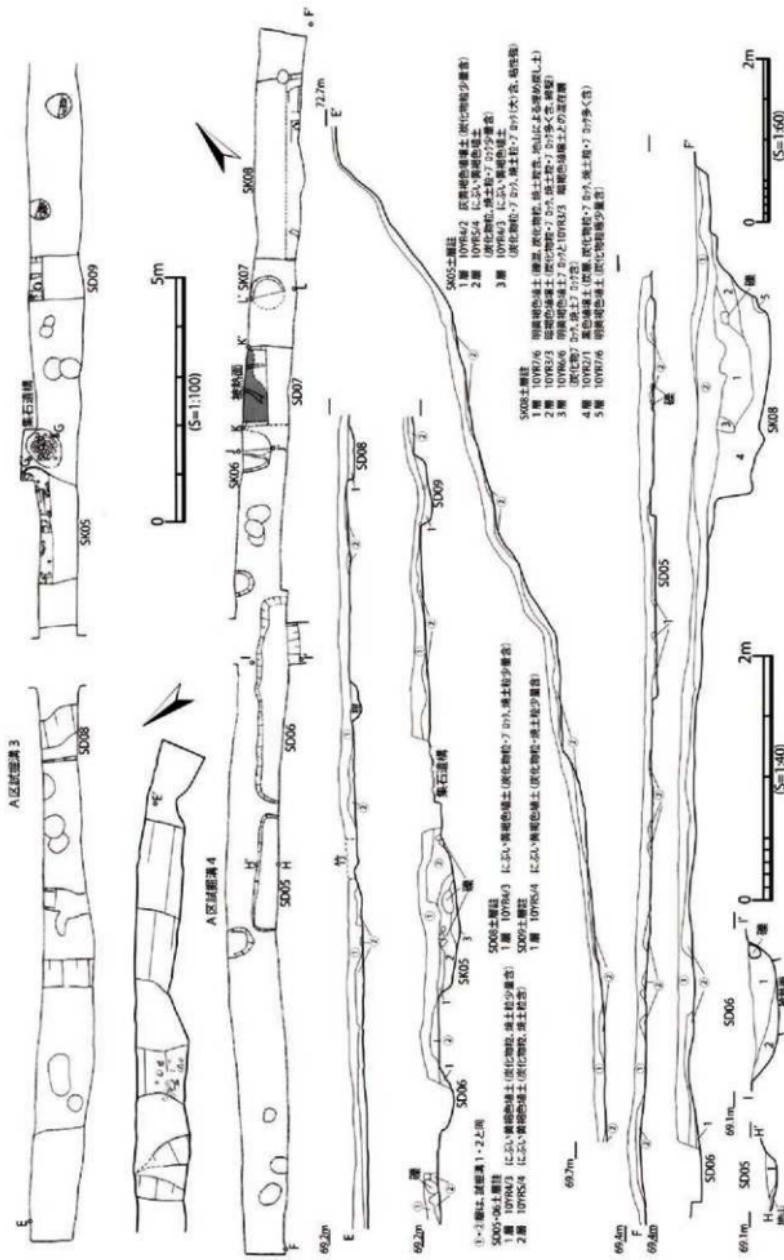
試掘溝 3 東側で検出された円錐土坑である。壁面もほぼ垂直であり、円筒形を呈する。S K 0 6 は直径52cm×深さ20cm、S K 0 7 は直径60cm×深さ12cmを測るごく浅いものである。S K 0 6 の埋土は、褐色埴土であり、下底面に比熱の痕跡が確認された。S K 0 7 は暗褐色埴土であり、炭化物や焼土のブロックを多く含んでいる。遺物は出土していない。

③ SK 0 8

試掘溝 3 東端で検出され、確認長で約380cmを測る大型の土坑である。深さも約70cmを測り、他の土坑に比して規模の大きなものである。最下層の4層や2層中にみられる多量の焼土塊及び比熱凝灰岩屑を廻棄した後、地山粘土を削った土で塞んだ中央部を埋めているのが特徴である。遺物は、土中より越前焼の播鉢の小片が出土している。試掘坑掘削時に出土したものと同一個体と考えられる。卸目の様子から、IV期後半~V期前半(15世紀後半~16世紀前半)のものと推察される。中世陶器は遺構の年代の決め手にはならないが、S K 0 3 等よりは古い遺構の可能性がある。次に、当土坑に廻棄された多量の焼土塊及び焼凝灰岩屑の性格について検討する。焼土塊には、炭を挟み込んでいるものが認められる。また、焼凝灰岩屑は、比熱の度合が高くなり劣化しており、石製品加工時の比熱レベルではないことは判断できる。よって、土と石が両方混在していることから、郭造成時に岩盤層を削るために焼いた可能性が考えられる。一方で、近接地(S D 0 6、S D 0 7)において比熱面を確認することができることから、建物等の何かの部材が焼け落ちたものを片付けた跡の可能性もある。しかし、平坦面上広範囲に焼けた痕跡は確認されておらず、城自体が焼け落ちたものではないと考えられる。

(2) 溝

第34図 波住谷城跡 A区試掘溝3・4実測図



① SD 05・06

試掘溝3中央付近に位置し、試掘溝に平行する溝である。SD 05が全長約230cm×深さ6cm、SD 02が幅420cm×深さ20cmを測る。幅はSD 06の両岸検出部で84cmを測る。極浅いものであり、にぶい黄褐色埴土で埋まっている。直線的な長さの短い溝であることから、建物の雨落ち溝の可能性も考えられる。遺物が出土していないので、時期は判断できないため、後世の烟の歎溝の可能性もある。ただし、SD 06のセクション付近の下底面から、比熱痕跡が確認されている。

② SD 07

試掘溝4北側に位置している。溝として遺構番号を振ったが、溝ではないかもしれない。幅約160cmの部分が、約10cm落込むものである。下底面が比熱しており、一部焼結した部分も認められる。埋土はにぶい黄褐色埴土である。

④ SD 08

試掘溝3と試掘溝4が交差する地点付近に位置し、試掘溝に直行する溝である。幅55cm×深さ14cmを測る。極浅いものであり、にぶい黄褐色埴土で埋まっている。

⑤ SD 09

試掘溝4中央やや西寄り付近に位置し、試掘溝に直行する溝である。幅58cm×深さ13cmを測る。にぶい黄褐色埴土で埋まっており、規模的にもSD 08と類似している。両溝間は、約8.3m離れており、北側平坦面のSD 03-04間の幅に近似する。

(3) 集石構造

試掘溝4中央付近に検出されたもので、平面的な集石である。長径165cmの楕円形土坑の上に配置されたものである。山石もみられるが、河原石も多く使用されている。一部15cm台のものも見られるが、10cm台のものが多く使用されており、平均的である。その性格は不明である。

〔東郭平坦面試掘溝〕

(1) 柱列

試掘溝1西側で確認された1~4号ビットである。径55cm~80cmの楕円形で、深さ10~20cm程度の極浅いものであるが、ビット底の平坦面に著しい硬化が認められたため、柱列と判断したものである。主軸はN-49°Wで、柱間寸法は平均276cmである。掘立建物跡になる可能性も考えられる。

土壘上のビット群

試掘溝2の北端土壘上において多数の小ビットが確認された。ただし、極浅いものが多く、柵等に発展するものは確認できない。その中でもP-5のみは底が尖る形状で、約30cmの深さを測る。暗褐色埴土で埋まっている。

虎口付近のビット群

虎口付近において、両側土壘の掘部に入れた試掘溝4・5において検出されたビットである。虎口全面の緩斜面に位置し、2個が対になって検出されている。ただし、虎口付近は攪乱が多く、深さが20cm程度と極浅いものであるから門に関係したビットかどうかは断定できない。柱間寸法は、P-6~P-7間が210cm、P-8~P-9間が150cm、P-6~P-8間が615cm、P-7~P-9間が650cmであり、一定していない。褐色埴土で埋まっている。

柵台上のビット群

柵台上は、抜根跡などの攪乱が酷く、明確な柱穴を確認することはできなかった。

(2) 溝

① SD 01

試掘溝1の中央やや西寄りの地点に位置し、試掘溝を東西方向に斜行する溝である。幅48cm×深さ6cmを測る。極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。

② S D O 2

試掘溝2の虎口土壇内側下部に位置し、試掘溝に直行する溝である。虎口土壇には平行している。幅90cm×深さ8cmを測る。褐色埴土で埋まっており、底部は中央部がもっとも低くなる鉢状を呈する。土壇直下に位置しており、排水のための溝であろうか。

(3) 石積及び階段

① 石積0 1

橋台西側に連なる南土壇の内側で検出されたものである。幅約6m、高さ約1mに渡って築かれている。現地で採取可能な角礫質凝灰岩を乱積みしたもので野面である。そのため目地は一定しておらず、概ね4段に積まれている。西側方向へ下部の地盤が上がるにつれて、2~1段と段数を減じている。東端は、橋台へと登る階段に連続している。概ね下段には約40cm×25cmの石材が使用され、上段には一回り小さい約30cm×約15cmの石材が使用されているようである。ビンボルによる刺突のみの確認だが、栗石をつめるような裏込めは存在しないようである。橋台内側部の土留と考えられる。

② 石積0 2

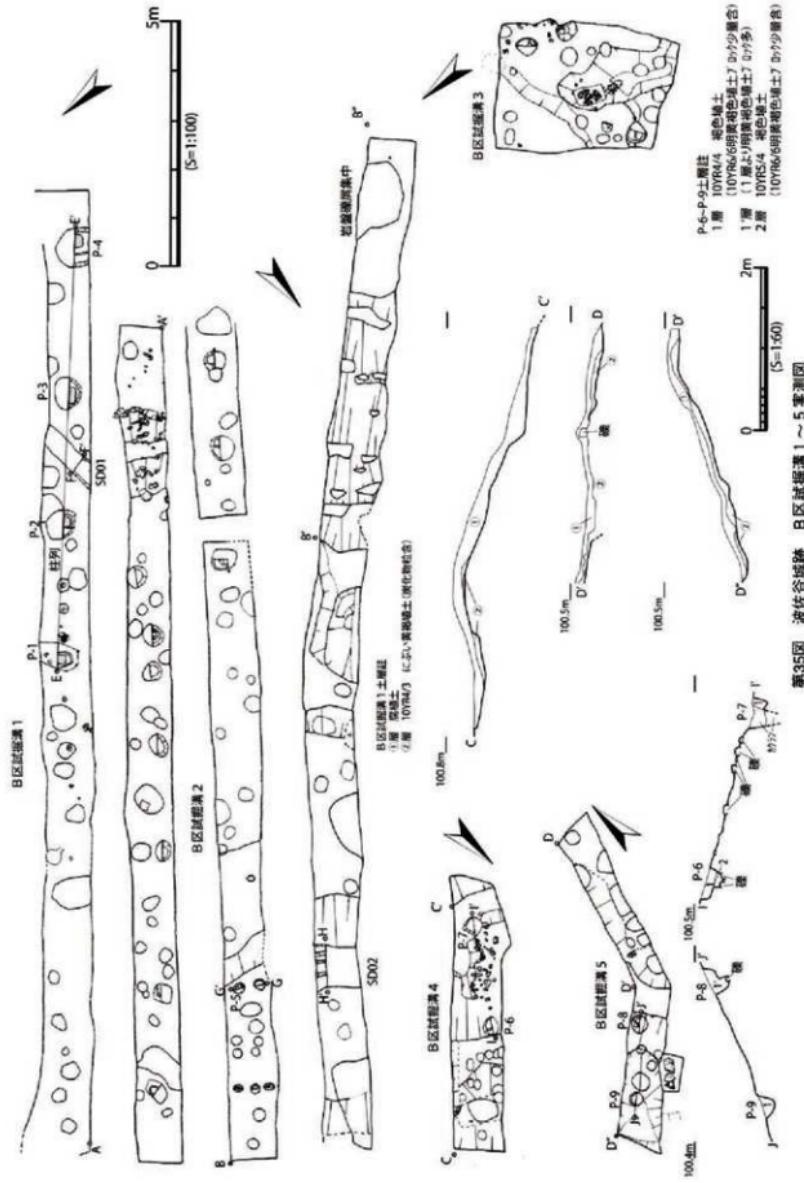
橋台北側に連なる東土壇の内側で検出されたものである。幅約2.8m、高さ約0.9mに渡って築かれている。石材は、同じ角礫質凝灰岩である。野面ではあるが、石積0 1に比べ比較的目地が通っている。5段に積まれており、2~3段目と3~4段目の間はやや下がって階段状に積まれている。比較的扁平な石材を選んで使用しており、下段には約50cm×15cmの一番大きな石材が使用され、2段目には小割りの石材を使用し、3段目にまた約40cm×約25cm等の大きめの石材を使用している。4段目は、3段目より一回り小さい約30~40cm×約15cmの石材を使用し、最上段には約40cm×約15cmの形の共通した石材を意図的に使用しており目地を揃えている。同様の確認だが、栗石裏込めは存在しないようである。石積0 1と同じく橋台内側部の土留と考えられるが、積み方や石材の選択方法が異なっている。同時期に別の集団が構築したのか、普請の時期が異なっている可能性も考えられる。

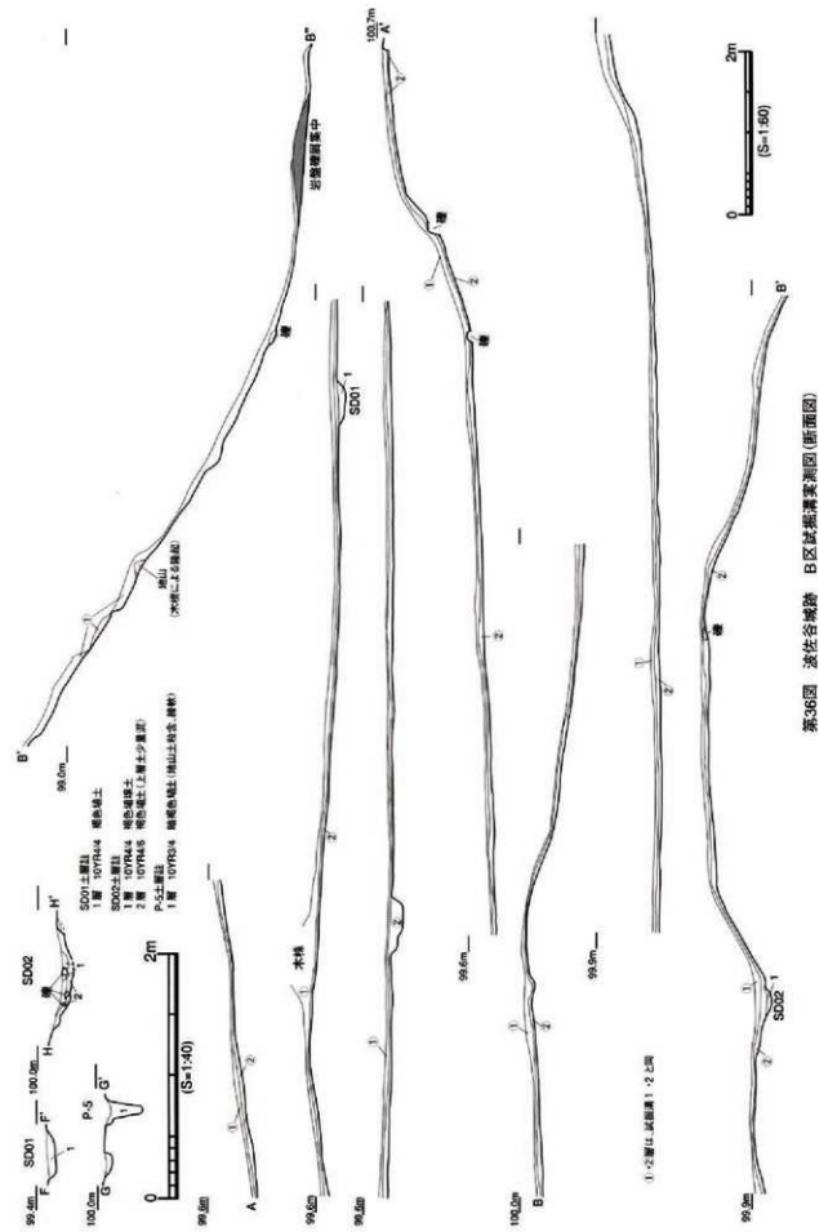
③ 階段

石積01と石積02の間の南面土壇側から階段構造が検出されている。幅は、約1mに復元される。最初の基礎石を1段に数えると、高さ150cm、角度25°の斜面を8段で登るものである。ただし、6~最上段までは角度が急になり、40°の傾斜角となる。段の先端部のみに細長い石材を嵌め込むものであるが、階段自体の掘削は甘く、2段目と3段目以外は水平な箇所がない。よって、上段は石自体が足掛かりの機能を果たすものと理解される。石材は概ね長さ35cm×幅15cm程度のものが使用されているが、一定しておらず小割りなものも使用されている。奥行きは概ね30~35cm程度確保されているが、上がり幅は一定しない。地面~1段目間13cm、1段目~2段目間12cm、2段目~3段目間35cm、3段目~4段目間13cm、4段目~5段目間21cm、5段目~6段目間25cm、6段目~7段目間22cm、7段目~8段目(最頂部)間9cmを測る。特に、2段目~3段目間が高いためか、2段目から21cm上がった位置に2.5段目ともいえる段が設けられている。南面石積との位置関係は、階段の石材の方が石積の石材より奥へ入り込んでいるようである。

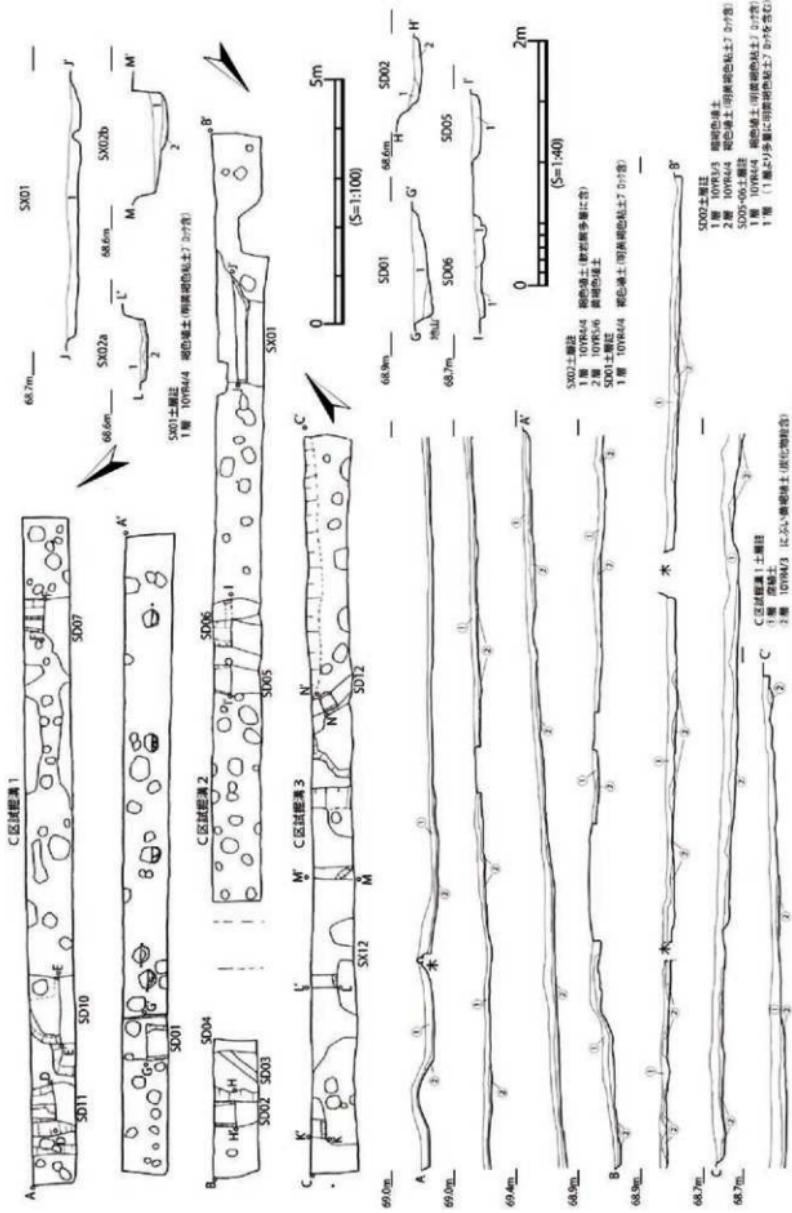
(4) 開口円形土坑

南面石積の前面に位置し、以前から開口した状態である。現況で直径440cm深さ140cmを測る。その性格を把握するため1/4のみ掘削をおこなった。約30cmの掘削で下底面に達し、中央部が窪む形態であった。土層は腐植土と流れ込み土壤の互層であり、遺物は出土しなかった。倉庫的利用であれば、

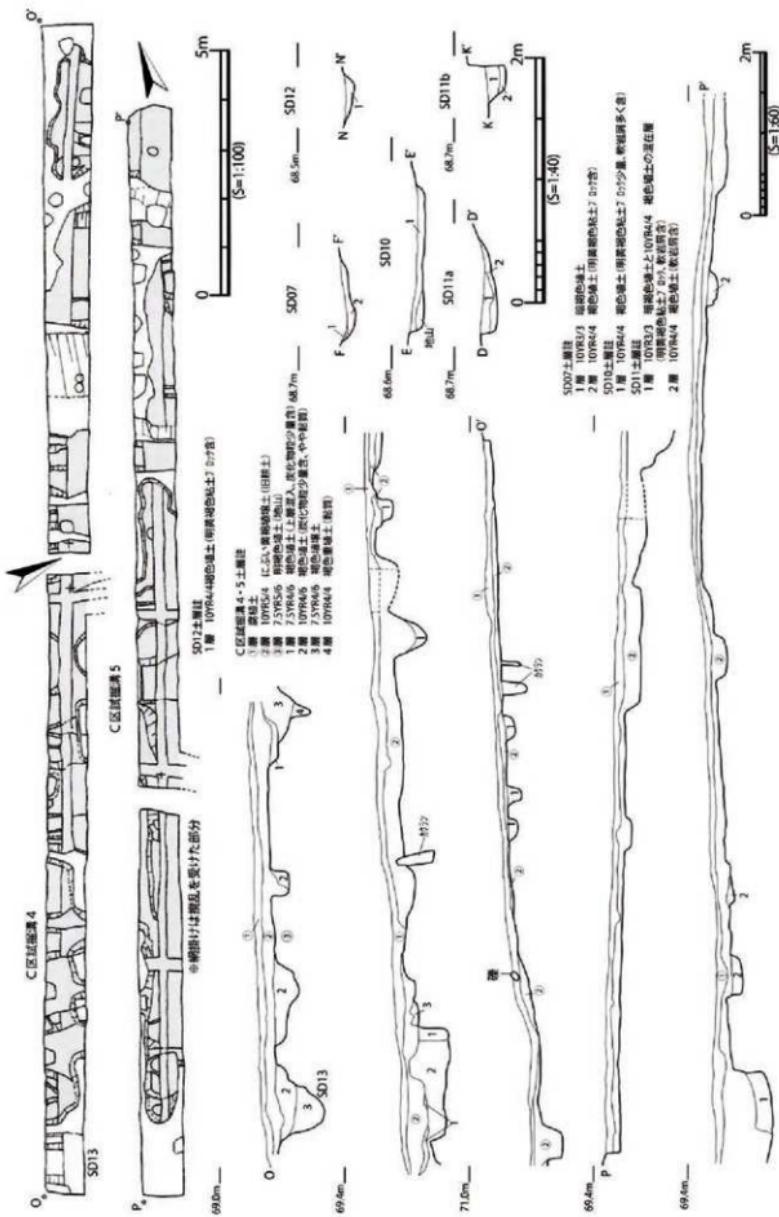




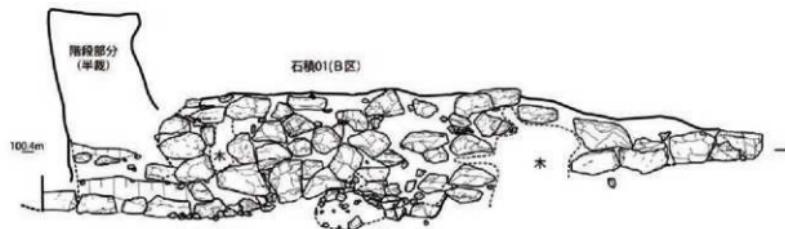
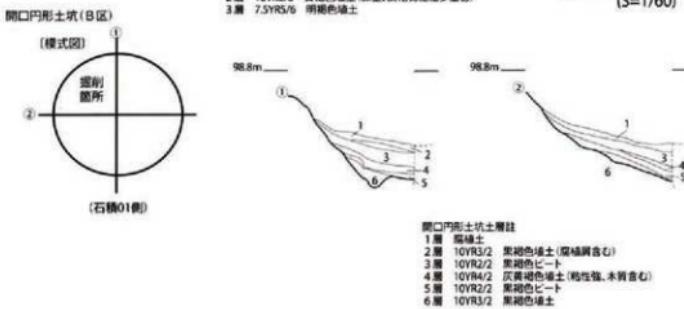
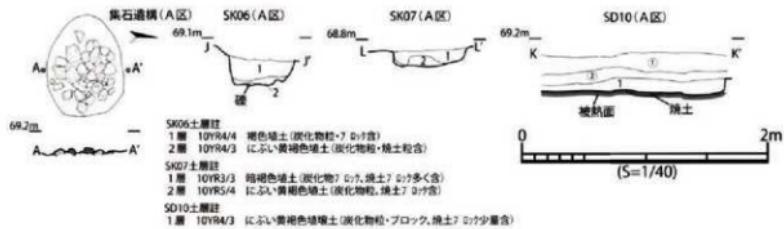
第36图 波佐谷坡 B区试验沟实测图(断面图)



第37図 渡佐谷城跡 C区試掘溝1～3実測図



第38図 渡佐谷城跡 C区試掘溝4・5実測図



第39図 波佐谷城跡 遺構実測図1

既に片付けられた状態といえる。掘削が浅く、水がしみ込んでいくことから、井戸とは考え難い。大甕等の溜める器の設置が必要である。

(5) 集石造構

虎口内面西側の南面土塁裾部から多量の河原石を伴う集石が検出されている。2.5m×3.5mの範囲であり、2～3段は積まれているようである。国庫補助事業のため調査期間が足りず、実測はできなかつた。石は約10cm台の河原石が主体を占めている。その性格は分らないが、手で投げるには丁度良い大きさであることから、飛鏢として利用したものであろうか。また、鳥越城のように虎口の石垣改修を見越して、集石を運び込んだものであろうか。また、これと同類の集石がもう1箇所試掘溝1の西端付近で確認されており、持ち込まれた河原石の量が大量であることが推察される。その機能論には、結論をだすことが現時点ではできないが、主郭内に持ち込まれた大量の集石事例として重要であり、類例等があれば御教授頂ければ幸いである。

(6) その他の遺構

波佐谷城域内で、地下式坑5基、中世横穴13基が確認されている。その内、一部は開口している。未調査のため明確な時期は不明だが、築城以前の造営と考えられる。墓或いは入定窟と考えられ、造営主体を桙宗系ならびに真言系寺院に求める意見がある。波佐谷地区にも聖興寺（松岡寺とは異なる）の伝承があり（註1）、今後も検討が必要である。

〔伝松岡寺跡北側平坦面〕

(1) 溝

① SD01

試掘溝1の中央やや南寄りの地点に位置し、試掘溝を直行する溝である。幅93cm×深さ14cmを測る。極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。

② SD02

試掘溝2の東端付近に位置し、試掘溝を直行する溝である。段状に上がる箇所の直下にあり、幅58cm×深さ6cmを測る。極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。

③ SD05

試掘溝2の中央付近に位置し、試掘溝を直行する溝である。幅57cm×深さ7cmを測る。極浅いものであり、暗褐色埴土で埋まっている。

④ SD06

試掘溝1の中央付近、SD05の西側に位置し、試掘溝を直行する溝である。2本の溝が切り合った状態である。新しい方が幅52cm×深さ8cm、先行する溝が、残存長幅52cm×深さ10cmを測る。極浅いものであり、暗褐色埴土で埋まっている。

⑤ SD07

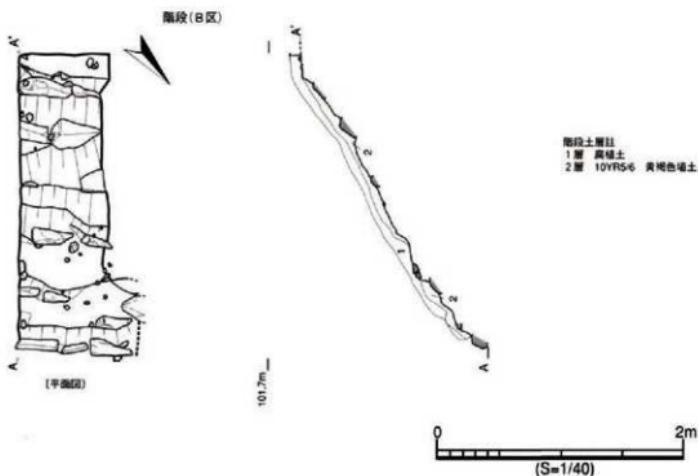
試掘溝1の中央やや西寄りの地点に位置し、試掘溝を直行する溝である。幅66cm×深さ6cmを測る。極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。以上のSD01・02・05・07が相互に関係した溝と判断されるならば、その内部に約4.5m×約8mで面積約36m²の長方形区画がみえる。

⑥ SD10

試掘溝1北側に位置している。溝として遺構番号を振ったが、溝ではないかもしれない。幅約120cmの部分が、約10cm落ち込むものである。埋土は褐色埴土であり、岩盤層を多く含んでいる。

⑦ SD11

試掘溝1の西端付近に位置しており、試掘溝3に連続している。西側土塁手前の1段高い壇の直下



第40図 波佐谷城跡 遺構実測図 2

にあり、L字に曲がっていることが確認されている。長幅77cm×深さ13cmを測り、何らかの区画を表している可能性がある。褐色埴土と暗褐色埴土の混在土で埋まっている。

⑧ SD 1 2

試掘溝3の中央や北側に位置し、試掘溝を東西方向に斜行する溝である。幅38cm×深さ8cmを測る極浅いものであり、褐色埴土で埋まっている。

(2) 落込み状遺構

① SX 0 1

試掘溝2南端付近より検出しており、幅約210cm×深さ約10cmを測る落ち込みである。埋土に地山粘土ブロックを含んでおり、整地痕跡と考えられる。

② SX 0 2

試掘溝3南端付近より検出しており、幅約540cmに渡って確認されている。深さ6~12cmを測り、不整形なプランである。岩盤屑を多量に含んだ埋土であり、SX 0 1同様整地痕跡と考えられる。

〔伝松岡寺跡南側平坦面〕

南側平坦面は、地元に松岡寺の伝承が残る地点である。ただし、後世の擾乱が広範囲に及んでおり、遺構の確認すら困難な状況であった。よって、限定された範囲での調査ではあるが、寺院跡を示すような痕跡は検出されなかった。また、文献にみられる焼失を示す痕跡も確認されなかった。ここでは、擾乱が酷かったことから、立ち割りをして地山土の確認を行っている。よって、地山土とした土層より下位に遺構が存在するということはない。また、断面上において、溝状に掘り込まれた痕跡が確認されたが、SD 1 3に残存している土層などが遺構覆土であった可能性がある。

第5節 出土遺物

はじめに

ここでは、城郭に關係すると考えられる遺物のみを報告する。繩文期と考えられる遺物や須恵器片は、攪乱出土であり、小片のみであることから割愛させて頂く。以上を踏まえた上で出土量をみると、圧倒的に西郭からの出土が多い。その中でも特に、北側平坦面からの出土が殆どである。東郭からは、図示した5点のみが出土している。

1. 造構出土遺物

(1) SK01出土遺物（第41図-1）

土師器小皿口縁部破片である。ヨコナデによりやや外傾した立ち上がりとなる。口径は、SK03出土の類似品を参考に復元したものである。

(2) SK03出土遺物（第41図-2～4）

2・3は土師器大皿、4は土師器小皿である。2は、体部が外傾して立ち上がり、口縁端部を上方つまみ上げている。また、体部内面と見込み部の境に凹線状の窪みが施されている。薄手で硬質な特徴を持ち、橙色に発色している。京都系を模倣した在地産である（註2）。3は、2に比べ厚手であり、強いナデにより外反気味に体部が立ちあがる。胎土も異なり、発色もにぶい橙色である。ただし、同様に口縁端部のつまみ上げや見込み凹線も見られるものである。4は、胎土が3と共通しており、体部がやや外反気味に立ちあがる点も共通しているといえる。発色は、浅黄橙色である。時期は、16世紀後半の内、1560年～1580年頃ではないかと考えられる（註3）。

(3) SK04出土遺物（第41図-5～7）

5は、瓶子の底部付近の破片とみられる破片である。一見、備前窯とみられるが、胎土から在地産である作見窯の可能性も考えられるそうである（註4）。いずれにしても、16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられる。6は、国産の染付罐反腕の破片である。口縁部内面に一条の線が描かれている。7は、鉄製品であり、小刀の一部と考えられる。錆びているが、断面二等辺三角形状の身の部分が確認できる。

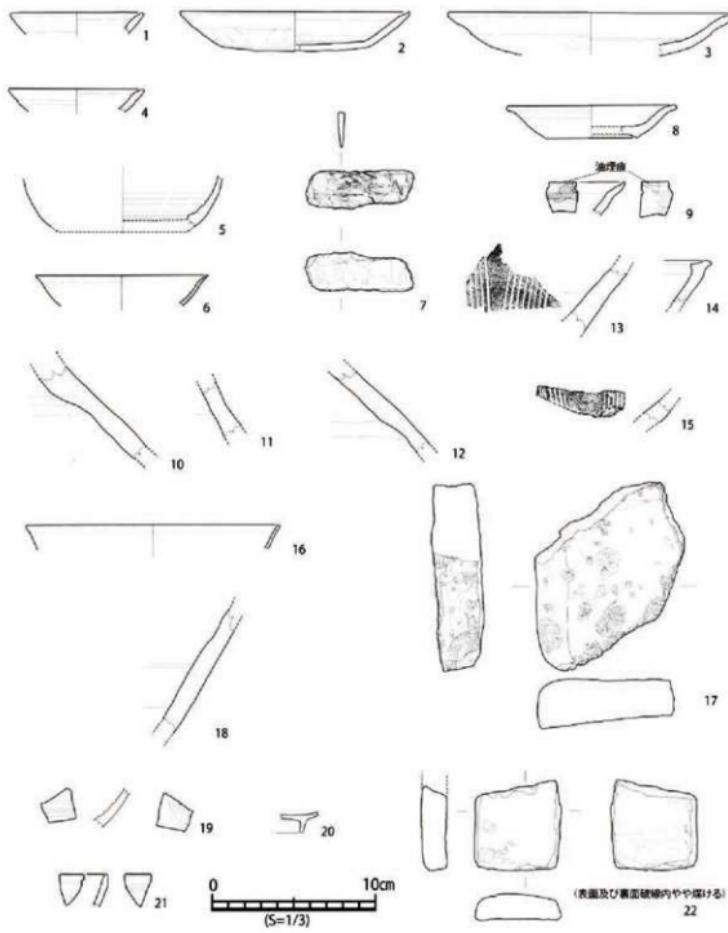
(6) SK05出土遺物（第41図-8）

瀬戸大窯期の製品であり、器形と削り出し高台であることから、灰釉稜皿と考えられる。底部と見込みの輪ドチが接していた部分は露胎となっている。釉にはやや細かい貫入が入っている。時期は、大窯II期後半の器形に近いと思われるが、筆者には断定はできない。

2. 包含層出土遺物

(1) 西郭出土遺物（第41図-9～17）

9は北側平坦面出土で、土師器大皿の口縁部破片である。3と同様にヨコナデにより外反しており、口縁端部のつまみ上げもみられる。胎土も共通している。ただし、内外面に煤の付着がみられ、灯明皿として使用されていたようである。10～12は加賀窯の甕の破片である。3点とも北側平坦面の出土である。12は他に比べ胎土が精良であり、酸化発色である。他の2点は、還元気味の発色である。10には外面に自然釉が掛っている。13は越前窯の擂鉢の破片で、やや焼締めの甘い個体である。南側平坦面の出土であり、鉗目の様子から、IV期後半～V期前半（15世紀後半～16世紀前半）のものと推察されるが、小片であり断定はできない。14・15は北側平坦面出土で、鉄釉擂鉢の破片である。产地は特定できないが、瀬戸系の可能性が考えられる。時期も不明だが、近世まで下る可能性がある。16は北側平坦面出土で、中国製の染付椀である。内外面に一条の線が描かれる。17は、砥石で、南側平坦



第41図 波佐谷城跡 出土遺物実測図

面出土である。割れや剥離が激しく判断し難いが、側面と上面を底面としている。

(2) 東郭出土遺物(第41図-18~22)

18は越前窯の壺の胴部破片である。東面土墨の直上から出土している。19~21は中国産の磁器であり、全て平坦面からの出土である。19は、青磁碗の破片で内外面に施文されているようである。外面は蓮弁文と考えられ、鍋の表現も施されている可能性がある。20は白磁の底部・高台破片であり、豈

第5表 土出土遺物観察表

番号	遺物名	種類	形態	色調	出土	地成	E1付	器高	底径 内面	制御部 内面	部材	寸法 mm	(単位:cm)			
													底径 外側	底径 内側	備考	
1	A15SK001	中世土師器	直	7.5YR8/3(赤黄)	C鉄直	中	(8.0)									2ト回転企
2	A15SK003	中世土師器	直	2.5YR7/8(赤)	C+中粗	上	14.0	2.4	9.0							2ト京都企、1560~1589年頃、13.36
3	A15SK004	中世土師器	直	3YR7/4(赤・白)	C+直	下	17.0	0.7								2ト回転企、2/26
4	A15SK007	中世土師器	直	7.5YR8/3(赤黄)	C鉄直	中	8.4									2ト回転企、4/26
5	A15SK004	飛鳥時代貝	直	7.5YR7/2(赤)	繩文	上				(7.6)	(12.2)					内底20.4(赤)古風
6	A15SK004	飛鳥時代	小瓶	N/A(灰)	鐵直	中	12.6	3.3	8.4							2.6 14/36 II 3
8	A15SK005	飛鳥時代	筒形	3YR7/4(赤・白)	直	中	10.3	2.0	5.4							1.3 未だ2.5YR(1561)、大正廿年手?
9	A15SK002	中世土師器	直	3YR7/4(赤・白)	C鉄直	上										打削面あり
10	A15SK002	加賀窯	直	10YR9/2(赤)	直	下										内底6.9(2.1厚)
11	A15SK002	加賀窯	直	3YR7/4(赤)	直	下										底火炎
12	A15SK002	加賀窯	直	5YR8/3(赤)	和室	上										内底5YR7/4(赤)
13	A15SK003	飛鳥	錐形	3YR7/4(赤・白)	直	中										5點丸手、S型肩手か
14	A15SK002	飛鳥	錐形	2.5YR7/4(赤・白)	繩文	上										未だ5YR7/4(赤)、17世紀前半?
15	A15SK001	飛鳥	錐形	2.5YR7/4(赤・白)	直	下										1.2 2.5YR7/4(赤)
16	A15SK002	飛鳥漆付	直	7.5R7/1(青白)	繩文	上	15.4									2/26
17	A15SK002	飛鳥漆付	直	2.5YR5/1(赤・白)	直	中										内底2.3YR5/1(赤)、上唇に漆付上 底火炎2.3YR7/4(赤)、外縁邊丸欠?
20	A15SK002	直	直	5YR7/4(赤)	直	下										
21	A15SK001	飛鳥漆付	直	N/A(灰)	直	中	13.25	5.3	1.3							残存長・最大幅・厚さ、全幅に保てる 底部残存手1/2、残2.75
22	A15SK002	土製品	直	7.5YR7/4(赤・白)	やや粗	中										

注 1 土器の寸法は、粘土ベースで(1cm)で表示し、縦・横・真・やや粗・粗の4段階に分類している。両端部の走査は、縦・横・真・やや粗・粗の4段階に分類している。

2 瓷石は、飛鳥漆付の良いものを主として、以下中・下の3段階で判定している。色調は、表面外面を記入。内面等異なる場合は、梅標欄に記入。

3 () 内の数字は復元値である。

第6表 土出土遺物観察表2

番号	遺物名	種類	形態	表面色調	寸法 (cm)	重量 g	備考
7	A15SK001	鉄道具	小刀	7.5YR7/4(赤・白)	丸刃6.7(4.2)厚0.1	14.7	
17	A15SK003	石斧	石斧	7.5YR7/4(赤)	内底11.45(残存4.84)、残高7.3、厚0.9	4.85	宝山岩

付から高台内面端部にかけて露胎である。軸調はあまり良くない。21は染付碗口縁部破片であり、口縁部外面には二条の接した線が描かれ、内面には離れた二条の線が描かれている。内外とも線より下位にも文様が施されている。20・21は15世紀～16世紀代という大雜把な時期ではあるが、ある程度郭の時期を反映しているといえよう。19は軸調と竪の表現がある可能性があることから、20・21より時期が上がる可能性がある。22はかまぼこ状の土製品である。土師質であり、やや煤けた感がある。時期等は全く不明である。

第 6 節 小 結

1. 出土遺物について

今回の調査において、図示はしていないが、縄文時代後期の土器片2点と須恵器片2点が出土している。これらは、伝波佐谷松岡寺推定地の調査区から出土しており、当該時期の土地利用の痕跡を示すものであろう。具体的な遺構は検出されていないため、その様相は不明瞭である。縄文時代の土器片は、例えば五国寺町地内の松谷寺跡の調査でも出土しており、比較的平地に近い低丘陵部の調査において出土する傾向にある。古代須恵器については、中世以降の遺跡が所在する箇所で出土する傾向にある。特に、原町に所在し「三坂越」沿いに位置する岩倉城跡からは、遊歩道を設置する際に、まとまった量の須恵器片が出土しており、立地からみて古代山林寺院などが存在した可能性が考えられる。当遺跡についても、その可能性を考慮に入れる必要がある。また、谷を挟んだ西側の丘陵部には製鉄遺跡が所在しており、その間連も視野に入れる必要があろう。

次に、中世以降と考えられる土器・陶磁器を集計すると、土師器皿8点、加賀窯5点、越前窯3点、瀬戸大窯1点、作見か備前窯1点、産地不明陶器2点、輸入白磁1点、輸入青磁1点、輸入染付2点、近世以降国産磁器2点となる。その内、一向一揆の城郭が造営された時期より前の年代を示す遺物としては、加賀窯の甕の破片が挙げられる。生産年代からみれば、15世紀より前であり、13～14世紀代に何らかの造作を行っている可能性も考えられる。しかし、発見されたのは甕片のみであり、伝世し

たものを使用した可能性も否定はできない。ただし、鎌倉時代の遺物は、金沢市の堅田城で13世紀前半の土師器皿や、能美市（旧辰口町）の虚空蔵山城では同じく加賀窯の製品が出土している。史料には、長谷までが軽海郷だという記述があり、近接している当地が全くの未開の地であったとは考えにくい。吉崎御坊や山科本願寺の例をみれば、その誘致には当該地の莊園領主層や地元の有力者層が関与しているとのことである。また、波佐谷町鎮守の磯前神社に白山宮が合祀されていることから、白山信仰が当地にも先行して浸透していた可能性は高い。また、地下式坑・横穴の存在からも何らかの先行集団が当遺跡内で造作を行っていても問題はないと考える。

波佐谷城が一揆の城郭として機能していたと考えられる時期の遺物は、越前窯の描鉢、瀬戸大窓製品、京都系土師器皿や灯明痕のある在地系土師器皿が出土している。特に、土師器皿は1560年～1580年頃とされ、まさに織田信長勢が加賀に侵攻した時期に該当する可能性が高く、波佐谷城がその戦いの時期に使用されていたことが証明されたことは大きな成果といえよう。

また、16世紀末～17世紀初頭と落城後の年代を示す遺物として、備前窯（作見窯？）の破片が出土している。天正8年（1580）に陥落した後に、小松城を居城とした村上頼勝の一族である村上勝左衛門が同11年に配されたとの伝が近世史料にあり、頼勝が越後転封となる慶長3年（1598）まで存続したと考えられている。ただし、20年弱の在城としては、遺物の出土量が少なすぎる。また、出土したSK04は、土坑というより造成痕とみられ、片付け跡の可能性もあり、在城したとみれば、廃城となる時点で片付けが行われた可能性が高い。しかし、虎口など構造の面でも織豊系城郭に改修された痕跡は認められず、数点だけの遺物では在城したとは断定することはできない。これらの遺物は、全て西郭から出土したものである点に注意しなければならない。東郭からは、越前窯焼の胴部破片及び磁器類細片が3点出土したのみで、15世紀～16世紀という大雑把な時期の把握までで、特定できる遺物は出土しなかった。伝松岡寺跡からは、中世の遺物は出土していない。

2. 郭の構造について

第3節でみた検討課題である両曲輪の構造上の違いについては、遺物の出土様相の違いから、西曲輪は居住性をある程度考慮したもの、東曲輪は純然たる軍事施設という性格の違いも考慮する必要がある（註5）。確かに郭の表面積からも、2倍以上広い西曲輪には建物が建つ十分なスペースがある。また、東郭が広さを犠牲にして三角形状という防御しなければならない面を減らす構造であることから、いよいよという時に籠城するための郭とみて、機能差と説明することもできる。ただし、多くの先学が示すように、郭の連絡性が乏しく、独立性が強いという指摘は的をえている。両曲輪間の谷部を押さえられると簡単に分断され、孤立してしまう点は一目瞭然である。能美市虎空蔵山城跡など、独立性の高い郭配置をとる城郭は他の一揆の城郭にもみられるが、これを一揆の組織内の内部対立の縛り張りへの影響とみる解釈については、慎重を期さなければならぬ。組織内の合議で意思決定していた一揆勢にとって、城郭の縛り張りに内部抗争を反映させる意味を説明せねばならないだろう。また、一揆勢は齊一性の強い縛り張りを採用しているわけではない点も挙げられ、「撲点寺院」、「郡」、「組」、「講」などの組織と城の関係性を考察する必要がある（註6）。加えて、有力門徒武士どうしの抗争もあった点を考えれば、国人・土豪の城というものは存在しなかったのかどうかを検討する必要もある。林超勝寺推定地の調査において、寺院背後の山に城郭らしき遺構が存在することも確認されている。その点においては従来の指摘どおり、まず単郭の城郭として西郭があり、信長勢との緊張状態が増した時期に東郭が整備されたという解釈も成り立つ。古い時期の遺物（加賀窯）が出土している点や、両郭間にある緩斜面の造作が簡素であることからもいえるのかもしれない。同じく加賀窯の出土している虎空蔵山城跡においても、二の丸には2時期以上の利用時期があり類例となる可能性がある。し

かし、最終形態を残している城郭において、郭の造成過程にみられるこれらの課題の解明にはどのような調査方法が有効なのだろうか。今後の課題である。

次に石積（裏込めの有無を調べていないためここでは石積と呼ぶ）。以下同）の造営主体について考えてみたい。落城後に織田系の勢力が持った記録がなく、同様に石積の使用が認められる能美市虎空藏山城跡と比較を行うことで、検討するものとする。石積は大手及び大手に至る通路や二の丸においてみられる。ここでは、報告書の記述が詳しい二の丸虎口東側土壘外縁のものを対象とする。これは、郭外周を囲む横堀（薬研堀）の郭側で、隣接する土壘の外縁に検出されたものである。径30～60cmの石材を幅6.5m、高さ1mに積んだものである。基本的には基底部には50cm台の石材が使用され、上位部に30～40cmの石材が使用されている。概ね4段の段数を確認することができ、西方向へ基底部のレベルが上がるにつれて段数を減じている。野面・乱積みといえ、波佐谷城跡の石積0.1と積み方や形状及び規模が類似している。土壘の内面と外面という差異が存在するが、現地で採取される凝灰岩を使用している点や、土留めを主目的としている点など共通項も多い。よって、これらの石積みに関しては、一向一揆勢が構築したものと評価するものである。現在では、山科本願寺跡の発達した繩張りは、焼失する天文元年（1532）段階で成立していたという見解が主である（註7）。その調査において、石垣が検出されている。残存高で高さ約50cmだが4～5段積まれおり、基底部には50cm台の石材を使用し、上位にはそれより小ぶりな石材を使用している。野面・乱積みであり、類似性が認識できる。ただし、山科本願寺跡のものは、砂礫土による裏込めが確認されている。波佐谷城や虎空藏山城跡では、裏込めの確認作業を行っていないため、不確定な要素を残すが、このような石垣が、すでに山科本願寺段階で確認されていることはいえる。よって、波佐谷城跡や虎空藏山城跡に石積が採用されていても問題はないと考える。さらに、樹形虎口化した鳥越城とは大きく異なる点も傍証といえよう。波佐谷城跡の石積みに関しては、腐葉土の堆積により地表面の観察では全く分らなかったものである。その発見は、偶然によるものであり、発掘調査の入っていない他の城郭においても今後発見され類例が増える可能性はあると考えている。

なお、東郭集石造構をどう解釈するかという課題も存在している。「飛躍」とみるのであれば、ほとんど使用されずに落城後放置されることになる。一方で、「改修のための裏込め用栗石」とみるのであれば、これも結局改修せずに捨て置かれたものとなる。当然、他の解釈も存在する可能性があり、類例を待つ評価するものとしたい。

波佐谷城跡は、地下式坑・中世横穴の造営から一家衆寺院である波佐谷松岡寺を経て波佐谷城へと変遷していくという特別な歴史をもつ。小松の歴史を語る上で、その遺跡群の価値は非常に高いといえ、今後も適切に保存・活用していく必要があるといえる。

註

- (1) 宮下幸夫2007年「北陸の地下式坑について」『地下式坑を考える—地下式坑の全国集成とその検討』第3回東国中世考古学研究会大会資料集
- (2) 滝川重徳氏教示
- (3) 同上
- (4) 宮下幸夫氏教示
- (5) 田村昌宏氏教示
- (6) 谷内尾晋司2006年「加賀II地区城館跡の概要」『石川県中世城館跡調査報告書III（加賀II）』石川県教育委員会

(7) 山科本願寺・寺内町研究会編1998年『戦国の寺・城・町―山科本願寺と寺内町―』法藏館

引用参考文献

- 北陸中世土器研究会編1997年『中・近世の北陸—考古学が語る社会史』 桂書房
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター2001年『瀬戸大窯とその時代』
日本貿易陶磁研究会1982年『貿易陶磁研究2』
浅香年木1993年「加賀国」「講座 日本莊園史6」 吉川弘文館
上田秀夫1982年「14世紀～16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究2」日本貿易陶磁研究会
山本信夫1995年「〔2〕中世前期の貿易陶磁器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編
真陽社
石川県教育委員会2007年「石川県中世城館調査報告書Ⅲ（加賀II）」
石川県金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004年『市内城館調査報告書』
石川県金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006年『市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
辰口町教育委員会1988年「辰口町虚空蔵山城跡」
石川県小松市2002年『新修小松市史』資料編4 国府と莊園

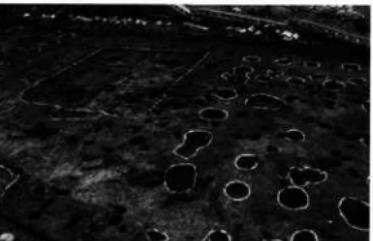


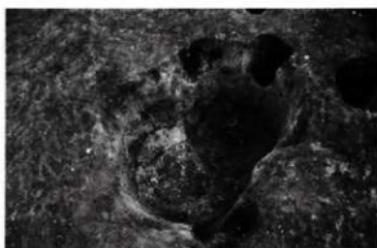
SI18、SK603、SK604、SK605、SJ601の状況



SK603(左)とSJ601(右)の状況

写真図版2
矢田野遺跡発掘調査





SB38 P1 内部状況



SI20 1次完掘状況



SI20 壁周溝の状況



SI20
壁周溝内ピット
検出状況



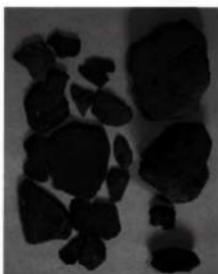
SI18出土遺物(土器器)



SI18出土遺物(須恵器)



SK603出土遺物



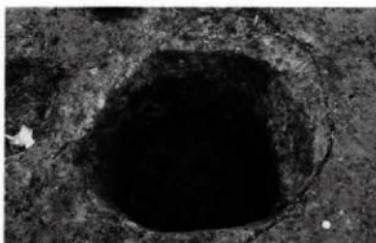
SI18周辺から
出土した焼成
粘土塊と
焼け弾き品



発掘調査風景



S D O 3 遺物出土状況



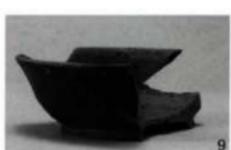
S E 0 1 (SK 0 1)



完掘状況



6



9



10

須恵器



14



23 25

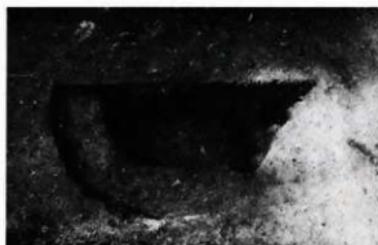
26

24



15

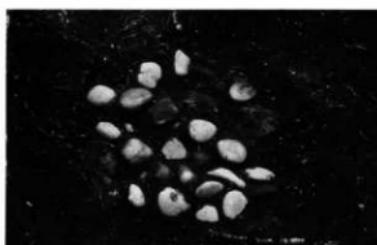
土器・陶器・磁器



A区試掘溝1 SK01



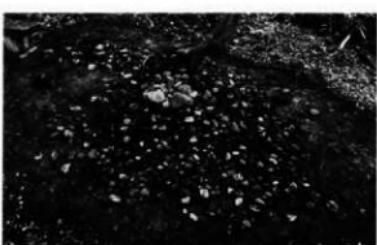
A区試掘溝1 石列



A区試掘溝3 集石遺構



A区試掘溝3 掘削状況



B区 集石遺構



B区 階段と石積01



B区 石積02



B区 階段検出状況



B区 石積 01 遠景



B区 石積 01 近景



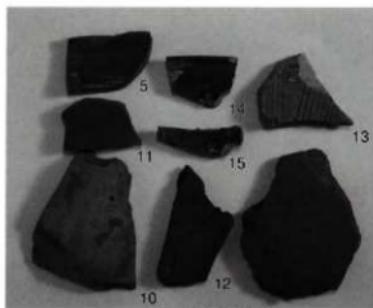
土師器四



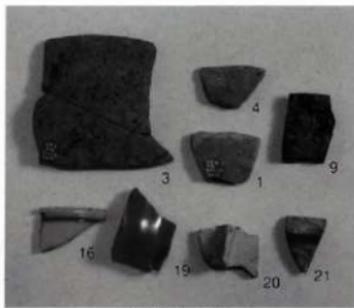
中世陶器



鉄製品



中世・近世陶器



中世土器・磁器

報告書抄録

小松市内遺跡発掘調査報告書 V
矢田野遺跡・千代オオキダ遺跡・波佐谷城跡

平成21年3月31日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91 TEL (0761) 24-8132
印 刷 (株)ゲンダ美術印刷